

那珂 52

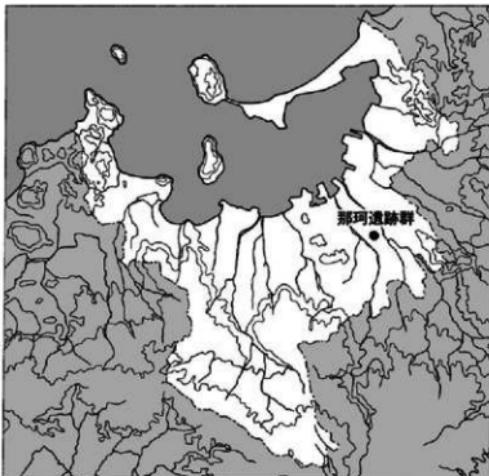
—那珂遺跡群第80・83・84・98・110・118次調査報告—

2009

福岡市教育委員会

那珂 52

—那珂遺跡群第80・83・84・98・110・118次調査報告—



遺跡略号 NAK-80・83・84・98・110・118
遺跡調査番号 0122-0146-0217-0421-0550-0719

2009

福岡市教育委員会



那珂遺跡群第80次調査区全景（北から）



那珂遺跡群第83次調査区全景（西から）

序

中国の史書にみえる「奴国」の故地である福岡平野において、福岡市博多区の駅南から東光寺・那珂・竹下地区に広がる那珂・比恵遺跡群は「奴国」の中核をなす地域であったと考えられ、発掘調査によって往時の繁栄を物語る重要な遺構・遺物が次々に発見されています。しかし、これらの大半は開発とともにさう事前調査による発見であることから、遺跡の保護は困難な状況にあります。

福岡市教育委員会では、この那珂・比恵遺跡群を保護するとともに、開発によってやむなく破壊される場合には事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。本書は民間の宅地開発にともない国庫補助を受けて実施した調査の記録をおさめたものです。都合6回の調査では、弥生時代の壺棺墓地や古墳時代前期の前方後方墳などを確認し、奴国の実像に迫る新たな資料を得ることができました。

発掘調査に際し、地権者の皆様には文化財保護についての快いご理解をいただくことができました。また、地域の皆様にご協力を頂き、調査を円滑に進めることができました。厚くお礼申し上げます。

調査に関わられた全ての方々に対し、深く感謝申し上げますとともに、この報告書が広く活用され、文化財保護の理解を深める一助となることを願います。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　　言

1. 本書は平成13・14・16・17・19年度に福岡市教育委員会が行った、福岡市博多区所在の那珂遺跡群第80・83・84・98・110・118次発掘調査の報告書である。
 2. 発掘調査及び整理報告書作成は、個人住宅建設等に伴う国庫補助事業として実施した。
 3. 発掘調査及び整理報告書作成は、福岡市教育委員会文化財部の下記担当者が実施した（所属は本年度）。
- 第80・83・110次；吉武 学（文化財整備課）
第84次 ；久住猛雄（埋蔵文化財第1課）
第98次 ；荒牧宏行（埋蔵文化財センター）
第118次 ；濱石哲也（埋蔵文化財第1課）
4. 調査に関する項目、遺構・遺物の実測・製図者、写真撮影者、執筆者等は各章とびらに記載した。
 5. 本書の編集は吉武が行った。
 6. 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

目　　次

第一章 那珂遺跡群の地理的位置と歴史的環境（吉武 学）	1
第二章 那珂遺跡群第80次調査の記録（吉武）	5
第三章 那珂遺跡群第83・84次調査の記録（吉武・久住猛雄）	37
第四章 那珂遺跡群第98次調査の記録（荒牧宏行）	81
第五章 那珂遺跡群第110次調査の記録（吉武）	93
第六章 那珂遺跡群第118次調査の記録（濱石哲也）	139

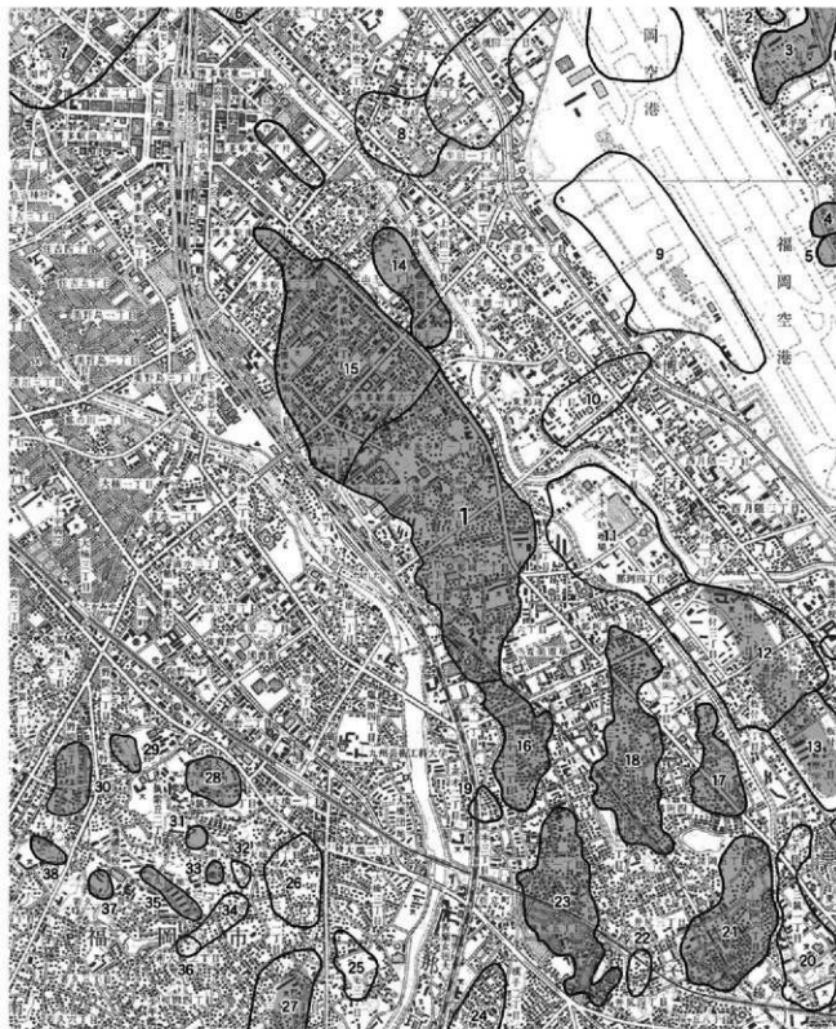
第一章 那珂遺跡群の地理的位置と歴史的環境

那珂遺跡群は、福岡平野を北流する御笠川・那珂川等の中小河川により形成された低平な台地上に立地する。この台地は福岡市博多区博多駅南から那珂・南区五十川・井尻、春日市須玖を経て那珂川町安徳へと断続的に連なる洪積中段丘面のひとつであるが、これらは主に阿蘇山起源の広域テフラであるAso-4火碎流堆積物によって構成され、沖積低地から3~20mの比高差を有するローム台地となっており、台地の末端部は河川等の浸食により細かく枝分かれし、あるものは八つ手状に、またあるものは低平な独立丘となっている。下流域の博多駅南から那珂方面の台地には侵食が特に顯著であるが、1930年代の耕地整理と以後の都市開発により平坦に改変され、現在ではそのような地形を地表に見ることはできない。那珂遺跡群の独立台地は、北西~南東方向に細長く、南北約2.4km、東西最大幅約0.8kmの広大な面積を有するため南北に二分し、北半を比恵遺跡群と呼び分けている。海拔標高は台地南端の最高所で10.4m、北端で5m前後を測り、途中波打ちながら北へ緩く傾斜している。西方は那珂川により銛削られて段丘崖となり、高宮丘陵あたりまで氾濫原となって広く遺跡の空白地域となっている。東は御笠川の蛇行により削られるが、河川のすぐ脇で遺構が確認されることから、本来は台地がもう少し東へ伸びていたと考えられる。北は低湿地を挟んで砂丘へと続き博多遺跡群が、南は浅い鞍部を介して更に細長い台地が続き五十川遺跡がそれぞれ位置している。

周辺の台地上には、南から麦野遺跡群、井尻B遺跡、諸岡A・B遺跡、高畠遺跡、板付遺跡があり、周辺低地では弥生時代から水田が営まれたと考えられるが、水田の継続經營と後世の地形改変のため水田遺構の検出は困難で、板付遺跡、那珂君体遺跡、東比恵3丁目遺跡など数例に留まっている。

那珂遺跡群の台地は生活適地として一部が旧石器時代から利用を受けているが、続く縄文時代には集落は認められず、低丘陵上に繁茂した樹木がなす森林は、むしろ狩猟・採集の対象としての利用を受けていたと想像され、沖積低地を利用した水田耕作を基盤とする農耕集落が弥生時代早期に台地縁辺部に成立すると、以後は森林が切り開かれて次第に内部まで利用を受けるようになったと想定される。やがて、奴国あるいは那珂郡の中心的な役割を担う地域のひとつに成長したとみられ、各時代の重要な遺構・遺物が多く認められる。これらについては既刊の各報告書に詳しいが、那珂遺跡群を特徴付ける遺構を以下にあげておきたい。

- ① まず丘陵縁辺部に初期農耕集落が取り付く。37次で弥生時代早期の二重環濠を確認しており、次いで10・14次でも集落が成立したとみられる。弥生時代前期~中期前半には集落が分散拡大したとみられ、環濠を67次で確認し、他にも貯蔵穴を中心とする遺構を各調査で検出している。また比恵遺跡群・五十川遺跡でも貯蔵穴を多数確認している。
- ② 弥生時代中期後半には台地全域で集落・墓地が営まれ、全体的には巨大集落の観をなす。また、20・22・114次で台地を横断する溝、22次では大型建物、21次では墳丘墓などの特殊遺構を確認している。
- ③ 那珂八幡古墳の造営と前後して弥生時代末から古墳時代初頭に並走する2条溝（道路）が1.5km以上にわたって通され、これを軸として計画的に集落・墓地が配置される。
- ④ 5~6世紀には集落が減少するが、6世紀中葉に東光寺剣塚古墳が営なされたのち、後半~末にかけて堅穴住居や掘立柱建物からなる集落が再び拡大する。更に7世紀にかけて一部でこれらの集落が廃されて倉庫群等に変わる現象が認められ、瓦等の出土から古代官衙施設の造営に伴って集落の強制撤去が行われたと推定される。那珂遺跡群は7世紀から古代にかけて、对外軍事拠点や評議のち郡衙などの官衙が置かれた有力候補地とみられており、今後にその発見が期待される。
- ⑤ 中世後期の室町時代から戦国時代には各所に大きな溝が掘り巡らされており、大内氏や大友氏家臣団の知行地との関連が指摘されているが、この方面的実態解明は今後の課題といえよう。



- ※アミは台地・丘陵上の遺跡
1. 那珂遺跡群
 2. 上白井遺跡
 3. 席田青木遺跡
 4. 久保園遺跡
 5. 席田大谷遺跡
 6. 吉塚遺跡
 7. 博多遺跡群
 8. 東比恵三丁目遺跡
 9. 雀居遺跡
 10. 東那珂遺跡
 11. 那珂君体遺跡
 12. 板付遺跡
 13. 高畠遺跡
 14. 山王遺跡
 15. 比恵遺跡群
 16. 五十川遺跡
 17. 諸間B遺跡
 18. 諸間A遺跡
 19. 井尻A遺跡
 20. 三筑遺跡
 21. 低原遺跡
 22. 井尻C遺跡
 23. 井尻B遺跡
 24. 横手遺跡
 25. 三宅C遺跡
 26. 大橋E遺跡
 27. 三宅B遺跡
 28. 野間B遺跡
 29. 野間A遺跡
 30. 中村町遺跡
 31. 大橋A遺跡
 32. 大橋C遺跡
 33. 大橋D遺跡
 34. 三宅A遺跡
 35. 大橋B遺跡
 36. 和田麻池遺跡
 37. 若久B遺跡
 38. 若久A遺跡

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

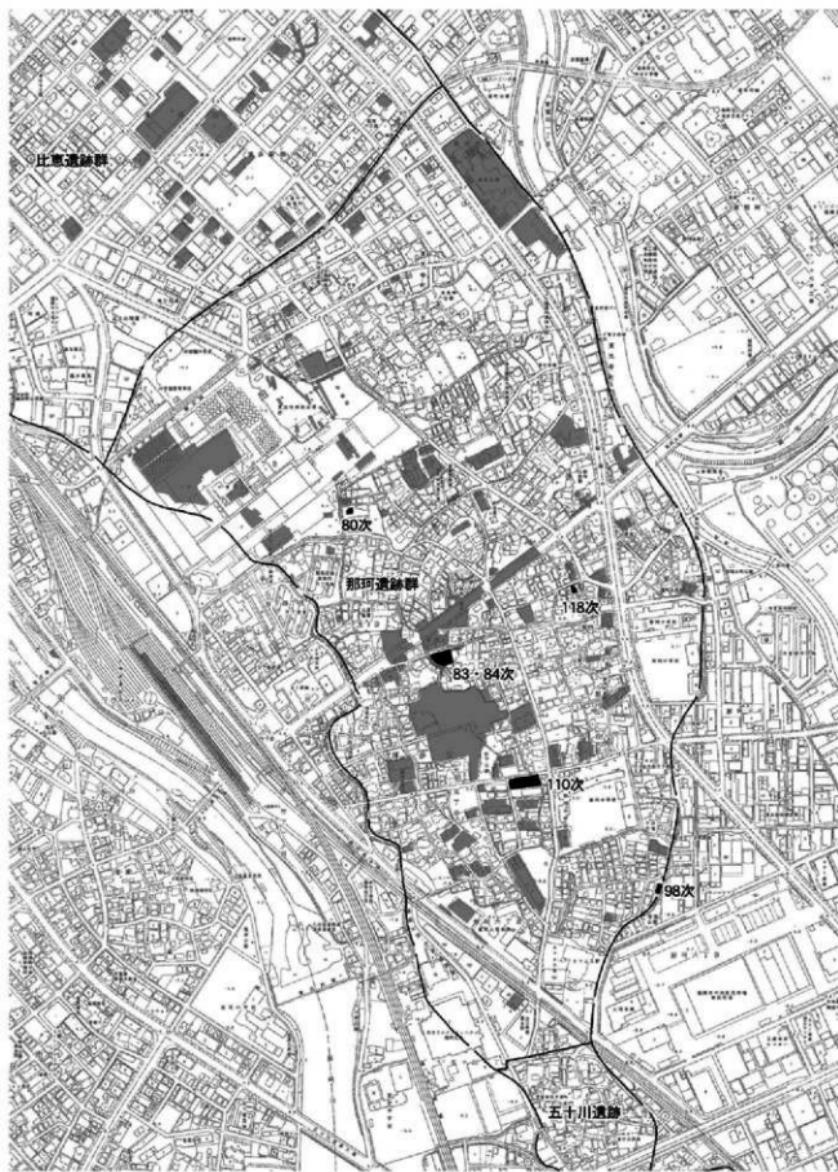


Fig.2 那珂遺跡群の調査地点の位置 (1/8,000)

第二章 那珂遺跡群第80次調査の記録

遺跡名	那珂遺跡群第80次調査		遺跡調査番号	0122	遺跡略号	NAK-80
調査地地籍	博多区那珂1丁目681-1			分布地図番号	0085	
開発面積	50m ²	調査対象面積	50m ²	調査面積	52.5m ²	
調査期間	2001年（平成13年）7月31日～8月16日					

例　言

1. 本章に使用した遺構実測図の作製は吉武　学、鐘ヶ江賢二、鈴原俊行が行った。
2. 本章に使用した遺物実測図の作製は田中克子が行った。
3. 本章に使用した図の製図は田中が行った。
4. 本章に使用した写真は吉武が撮影した。
5. 本章に使用した方位は全て磁北である。
6. 本章の執筆は吉武が行った。

本文目次

1. 調査に至る経過	7	5. 弥生時代の遺構と遺物	10
2. 調査の組織	7	6. 古墳時代の遺構と遺物	21
3. 第80次調査地点の位置と周辺の調査例	7	7. その他の遺構と遺物	26
4. 発掘調査の概要	9	8. 小結	29

擇図目次

Fig. 1 周辺の調査地点 (1/3,000)	8	Fig. 13 SK-010出土遺物実測図 (1/3)	19
Fig. 2 第80次調査区の位置 (1/300)	8	Fig. 14 土坑SK-003・009実測図 (1/40)	19
Fig. 3 第80次調査区の遺構配置 (1/50)	9	Fig. 15 SK-003・009出土遺物実測図 (1/3)	20
Fig. 4 壺棺墓SK-011・SK-014実測図 (1/20)	10	Fig. 16 竪穴住居SC-002実測図 (1/40)	21
Fig. 5 SK-011出土遺物実測図 (1/8)	11	Fig. 17 SC-002出土遺物実測図 (1/3)	22
Fig. 6 壺棺墓SK-012実測図 (1/20)	12	Fig. 18 溝状遺構SD-001実測図 (1/40)	23
Fig. 7 SK-012出土遺物実測図 (1/8)	13	Fig. 19 SD-001出土遺物実測図 I (1/3)	24
Fig. 8 壺棺墓SK-013実測図 (1/20)	14	Fig. 20 SD-001出土遺物実測図 II (1/3)	25
Fig. 9 SK-013出土遺物実測図 (1/8)	15	Fig. 21 土坑SK-006・008実測図 (1/40)	27
Fig. 10 壺棺墓SK-015～017実測図 (1/20)	16	Fig. 22 SK-006・008出土遺物実測図 (1/3)	27
Fig. 11 SK-014～017出土遺物実測図 (1/8)	17	Fig. 23 その他の出土遺物実測図 (1/3)	28
Fig. 12 土壙墓SK-010実測図 (1/20)	18	Fig. 24 那珂遺跡群の壺棺墓 (1/25,000)	29

図版目次 (30～36頁)

PL. 1 1. 調査区全景 (南から)	2. 調査区全景 (北から)
PL. 2 1. 壺棺墓全景 (北から)	2. 壺棺墓SK-011 (北東から)
PL. 3 1. 壺棺墓SK-012 (北東から)	2. 壺棺墓SK-013 (北から)
PL. 4 1. 壺棺墓SK-012・013・015 (北西から)	2. 壺棺墓SK-014 (西から)
3. 壺棺墓SK-015 (西から)	4. 壺棺墓SK-016 (東から)
5. 壺棺墓SK-017 (北から)	6. 壺棺墓SK-017 (北西から)
PL. 5 1. 土壙墓SK-010 (北東から)	2. 土坑SK-003 (北西から)
PL. 6 1. 竪穴住居SC-002 (北西から)	2. 溝状遺構SD-001 (南から)
PL. 7 第80次調査出土遺物 (縮尺不同)	

1. 調査に至る経過

福岡市博多区那珂1丁目681-1において、廣田隆邦氏による戸建て住宅建設が計画され、平成13年6月18日付で福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（以下「埋文課」）に計画地内の埋蔵文化財の事前調査依頼があった。申請地は福岡市文化財分布地図では那珂遺跡群に含まれ、西側に隣接するアサヒビール工場地内ではこれまでに数次の発掘調査も実施されており、かつ北側の隣接地においても過去に壇棺墓の不時発見による第3次調査が行われていたため、申請地内に遺跡が包蔵されていることは確実とみられた。このため、埋文課では平成13年7月5日に確認調査を実施し、申請地内に設けた1本のトレンチにおいて弥生時代とみられる竪穴住居跡の一部などを確認し、工事計画対象地内に遺跡が存在することを確認した。試掘の結果を踏まえ、埋文課では遺跡の保存について事業者と協議をもったが、遺構面が地表下30cmと浅いため現状保存は困難な状況にあり、やむなく記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は盆休みを挟んで平成13年（2001）7月31日から同年8月16日に埋文課が実施し、整理報告書作成は業務多忙のためやや遅れて平成20年度に行ったが、個人住宅であるためともに国庫補助の適用を受けた。

2. 調査の組織

調査にあたり、廣田隆邦氏とご家族の方々にご理解とご協力を頂いた。記して感謝申しあげたい。調査は以下の組織で行った。

調査主体	福岡市教育委員会 教育長 生田征生（調査時）、山田裕嗣（現）
調査総括	埋蔵文化財課長 山崎純男（調査時）、山口讓治（現；埋蔵文化財第1課長）
	埋蔵文化財課調査第2係長 力武卓治（調査時）、米倉秀紀（現；調査係長）
調査庶務	文化財整備課管理係 御手洗 清（調査時）、井上幸江（現；文化財管理課）
調査担当	埋蔵文化財課事前審査係 大塚紀宣（試掘担当）
	埋蔵文化財課調査第2係 吉武 学（本調査担当）
調査協力	石川君子、川崎 良、永隈和代、早川 浩、廣田裕治、宮崎タマ子、山内 恵、渡辺淑子（五十音順、敬省略）
整理協力	田中克子（技能員）、青木悦子、下山慎子、萩尾朱美、森 寿恵（五十音順、敬省略）

3. 第80次調査地点の位置と周辺の調査例 Fig.1・2

那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に立地する那珂遺跡群の西部に位置し、南東200mに那珂八幡古墳を、北西200mに東光寺剣塚古墳を望む。現況平面図（Fig.1）を見ると、周辺では第115次の東に海拔標高10.2mと丘陵が最も高くなる部分があり、第80次の東を通って尾根が北へ伸びていることが分かる。この尾根の東西は傾斜の緩い台地となり、西端は那珂川により削られて段丘崖となっている。本調査地点はこの尾根筋に位置する。北側には第3次調査地点が隣接し、1977年に専用住宅建設に伴って弥生時代中期の壇棺墓1基を緊急調査している。詳細は未報告であるが、今回の調査で確認した壇棺墓群と一連のものであろう。また、周辺には過去に調査が行われた箇所が多いが、うち壇棺墓を検出した例として、第16次・第100次の一群、第89次・99次の一群があり、この2グループは本調査地点と同じく尾根筋上に立地している。さらにこの尾根から西へ派生した丘陵上に位置する第21次・50次では区画墓とみられる壇棺墓群を確認している。

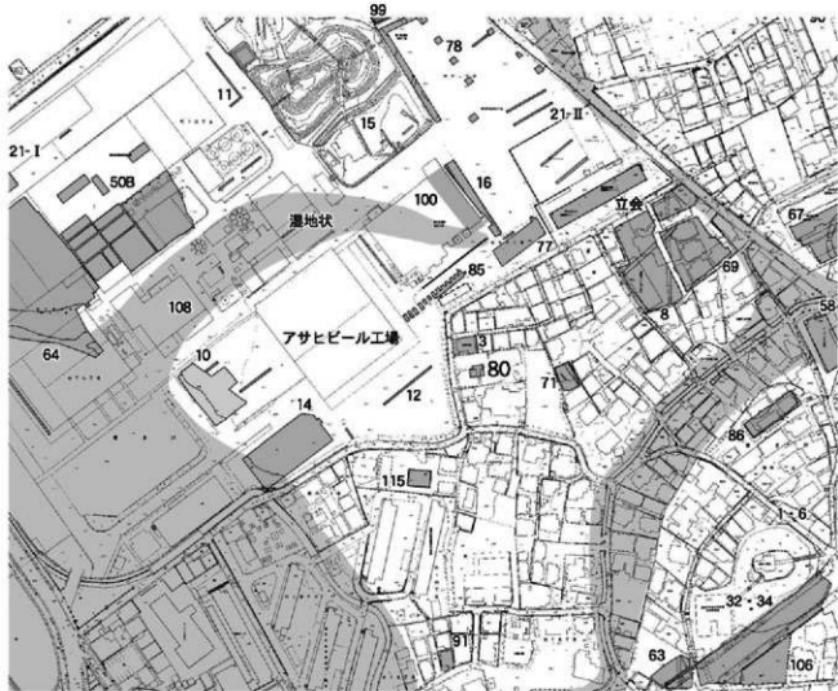


Fig. 1 周辺の調査地点 (1/3,000)

数字は調査次数

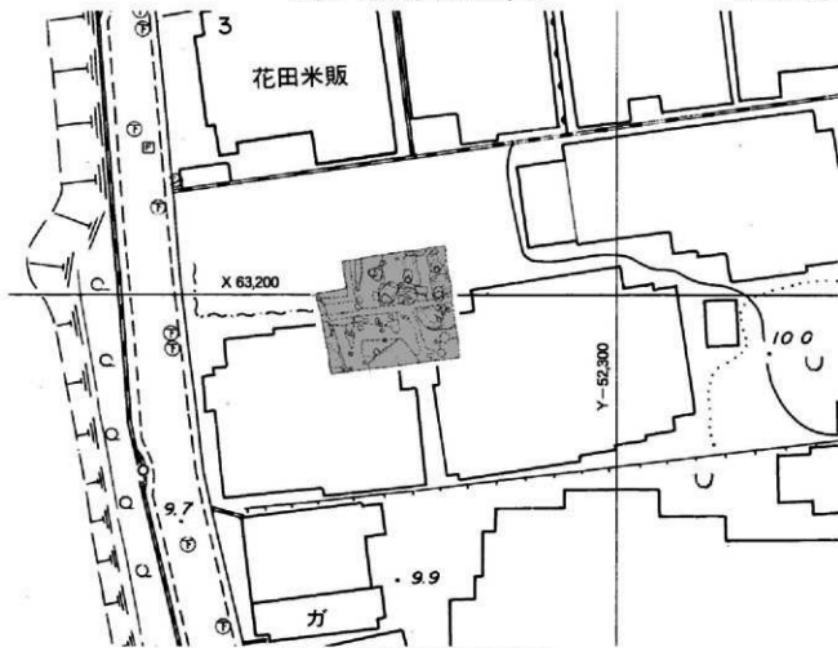


Fig. 2 第80次調査区の位置 (1/300)

4. 発掘調査の概要 Fig.2・3, PL.1

調査前は住宅が解体された更地となっており、地表面の標高9.6m前後。住宅建設が予定された敷地中央部分のみを調査対象とし、調査区の形状はやや東西に長い長方形で、東西長8m、南北長7mを測る。表土の厚さは約30cmである。遺構面の標高は9.2~9.3mで、若干北へ下っており南北端での標高差が10cmほどある。遺構面は鳥栖ロームで、小児墓棺が輪切りになった状態で出土したことから、50cm前後の削平を受けていると考えられる。

検出遺構は、弥生時代中期後半~後期初頭の壺棺墓9・土壙墓1・土坑1・溝1、古墳時代後期の竪穴住居1・溝1、及び中世の土坑1である。壺棺墓は3基が成人棺で、うち2基が単棺、1基が合口である。他は小児棺で、調査区内で4基を確認したほか、壁面に2基の小児棺が認められた。土壙墓を含めて、副葬遺物はなかった。出土遺物は、壺棺を含めてコンテナケース24箱を数える。

遺構実測の基準線は調査区の形状に合わせて任意に設定し、後『博多区・南区内(那珂~井尻地区)遺跡基準点測量委託 四級基準点測量成果簿(平成6年2月)』の成果を利用して国土座標(第II系)上に位置づけた。標高もこれによる。

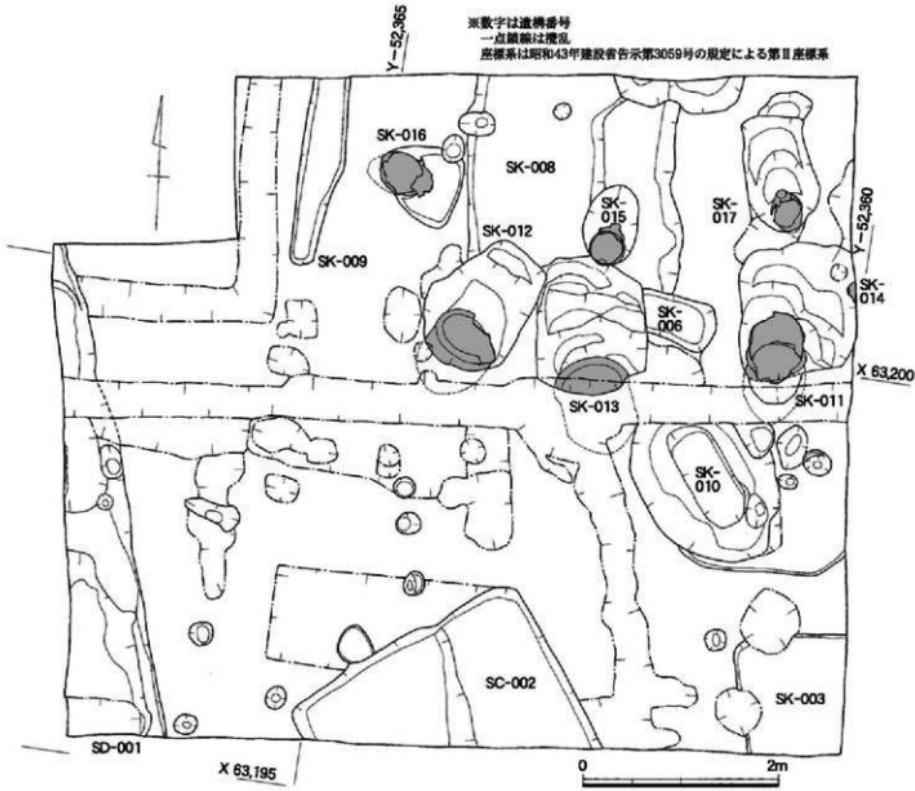


Fig.3 第80次調査区の遺構配置 (1/50)

5. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 壺棺墓

壺棺墓は調査区内で成人棺3基、小児棺4基を確認した。うち、小児棺1基は調査区壁に一部がかかるもので、全てを取り上げてはいない。この他、調査区壁に一部が露出した小児壺棺が2基あったが、取り上げずに埋め戻した。壺棺墓・土壙墓は調査区の北東隅に近接して分布しており、特定の範囲内に密集して営まれた状況を示している。また小児棺を除いて主軸方位が概ね南北を指向し、時期的にも大半が弥生時代中期末の立岩式であることから、短期のうちに集中して造られたものと考えられる。さらに、古墳時代の遺構は弥生時代墓群と重複しない位置に検出されたことから、少なくとも古墳時代後期頃までは壺棺墓群上に盛土等が残っていた可能性がある。

壺棺墓SK-011 Fig.4, PL.2

調査区の東端に検出した成人壺棺墓である。壁際に位置するが、墓壙は調査区内に収まっている。棺内に陶磁器を含む土砂が落ち込んでおり、近世の畑作時などの際に陥没したものと考えられる。また、壺棺墓の直上には現在も使用されている水道管と下水管が走っており、墓壙の一部を破壊している。墓壙掘り方の平面形は南北にやや長い隅丸長方形を呈し、南北1.4m、東西1.2mを測る。底面の南へ向かって円錐形の斜坑を掘る。北側は階段状に平坦面を三段設けており、埋置の際の足場に供したのであろう。斜坑は壺棺の径ぎりぎりに掘られており、そこに下葬を差し込んでいる。遺構検出面から墓壙底面まで1.1mを測り、墓壙は暗褐色粘質土で埋め戻されていた。棺は上下ともに壺形土器を用いた合わせ口であるが、調査時には接合部に粘土等による覆いは認められなかつた。また、上壺に口縁部が全く残っておらず、調査時は打ち欠きであろうと考えていたが、整理接合の結果、

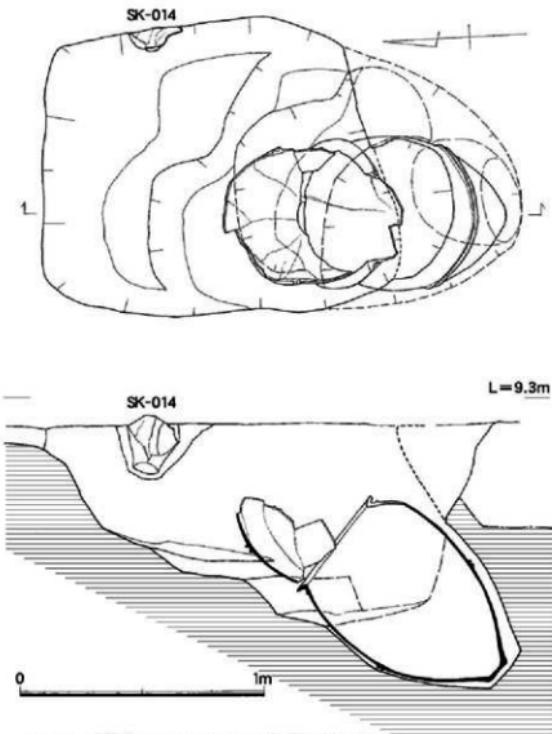


Fig.4 壺棺墓 SK-011・SK-014 実測図 (1/20)

底部を除いて完形に復原できたので、擾乱等により脱落していたものと推測される。下壺は上壺よりひと回り大きな土器を用いており、土圧で少しつぶれているが、ほぼ完全な状態を保っていた。主軸方位は磁北より $2^{\circ}40'$ 東偏し、 40° の傾斜で埋置されている。

棺底の排土を水洗したが、人骨を含めて遺物は全く出土しなかった。墓壙から弥生土器が出土した他、棺内から陥没時に混入した青磁、瓦、土師質土器などの破片等が少量出土している。

SK-011出土遺物 Fig.5, PL.7

1は上壺である。口縁は逆「L」字形に屈曲してやや外反し、口縁端部は丸く納める。胴部最大径はやや上位にあり、口径をかなり上回る。口縁部直下には断面三角形の突帯を貼り付け、胴部中位には断面台形の貼付突帯を二条巡らせ。削平により底部を失うが、他はほぼ残存する。内外面とも綴の刷毛目調整だが、外面は器面が荒れて残りが悪い。内面の刷毛目は外面に比べてやや目が粗く、底部以外はナデ調整を加えて大半をスリ消している。口縁部内外と突帯周辺に横ナデ調整を加える。淡橙褐色を呈し、胎土に大小の砂粒を多量に含み、焼成は良好で、胴部の片側の突帯上下に黒斑がある。外面の口縁直下に黒色の部分が僅かに残っているが、意図的に黒塗りを施したかどうかが判然としない。口径44.9cm、胴部最大径54.7cmを測り、器高は73cm前後に復原し得る。2は下壺である。口縁は逆「L」字形に屈曲し、屈曲部内面は小さく面取りされ平坦面をなす。胴部最大径はやや上位にあり、口径を少し上回るが、上壺ほど胴の張りは顕著ではない。突帯の貼付位置と形状は上壺に類似するが、胴部突帯の貼付位置が上壺に比べるとやや低い位置にあり、かつ突帯が細身である。底部は小さい平底である。外面は器面が荒れて観察しにくいが綴の刷毛目調整とみられ、内面はナデ調整である。淡橙褐色を呈し、胎土に大小の砂粒を多量に含み、焼成は良好で、突帯下方の一ヵ所に黒斑がある。色調・胎土は上壺に近似している。口径58.6cm、胴部最大径63.0cm、器高84.6cmを測る。

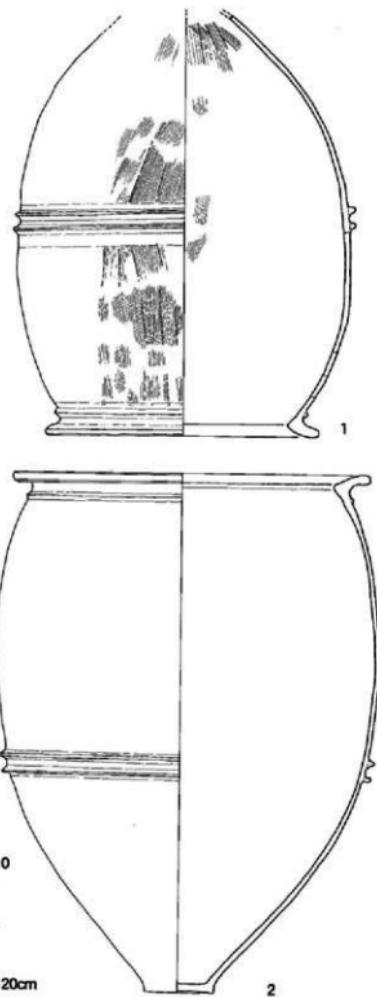


Fig.5 SK-011 出土遺物実測図 (1/8)

斎棺墓SK-012 Fig.6、PL.3

調査区のはば中央に検出した成人斎棺墓である。北側を中世の土坑SK-008に、西側を擾乱坑に切られる。また、後述の斎棺墓SK-013の墓壙を明らかに切っており、SK-013に寄り添うように隣接して埋葬されたと考えられる。墓壙掘り方平面プランはやや不整な隅丸長方形を呈し、 $1.4m \times 1.0m$ を測る。南西へ向かって斜めに掘り下がっており、北側の斜面は階段状に削り、二段の平坦面を造り付け、斎棺埋置時の足場としている。墓壙下部は斎棺の形状に合わせてぎりぎりに掘られている。検出面から墓壙底面まで $1.4m$ を測り、暗褐色粘質土で埋め戻されていた。単棺で、開口部には粘土による目張り等は認められなかったが木蓋であろう。斎棺は土圧による歪みも少なく、ほぼ完全な状態で残っていたが、掘削時に口縁部の一部が脱落した。主軸方位は磁北より $28^{\circ}25'$ 東偏し、 45° の傾斜を持たせて埋置されている。

棺内底面の堆土を水洗したが、人骨を含む遺物は全く出土しなかった。墓壙からは斎棺の他に弥生土器片19点が出土した。

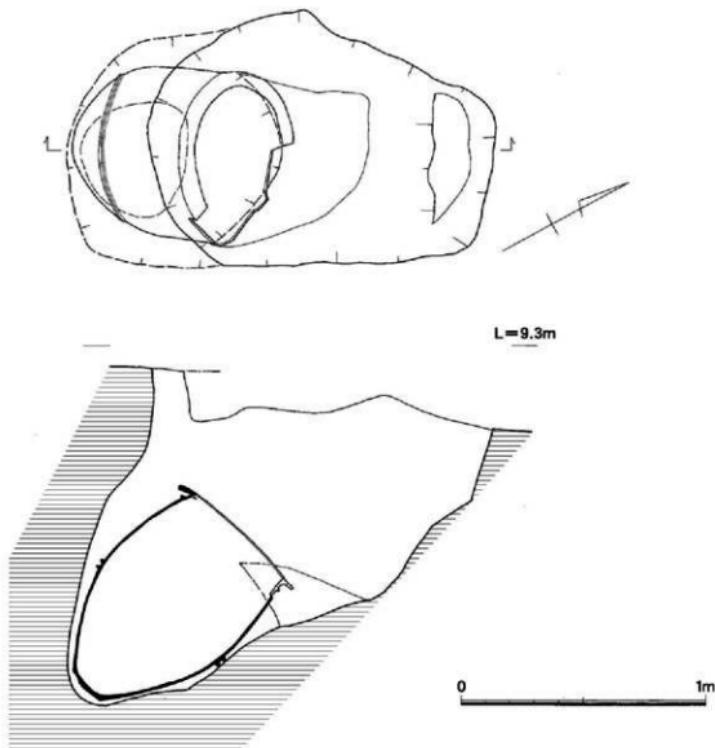


Fig.6 斎棺墓 SK-012 実測図 (1/20)

SK-012出土遺物 Fig.7, PL.7

3は壺棺である。口縁は逆「L」字形に屈曲し、内端が短く突出する。外端は丸くおさめる。胴部最大径は上位にあるが口径より小さい。口縁部直下の突帶一条は断面台形を呈するが、後があまく三角形に見える。胴部中位には下方に垂れた断面台形の貼付突帶二条を巡らせる。外底部が剥がれ落ちているが、意図的に打ち欠いたものではなく、焼成後に剥落したものであろう。外面は器面の残りが悪いが刷毛目調整とみられ、ナデ調整を加えて大半をすり消している。内面はナデ調整である。口縁部内外面と突帶周辺に横ナデ調整を加えて仕上げる。暗橙褐色を呈し、胎土は砂粒が比較的少なく精良な印象を与え、焼成は良好で、胴部の三方に黒斑がある。口径65.3cm、胴部最大径63.4cmを測り、器高は88cmに復原し得る。他の壺棺と比較して胴部上半がさほど内傾せず、口径が胴部最大径を上回り砲弾形に近いことから、古相を示す土器といえよう。

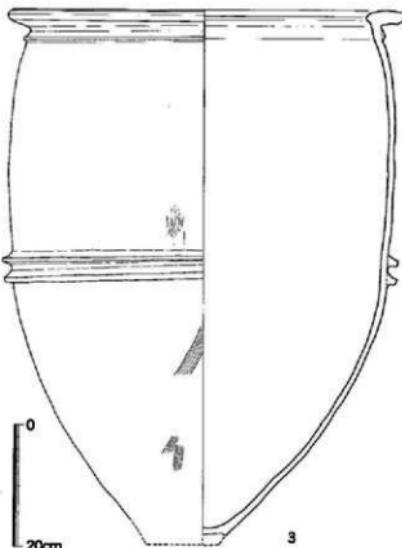


Fig.7 SK-012 出土遺物実測図 (1/8)

壺棺墓SK-013 Fig.8, PL.3

壺棺墓SK-012の東に隣接し、これに先行する成人壺棺墓である。今回確認した成人壺棺墓3基のうちでは法量が最大で、墓壙掘り方が最も深い。壺棺の直上に現在も使用されている水道管と下水道管が埋設されており、壺棺墓壙の一部を破壊するとともに調査に多大な支障をきたした。墓壙は北側を中心土坑SK-008に、東側を擾乱坑と後世の土坑SK-006によって一部を破壊されている。また北西隅で壺棺墓SK-012に切られている。掘り方平面形は南北にやや長い隅丸長方形を呈し、1.4m×1.15mを測る。南へ向かって砲弾形に斜坑を掘り抜き墓壙としており、北側一東側に階段状に五段のステップを造る。最下段のステップのみ壺棺の東側に沿っており、埋納時の足場としたものと考えられる。墓壙は壺棺の形状に合わせてぎりぎりの大きさに掘られており、底面は平坦ではない。棺は墓壙底面からやや浮いた状態にある。検出面から墓壙底面まで1.7mを測り、墓壙は暗褐色粘質土で埋め戻されていた。単棺で、木蓋と考えられるが、開口部には粘土による目張り等は認められなかった。壺棺は土圧によりややつぶれているものの、ほぼ完全な状態で残っていたが、掘削時に口縁部の一部が脱落した。主軸方位は磁北より $16^{\circ}20'$ 西偏し、 47° の傾斜を持たせて埋置されている。隣接する壺棺墓SK-012と墓壙の形状や埋置角度等の埋納状態が近似しており、おそらく時期的にも近接して営まれたものと考えられよう。

棺内底面の耕土を水洗した結果、骨片6点を得た。その他、墓壙掘り方からは弥生土器片が少量出土した。

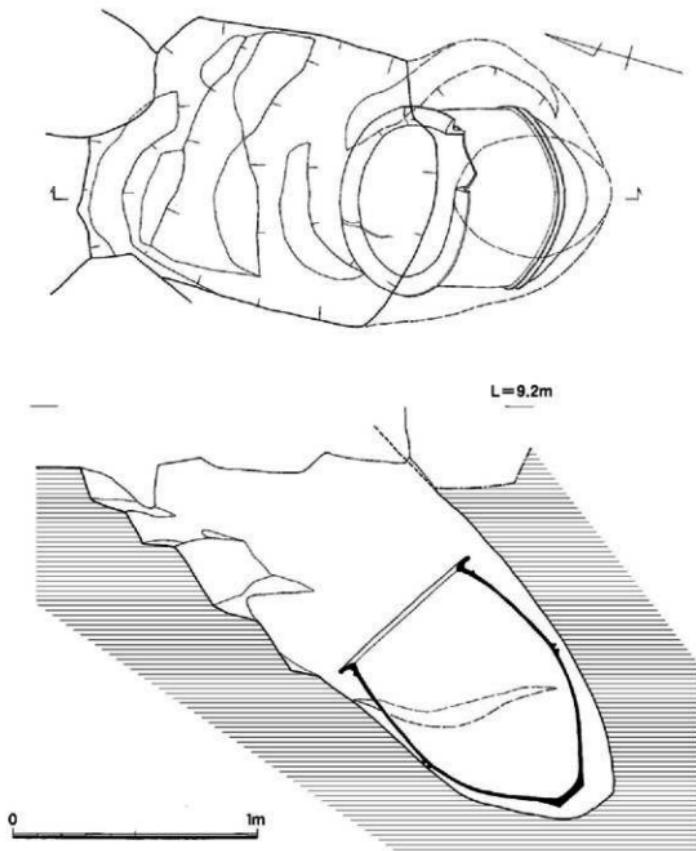


Fig.8 墓棺墓 SK-013 実測図 (1/20)

SK-013出土遺物 Fig.9、PL.7

4は壺棺である。口縁は逆「L」字形に屈曲し、内端が低く突出する。内端及び外端とも面取を施し、外端は凹線状に浅く窪む。口縁屈曲部外面に粘土を充填して補強しており、この直下に断面三角形の突帯一条を回す。胸部最大径は中位にあって口径に等しく、この直下に断面台形の突帯を二条貼付する。底部は平底で、外底中央が若干窪む。外器面は残りが悪いが、刷毛目調整の後、丁寧なナデ調整を加えたものとみられる。内面はナデ調整である。口縁部と突帯周辺は横ナデ調整する。暗橙褐色を呈し、胎土に細かい砂粒を多量に含み、焼成は良好で、胸部の相対する二カ所に複数の黒斑がある。口径と胸部最大径は74.0cm、器高102.0cmを測る。今回調査した3基の成人壺棺墓に用いられた土器のうちでは最も大形である。

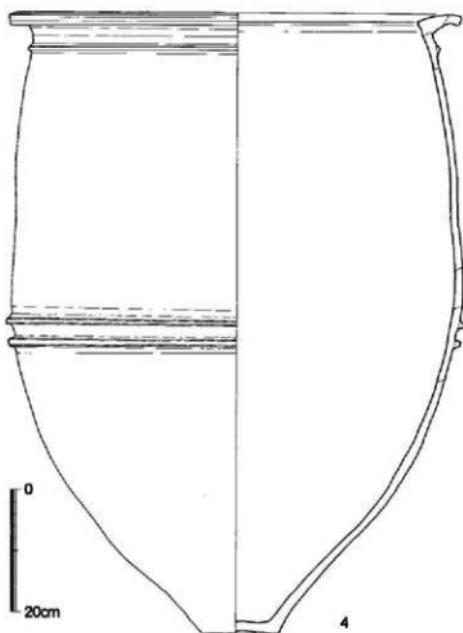


Fig. 9 SK-013 出土遺物実測図 (1/8)

壺棺墓SK-014 Fig.4, PL.4

壺棺墓SK-014 Fig.4, PL.4

成人壺棺墓SK-011の調査時に調査区東壁に一部のみが露呈した小児壺棺墓で、壺の底部と掘り方の一部を確認した。合口壺棺であろう。

SK-014出土遺物 Fig.11

壺形土器1個体と、これと明らかに別個体の壺形土器1個体があり、前者が下壺、後者が上壺であろう。

5は上壺で、口縁が「く」字形に屈曲して開き、端部は丸い。内面刷毛目その後、一部ナデ、外面縱刷毛目、口縁内外横ナデ。暗褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。口径31.0cm。6は下壺で、底部と口縁部はあるが胴部がない。口縁は「く」字形に屈曲してやや外反し、内面に明瞭な稜をもつ。端部は丸い。胴部最大径は中位にあり、安定した平底である。内底を指押さえ、内外面とも刷毛目、内面はナデを加える。口縁部は横ナデ。暗褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。口径32.0cm、器高推定37.0cm。

壺棺墓SK-015 Fig.10, PL.4

成人壺棺墓SK-013の北側に隣接する小児壺棺墓である。中世土坑SK-008によって上部が削平を受けており、SK-013との切り合い関係は不明。墓壙掘り方は南北に長い楕円形プランで、 $0.85\text{m} \times 0.55\text{m}$ を測る。南へ向かって斜坑を掘り、北側はゆるいスロープに造る。現状で検出面から墓壙底面まで0.35m。墓壙は暗褐色粘質土で埋め戻す。上壺に丹塗りの壺形土器、下壺に壺形土器を転用した覆口式で、接合部に粘土による覆いはない。主軸方位は磁北より $14^{\circ}30'$ 東偏し、埋置の角度は 49° 。

SK-015出土遺物 Fig.11, PL.7

7は上壺で、壺形土器の口縁部片である。口縁は逆「L」字形に屈曲して水平に長く伸び、端部を面取りして刻目を施す。胴部が丸みを持ち、口縁部直下に一条、胴部に二条の断面台形突起を貼り付けるが摩滅している。内外面ともナデ調整で、外面に丹塗りを施す。内面暗褐色、外面赤褐色を呈し、胎土は精良で少量の細砂粒と多量の雲母粒を含む。焼成は不良である。口径31.8cm。8は下壺で、口縁部を打ち欠いておりおそらく長胴の壺形土器であろう。胴部最大径は上位1/3にあり、底部は安定した平底である。外面は器面が著しく荒れて調整不明、内面は底部に指押え痕を残す他はナデ調整である。暗褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含む。焼成良好。胴部中位と下位の相対する2カ所に黒斑がある。胴部最大径36.4cm。

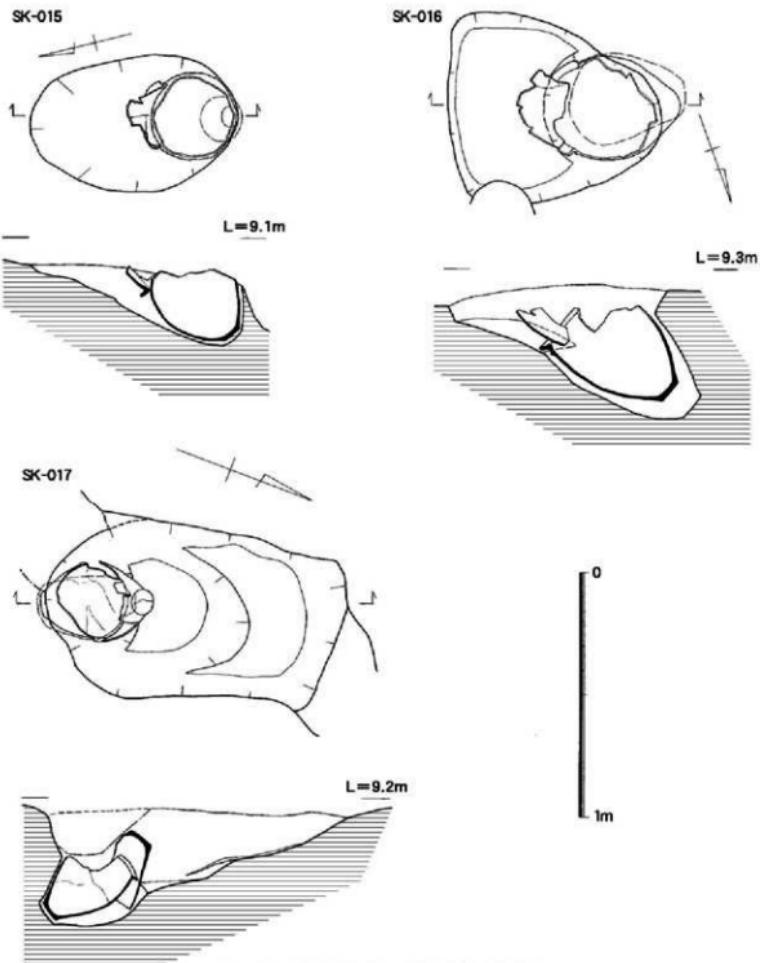


Fig.10 壱棺墓 SK-015~017 実測図 (1/20)

壹棺墓SK-016 Fig.10, PL.4

成人壹棺墓SK-012の北西に位置する小兒壹棺墓である。削平により上部を失う。この壹棺墓のみ主軸方位を他と異なる。墓壙掘り方は東西にやや長い不整隔丸方形プランで、 $0.9m \times 0.8m$ を測る。西へ向かって斜めに掘り下げ、棺のサイズに合わせた墓壙を造るが、棺底は底面よりやや浮いている。検出面から墓壙底面まで $0.5m$ 強を測る。墓壙は暗褐色粘質土で埋め戻す。呑口式で、接合部に粘土による覆いは認められない。主軸方位は磁北より $70^{\circ} 30'$ 西偏し、埋置角度は 41° である。

SK-016出土遺物 Fig.11, PL.7

9は上壺で、口縁部のみが1/2周強残る。口縁は「く」字形をなす。摩滅のため調整不明。胎土に砂粒を多量に含み、暗橙褐色を呈し、焼成良好。10は下壺で、口縁は「く」字形に屈曲して内湾し、屈曲部内面が突出する。胴部最大径は上位にあり、口径を上回る。頸部外面に断面三角形突帯一条を回す。外面は摩滅のため調整不明。内面は頸部に横刷毛目、底部に指押え痕を残し、全体をナデ調整する。暗橙褐色で、細砂粒を多量に含み、焼成良好。口径36.5cm、胴部最大径41.4cm、器高50.4cm。

壺棺墓SK-017 Fig.10, PL.4

成人壺棺墓SK-011の北側に位置する小兒壺棺墓である。攪乱によって墓壙の一部を失う。墓壙掘り方は南北に長い隅丸長方形プランで、1.23m×0.73mを測る。南へ向かって傾斜の緩い斜坑を掘り、北側は階段状の斜面とする。検出面から墓壙底面まで0.5m。上壺に大型壺棺の底部片、下壺に壺形土器を用いた覆口式で、粘土による覆いはない。主軸方位は磁北より $20^{\circ}30'$ 西偏し、 38° の角度で埋置する。

SK-017出土遺物 Fig.11, PL.7

11は上壺で、大型壺を打ち欠いて底部を転用したものである。平底で中央がやや窪む。外面は縦の刷毛目調整、内面は底に指押さえの痕跡を残しナデ調整する。淡黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。

12は下壺に用いた壺形土器である。口縁は「く」字形に屈曲して外反し、端部は丸くおさめる。屈曲部内面に明瞭な稜がある。胴部最大径は上位にあり口径よりやや小さい。外面は縦刷毛目調整、内面はナデ調整で所々に指押え痕を僅かに残す。口縁部は横ナデ調整。暗橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含む。焼成良好で底部に黒斑がある。口径32.2cm、胴部最大径31.2cm、器高35.0cm。

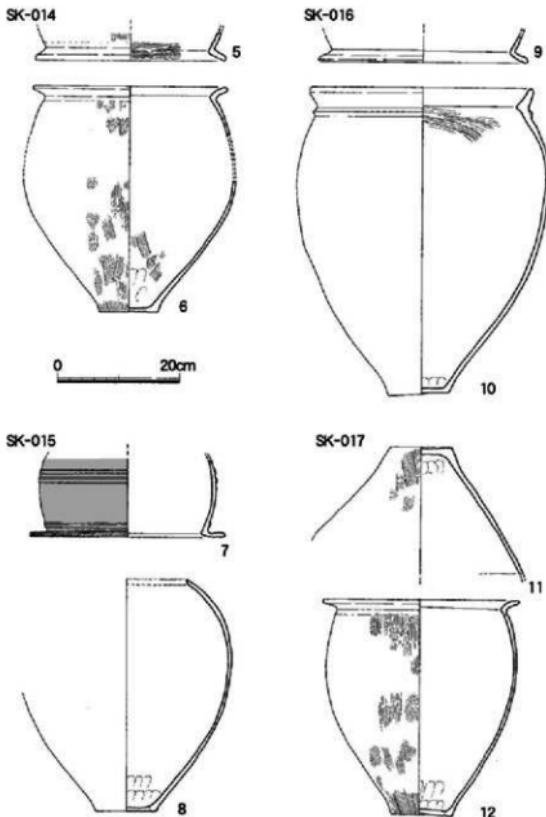


Fig.11 SK-014~017 出土遺物実測図 (1/8)

(2) 土墳墓

土墳墓SK-010 Fig.12、PL.5

調査区の東よりに位置する、今回の調査では唯一の土墳墓である。壺棺墓SK-011・013の南側に接するが、壺棺墓との直接の切り合いはない。北側に上・下水道管が埋設されていたため、一部は調査不能である。また、東側はピットに破壊されている。墓壙は断面すり鉢状をなす上半部と、箱状に掘り下げた下半部からなり、上半部は 1.8m 以上× 1.4m の楕円形プランで深さ 0.5m 、下半部は 1.13m × 0.45m の隅丸長方形プランで、深さ 0.45m を測る。墓壙主軸は磁北より $31^{\circ}20'$ 西偏する。墓壙覆土は暗褐色粘質土で、土器片少量が出土した。副葬遺物はない。

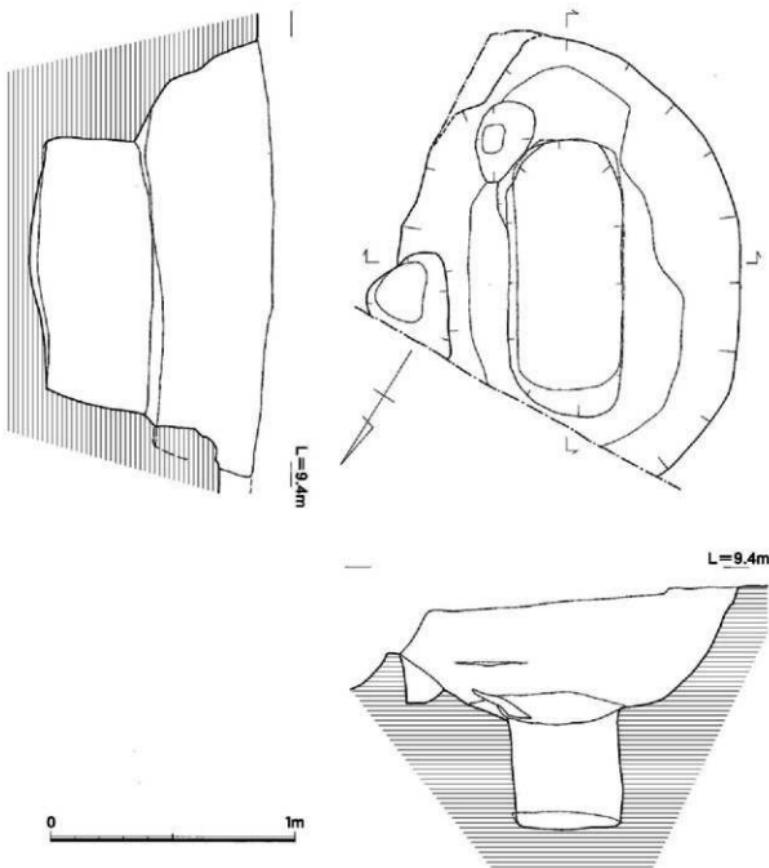


Fig.12 土墳墓 SK-010 実測図 (1/20)

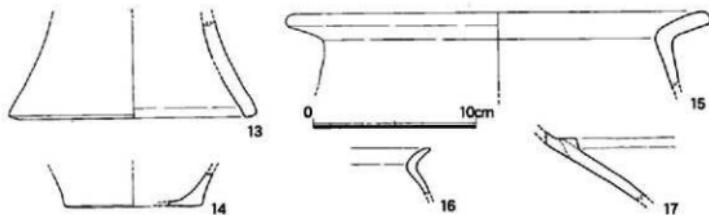


Fig.13 SK-010出土遺物実測図 (1/3)

SK-010出土遺物 Fig.13

13は器台の底部である。著しく摩滅しており調整は不明である。暗橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好である。14は壺の底部で、調整は不明。淡橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。15は壺の口縁部片で、「く」字形に屈曲して開く。調整不明。暗橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。16は小型の壺の口縁部か。緩く屈曲し、外反して開く。特に磨滅が著しく、調整不明である。淡灰黄色を呈し、胎土は精良で焼成良好。17は壺の肩部片で、断面三角形突帯を持つ。磨滅が著しく、調整不明である。淡灰黄色を呈し、胎土に大粒の砂粒を含み、焼成は良好である。

図示した弥生土器はいずれも小片で、摩滅して残りが悪い。これ以外に近世・近代の遺物が擾乱から混入して出土しているが、全体的にみて壺棺墓群に後出する時期の土塚墓と考えられよう。

(3) 土坑

土坑SK-003 Fig.14、PL.5

調査区南東隅に位置する。遺構検出時には、プランが方形をなすことから竪穴住居と考えたが、底面が平坦ではなく中央に向かって緩く下っており、方形土坑の一部と思われる。底面から5cmほど浮いた位置で土器片が多く出土した。高坏を主体とすることから壺棺墓に関わる祭祀遺構である可能性も考えられる。東西1.15m以上、南北1.25m以上で、深さは最深部でも12cmとかなり浅い。覆土は暗褐色粘質土で、壺棺墓埋め土に近似する。

SK-003出土遺物 Fig.15

出土遺物は全て弥生土器である。図示した遺物の他に、少量の土器片がある。

18・19は高坏の坏部である。口縁は内側に小さな突起を持った先形を呈する。残りが悪いが、内外面にヘラ研磨と丹塗りを施す。ともに暗橙褐色を呈するが、19は色調がやや暗い。ともに胎土は精良で雲母微粒を多量に含み、焼成良好。20は壺の口縁部片で、断面が「く」字形に強く屈曲して開き、内面に稜を持つ。器壁が全く剥落して調整不明である。

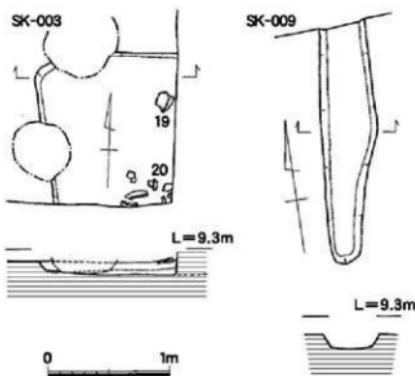


Fig.14 土坑 SK-003・009 実測図 (1/40)

淡橙褐色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成良好。21は小型甕の口縁部であろう。断面「く」字形に屈曲して短く開く口縁をなす。調整は不明で、胎土精良、焼成不良。22は断面が逆「L」字形をなす甕の口縁部片で、調整不明。暗橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。23は甕の底部片。二次加熱を受けて器面がヒビ割れており、調整不明である。淡橙褐色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成不良。24は器台の底部である。外面は継の刷毛目調整で、内面はナデ調整であろう。暗橙褐色を呈し、胎土に砂粒を少量に含み、焼成良好である。

以上の弥生土器は時期幅を持つが、弥生時代後期初頭頃を下限とする遺構であろう。

土坑SK-009 Fig.14

調査区北端に検出した。南北に伸びる細い溝状の遺構で、南端は丸く立ち上がっている。現状で南北長2.0m、北側は調査区外へ伸びていく。最大幅0.45mで、深さ0.1mである。甕棺墓群の西端を限る位置にあり、同じく南端に位置するSK-003とあわせて墓域を区画する施設である可能性も考えられるが、調査区が狭いため確認はない。

SK-009出土遺物 Fig.15

25は弥生土器の底部片で、出土遺物はこの1点のみである。安定の良い平底で、磨滅が著しく調整不明である。暗橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良。

詳細時期は不明であるが、甕棺墓と同時期の遺構である可能性が強い。

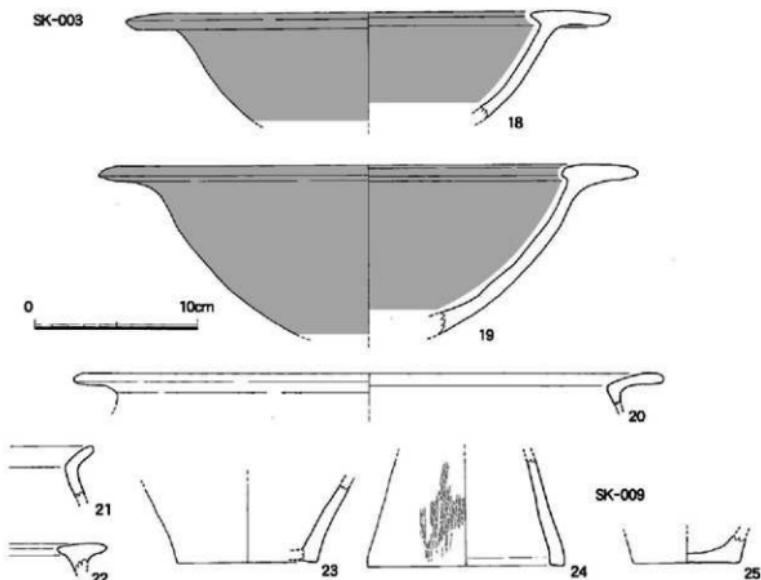


Fig.15 SK-003・009 出土遺物実測図 (1/3)

6. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居

竪穴住居SC-002 Fig.16、PL.6

調査区の南壁中央部に検出した方形の竪穴住居と考えられる遺構である。調査区南外に伸びている。現状で2.65m×1.9m以上、東側にベッド状の高まりがあり、遺構検出面から最深部まで37cmを測る。貼床は認められず、主柱穴・カマド等の有無も定かでない。覆土は暗褐色粘質土の単層で、床面から10cm前後浮いたレベルから、コンテナ1箱ほどの土器が集中して出土した。

SC-002出土遺物 Fig.17、PL.7

26は弥生土器の大型壺であろう。頸部片で法量は不明。やや内傾し断面台形突帯2条をまわす。突帶周辺を横ナデし、内面ナデ調整である。

27~31は土師器である。27は鉢である。口縁が「く」字形に屈曲して開く。内外面の一部に横刷毛目調整が認められるが、磨滅が著しく不明瞭。暗赤褐色を呈し、胎土に微砂粒を少量含み、焼成は不良。口径13.5cm。28も鉢の口縁部か。外反して開くが、小片のため法量不明。口縁横ナデで他は調整不明。赤褐色で、胎土精良、焼成やや不良。29は須恵器に似せて作った高壺の脚部である。器面が剥落しているが、ナデ調整であろう。淡黄褐色を呈し、胎土精良で、焼成やや不良。底径10.8cm。30は壺の口縁部片である。口縁が外反して開く。器面が剥落して調整不明。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。31は壺で、頭から底の小片。球形胴部に不安定な平底が付く。磨滅が著しいが、上端頭部付近に横ナデ痕がある。胴部内面ヘラ削りか。橙褐色で胎土は精良、焼成良好。

32~45は須恵器である。32~40は蓋坏で、32・33は蓋、37~40は身、34~36は蓋として図示したが確証はない。全て逆時計回りの回転ヘラ削りを外面に施す。33の蓋は天井部と口縁部の境に沈線を入れる。35・36・38にはヘラ記号がある。37~40の坏身はいずれも蓋受けの返りの立ち上がりが低く内傾する。37は体部が丸みを持つが、38は底部が平坦で無調整。2点とも口径10.0cm。蓋坏の焼成は36を除き良好で38は外面に自然釉がかかる。41は平瓶か。口縁部小片で端部を欠く。口縁内外を横ナデ、内面を指頭整形する。焼成不良で、外面に自然釉を被る。42は鉢の口縁部片である。体部外面に沈線2条を回す。焼成良好。口径12.6cm前後。43は壺の小片であろう。口縁が大きく広がって端部で内湾し、外面に沈線2条が巡る。焼成良好で内面に自然釉がかかる。44は壺の肩部片で、外面は平行タタキの後、横位のカキ目を加える。内面は當て具痕が残り、上半部のみ横ナデによりすり消す。淡灰白色を呈し、焼成不良。45は壺の胴部片で、外面は撮格子タタキ、内面は同心円文の上から半円弧文の當て具痕が重なる。

九州須恵器編年IVa期に相当し、6世紀末~7世紀前半頃か。

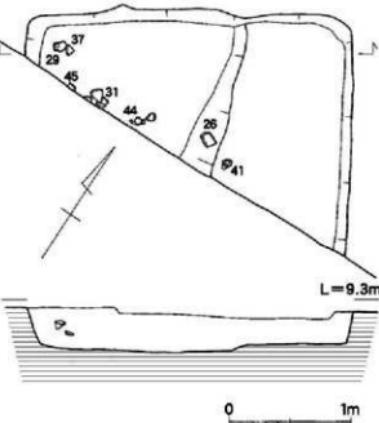


Fig.16 竪穴住居 SC-002 実測図 (1/40)

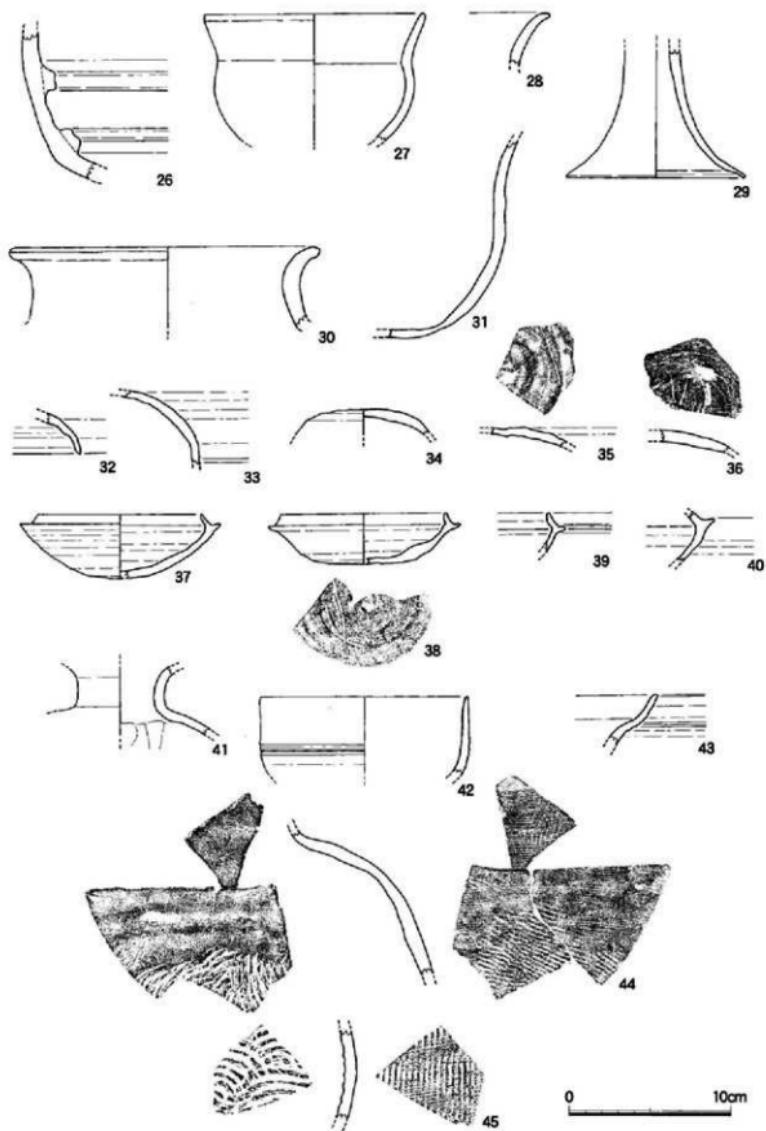


Fig.17 SC-002 出土遺物実測図 (1/3)

(2) 溝状遺構

溝状遺構SD-001 Fig.18、PL.6

調査区の西壁際に検出した溝状の遺構である。一部を確認したのみで、規模等は不明である。溝の主軸方位はN-14°-Wと計測したが、実際は更に西偏する可能性が強い。調査区内で長さ5.2mを測り、横断面形は逆台形ないしU字形を呈する。調査区で最大幅1.0mだが、西側の立ち上がりが全く認められないので、少なくとも2m以上の幅を有するものと推定される。溝底面には比高差20cm前後の凹凸があり、土坑が連続するかのごとき状況を呈する。覆土は暗褐色粘質土の単層で、水の流れたような形跡は認められなかった。

SD-001出土遺物 Fig.19・20、PL.7

弥生土器、須恵器がコンテナ1箱出土した。

46・47は弥生土器である。46は高坏で、外面は丹塗磨研、内面にシボリ痕がある。47は蓋の頂部で、磨滅が著しく調整不明。他にも数点の弥生土器があり、周辺の遺構から流入したのであろう。

48・53は土師器である。48・49は須恵器の形態を模倣した高坏で、同一個体と思われる。須恵器に比べると厚手である。ともに外面に沈線2条が巡る。49の内面は横ナデ調整で、他は磨滅が著しく調整不明である。淡橙褐色を呈し、胎土精良で、焼成良好。50は小型の壺もしくは鉢の口縁部であろう。胴部内面に横ヘラ削りを施し、外面は縦の刷毛目調整か。淡橙褐色を呈し胎土に砂粒を含み、焼成良好。51は鉢である。胴部内面のヘラ削りは上部が横に、下部が縦に施す。外面は縦の刷毛目調整。灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。52は瓶の把手で、接合部から剥げ落ちている。淡黄褐色で、胎土に砂粒を少量含み、焼成良好。53は瓶の底部であろう。板状の土器片の縁に一孔の痕跡を認める。磨滅が著しい。52と胎土その他が似ており、同一個体の可能性がある。

54~62は須恵器である。54は坏身で、蓋受けの返りは短く、壺部に小さい平坦面を持つ。底部は丸く、ヘラ削りの範囲は約1/2程度で、逆時計回りに施す。「匚」と浅いヘラ記号を入れる。口径11.8cm、受部径14.0cm、器高4.3cm。55は蓋か。天井部は平坦気味で、口縁端部に内傾する平坦面がある。天井部は逆時計回りに回転ヘラ削りし、天井部中央及び内面に指押え痕を残す。焼成はやや不良で、亞みがあり、口径8.5~9.2cm、器高2.3cm。56は鉢で、一ヵ所に把手が付くが折れている。口縁は直立気味に開き、端部は丸い。外底に逆時計回りの回転ヘラ削りの後、外面全体にカキ目を施す。内面は横ナデで、内底に指押え痕を残す。焼成は良好だが歪んでおり、口径

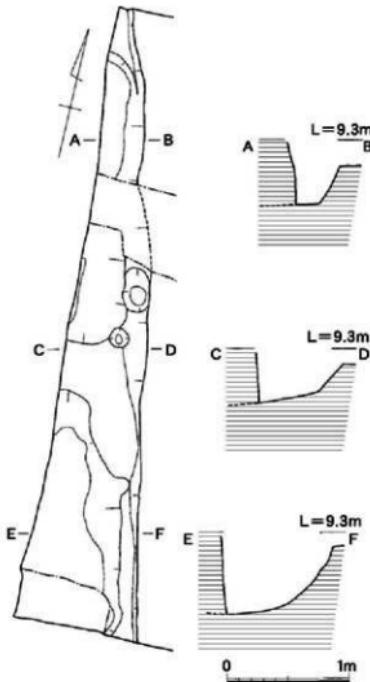


Fig.18 溝状遺構 SD-001 実測図 (1/40)

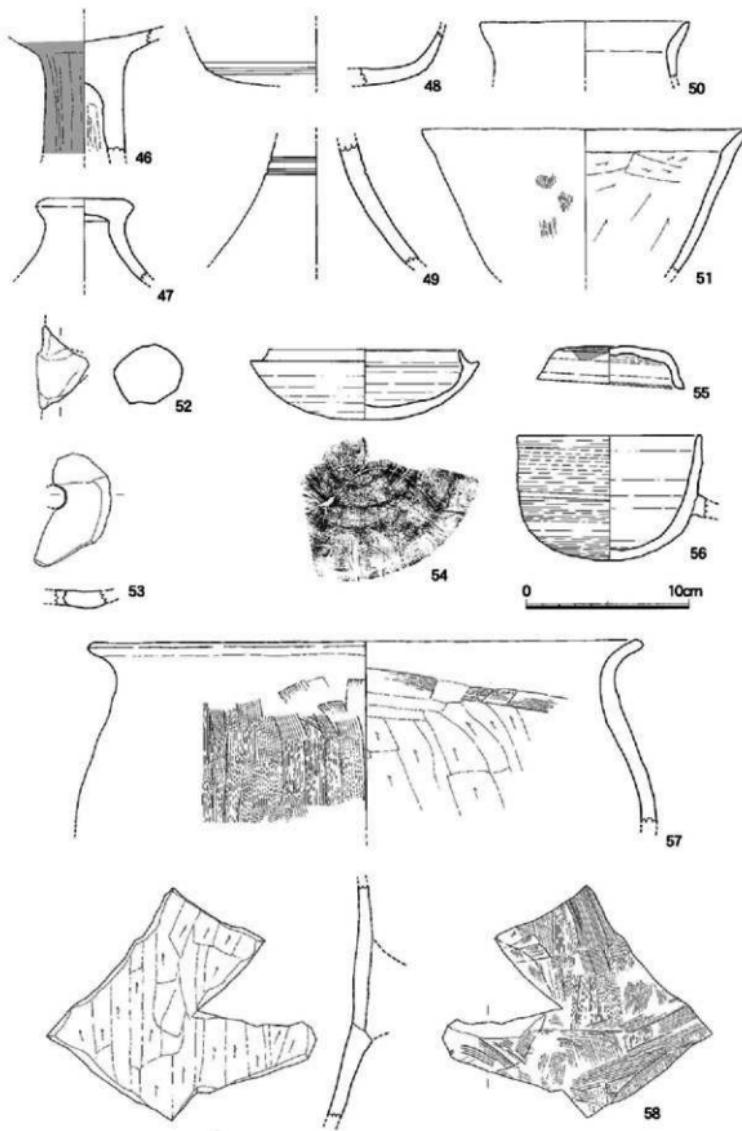


Fig.19 SD-001 出土遺物実測図 I (1/3)

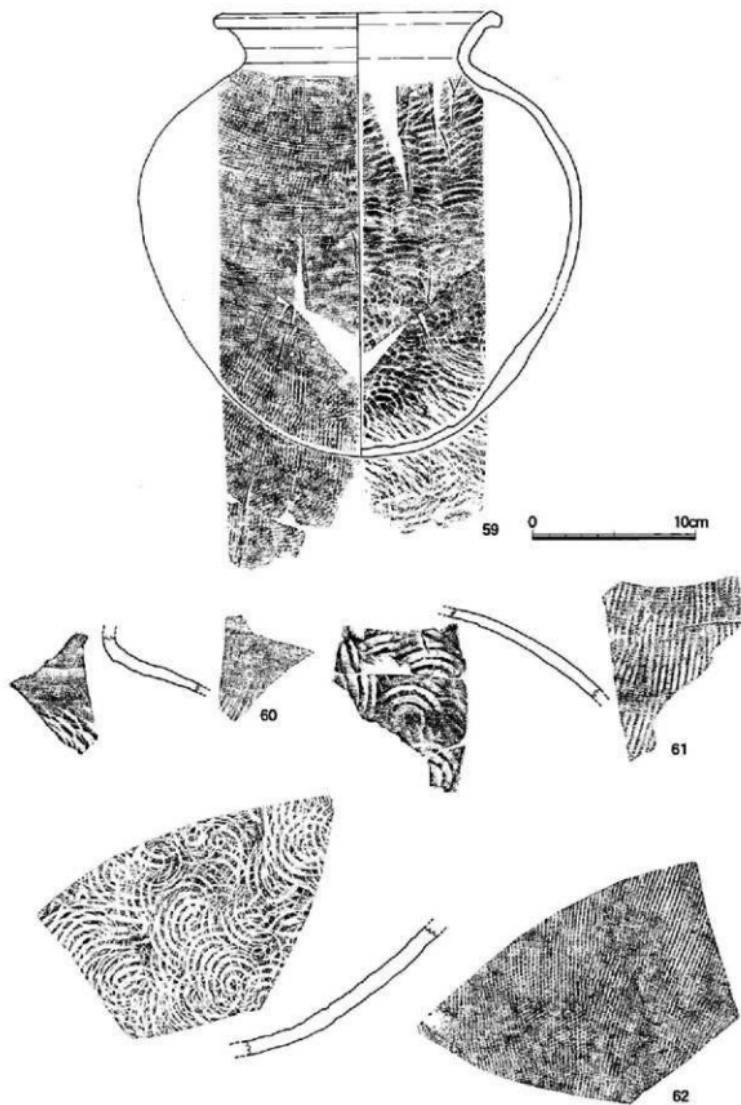


Fig.20 SD-001 出土遺物実測図 II (1/3)

11.1~11.5cm、器高7.7cmである。把手は断面径1.0cm程度の棒状のものを外部から貼り付ける。57・58は土師器の瓶を模したと考えられる須恵器で、極めて珍しい器種である。接合しないが同一個体であろう。他に同一個体と考えられる小片が堅穴住居SC-002から出土している。口縁は外反して開き、端部は丸くおさめる。頸部は丸く屈曲し、胴部径は口径を上回る。胴部(58)には差し込み接合した把手が剥がれ落ちた痕跡がある。胴部外面は継の刷毛目で、下半には横一斜方向の刷毛目を加える。内面は下→上にヘラ削りの後、上半部を軽くナデ消す。最後に口縁部外面に横ナデを加える。胎土に石英等の砂粒を含み、焼成は不良で器表面は灰青色、破断面は暗赤褐色を呈する。口径34.0cm。土師器模倣の須恵器というより、土師器として造った土器を還元炎焼成したものというべきか。59は壺である。倒卵形の胴部に短く開く口縁が付き、口唇部は外方へ肥厚させる。胴部外面は平行タタキの上から上半部のみ軽いカキ目を加え、内面は同心円状の当て具痕が上→下の順に連なり、底部は半円状の当て具痕が重なる。口縁内外横ナデ。焼成良好。外底は使用により磨滅する。口径16.3cm、胴部最大径27.2cm、器高27.8cm。60~62はいずれも壺の胴部片で、全て別個体である。60は頸部片で、外面は平行タタキの後カキ目、内面は当て具痕の一部が残る。焼成良好。61は肩部の破片と思われ、外面擬格子タタキの後カキ目、内面は同心円文の当て具痕である。焼成不良で、内面が土師質を呈する。62は胴部下半部の破片であろう。外面は小さな擬格子タタキが重複し、内面には同心円文の当て具痕が残る。焼成良好。

須恵器は堅穴住居SC-002出土遺物より若干古い特徴がある。九州須恵器編年の中V期に相当し、6世紀末~7世紀初め頃か。

7. その他の遺構と遺物

土坑SK-006 Fig.21

壺棺墓SK-013と重複するが、上面に中世遺構SK-008があったため、切り合いに気づかずSK-013と同時に下げてしまった。このため土坑西側のプランを確認していないが、おそらく隅丸長方形をなすものであろう。東西に長く、長径は推定で0.85m、短径0.5m、深さ0.2mである。

SK-006出土遺物 Fig.22, PL.7

土師器が少量出土した。

63は土師器丸底杯である。外面は器面が剥げ落ちて調整不明。内面は口縁部が横ナデ、以下が丁寧なナデ調整である。淡黃白色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好。口径13.5cm、器高3.9cm。64は土師器椀である。器面が磨滅しており調整不明だが、内面はヘラ磨きか。淡黃白色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成良好。口径13.7cm、器高5.3cm。

11世紀前半~中頃の遺構であろう。

土坑SK-008 Fig.21

調査区北東部に検出した。南北に溝状に伸びるが、調査区南半には及ばない。南北長3.2m以上、東西幅2.4mを測る。横断面形は逆台形状をなし、東側は段をなす。最深部で0.23mである。

SK-008出土遺物 Fig.22

弥生土器、須恵器、近世国産陶磁器が少量出土した。

65は弥生土器の壺で、逆L字形の口縁部小片である。著しく磨滅する。暗橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。66は須恵器壺の口縁部片であろう。外面に2本の突線と描き波状文がある。外面に自然釉を被る。67は肥前系磁器の白磁紅皿で、白色不透明釉がかかる。68は白磁杯の口

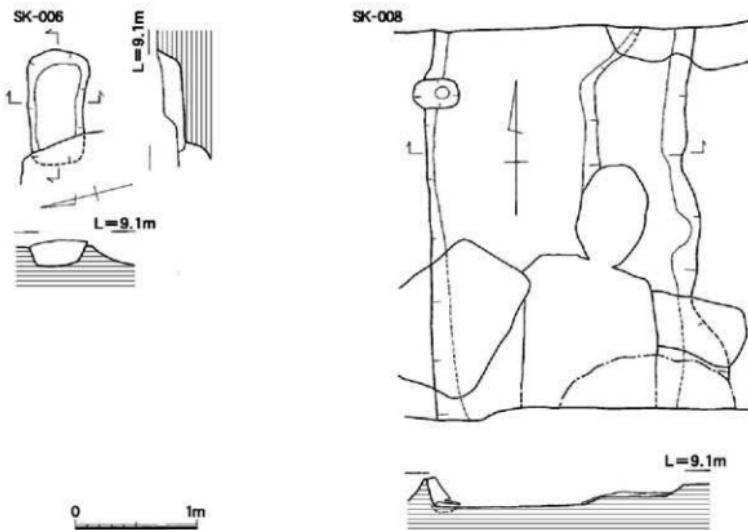


Fig.21 土坑 SK-006・008 実測図 (1/40)

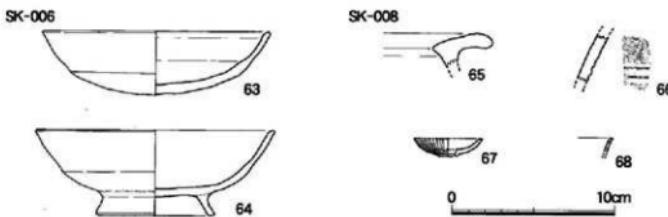


Fig.22 SK-006・008 出土遺物実測図 (1/3)

縁部小片で、白色半透明釉がかかる。

67からみて18世紀後半以降と考えられる。壺棺墓密集部分に重なっており、近世に畑耕作等を行つていて陥没した壺棺墓塙を埋める際に生じた凹みかもしれない。

その他の出土遺物 Fig.23

69~74は赤生土器である。69は壺で、逆し字形口縁で内面が僅かに突出する。橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。口径28.0cm。壺棺墓SK-016墓塙出土。70・71は壺で、同一個体だが接合しない。口縁は鋤先形をなすが、内面のかえりは小さい。頸部に断面三角形帶一条を貼付する。胴部外面は刷毛目で、突帯付近と口縁部は横ナデ調整。内面はナデ調整。橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は一部不良で胴部外面に黒斑がある。口径27.0cm。土塙墓SK-010東側の浅い窪

みから出土した。72は壺の底部小片である。磨滅により調整不明。橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。底径4.6cm。ピットSP-019出土。73も壺の底部で、外面調整不良、内面はナデ調整。橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。底径9.2cm。壺棺墓SK-016墓壙出土。74は筒形器台の一部で、継方向に透孔が入る。径からみて透孔は相対する4カ所に入ろう。残りが悪いが、外面から透孔内にかけて丹塗りを施し、内面にも一部丹が付着する。内面はナデ調整か。暗橙褐色を呈し、胎土は精良で雲母粒を多量に含み、焼成良好。壺棺墓SK-013の墓壙内出土。75は古代の須恵

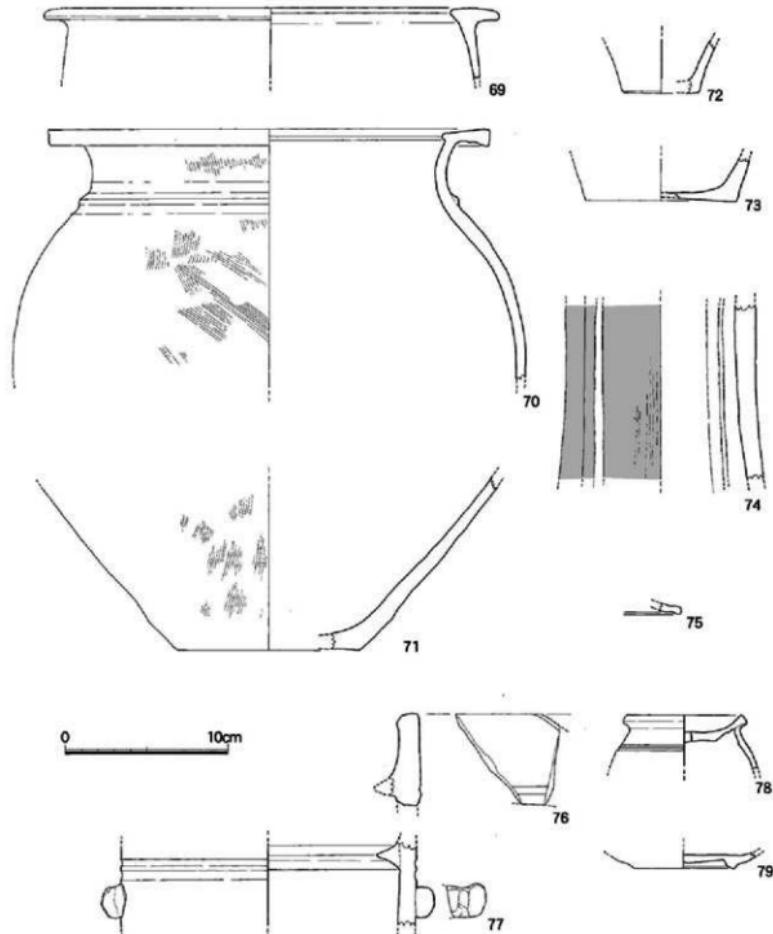


Fig.23 その他の出土遺物実測図 (1/3)

器壺蓋で、口縁端部が下方に僅かに膨らむ。ピットSP-018出土。76・77は土師質土器の七輪で、同一個体であろう。76は口縁部と思われ、内面に受け部が貼付され、外面に沈線1条が入り、下端には窓が開く。77は胴部で、内面に受け部、外面に耳を貼り付け、沈線2条をまわす。灰白色を呈し、胎土精良、焼成良好で硬質である。土壤墓SK-010から出土しているが、おそらくSK-010を切る攢乱溝からの混入遺物であろう。78は土師質土器で、蓋の中央に透孔状の切り込みがあるため貯金箱と考えられる。小壺様の容器に蓋を押し込んで接合している。蓋内面には糸切り痕が残る。乳白色を呈し、胎土精良、焼成良好で硬質。口径7.0cm。壺棺墓SK-011に落ち込んだ攢乱土から出土した。79は青磁皿で近代のものか。78と同様、壺棺墓SK-011に落ち込んだ攢乱土に含まれていた。

8. 小結

52.5m²と狭い面積の調査ではあるが、予想外の壺棺墓の発見など比較的濃密に造構が分布する状況を確認することができた。周辺では北側の第3次調査において壺棺墓1基を確認しており、墓域が調査区の北側へ伸びることは間違いなく、また東側へも広がっていくであろうが、その範囲や墓群の規模については全く不明である。今回の調査で検出した壺棺墓は成人棺3基、小児棺4基で、この他、調査区壁に小児棺2基がかった。主軸方位は南北方向に概ね揃い、小児棺1基のみが東西方向を向くが、頭位に規制のあったことを示している。成人壺棺墓3基は、造構の切り合いからSK-013→SK-012の順に造られており、残るSK-011は少し遅れるとみられるが、いずれも型式的には立岩式の範疇に含まれ、短い期間の内に相次いで営まれたものと考えられる。これに対し小児棺はSK-015がやや古い様相を示し、他は一段新しい型式の土器を用いる。土壤墓は1基のみの検出だが、僅かに出土した土器から一段新しい小児壺棺墓のグループと同時期とみられ、おそらく成人墓が立岩式壺棺を最後に壺棺墓から土壙墓へ変わったことを示すものと考える。これらの墓群は、調査区の北東隅に集中しており、墓域の西側と南側には浅い窪み状の土坑を検出した。特に南側のSK-003では丹塗りの高壙がまとめて出土するなど祭祀行為のあったことを伺うことができる。このふたつの土坑は調査区の外へ伸びており全容が窺い知れないが、あるいは墓域を区画する意図をもった造構であるかもしれない。これらの造構は弥生時代中期末から後期初頭に位置づけられる。

那珂遺跡群の壺棺墓は、1995年の集成（「那珂14」第399集）で4～5群のグループに分かれることが指摘されていたが、その後の発掘調査による蓄積が進み、更に3～4群ほど増えている。しかしながら、いわゆる那珂台地の中央部を占有する群と、台地端部を好んで造墓した群の二者があるという傾向は動かないようである。そして、後者の群の中に前期壺棺墓（4・31次）や中期墳丘墓（21次）が含まれるという事実がある。那珂遺跡群は早くに宅地化したため狭い面積の調査が多く、ジグソーパズルを組み合わせる様にして時代ごと・性格ごとの造構の広がりを読み取る作業を進めており、弥生時代墓地や集落との対応について詳しく語るために、今少し調査の進展を待たねばならないようである。



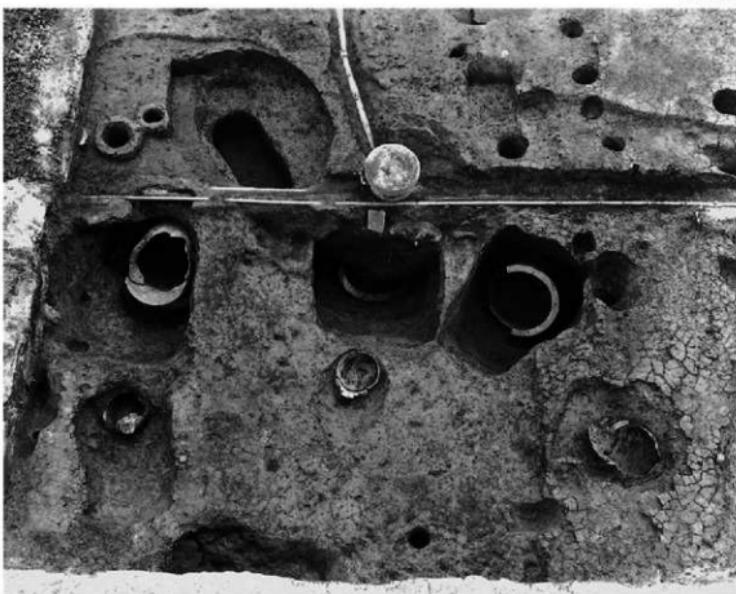
Fig.24 那珂遺跡群の壺棺墓 (1/25,000)



1. 調査区全景（南から）



2. 調査区全景（北から）



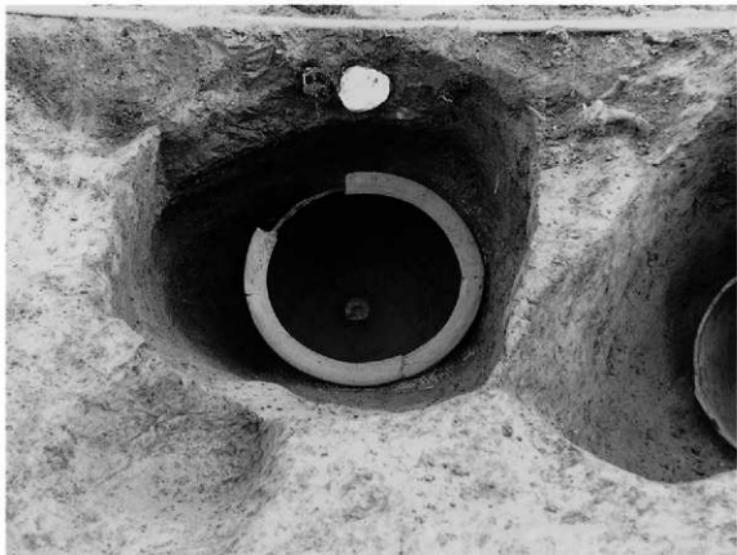
1. 要棺墓全景（北から）



2. 要棺墓SK-011（北東から）



1. 墓石墓SK-012（北東から）



2. 墓石墓SK-013（北から）



1. 妻棺墓SK-012・013・015（北西から）



2. 妻棺墓SK-014（西から）



3. 妻棺墓SK-015（西から）



4. 妻棺墓SK-016（東から）



5. 妻棺墓SK-017（北から）



6. 妻棺墓SK-017（北西から）



1. 土壙墓SK-010 (北東から)



2. 土坑SK-003 (北西から)



1. 壁穴住居SC-002（北西から）



2. 溝状遺構SD-001（南から）



第80次調査出土遺物（縮尺不同）

第三章 那珂遺跡群第83・84次調査の記録

遺跡名	那珂遺跡群第83次調査	遺跡調査番号	0146	遺跡略号	NAK-83
調査地地籍	博多区那珂2丁目213-2、214-1、214-3、221			分布地図番号	0085
開発面積	662.37m ²	調査対象面積	200m ²	調査面積	200m ²
調査期間	2001年（平成13年）12月20日～2002年（平成14年）1月10日				

遺跡名	那珂遺跡群第84次調査	遺跡調査番号	0217	遺跡略号	NAK-84
調査地地籍	博多区那珂2丁目213-2、214-1、214-3、221			分布地図番号	0085
開発面積	662.37m ²	調査対象面積	152m ²	調査面積	152m ²
調査期間	2002年（平成14年）5月10日～5月14日				

例言

1. 調査担当者は、第83次が吉武 学・本田浩二郎、第84次が久住猛雄・田上勇一郎である。
2. 本章に使用した実測図の作製と製図は、各担当者のほか、田中克子が行った。
3. 本章に使用した写真は各担当者が撮影した。
4. 本章に使用した方位は全て磁北である。
5. 本章の執筆は、Iを吉武が、II・IIIを久住が行い、吉武がとりまとめた。

本文目次

I. 第83次調査の記録	
1. 調査に至る経緯	39
2. 調査の組織	39
3. 第83次調査地点の位置と周辺の調査例	40
II. 第84次調査の記録	
1. 調査に至る経緯と調査の経過	73
2. 検出した遺構	74
III. 第83・84次調査の「前方後方形周溝墓」について	79
4. 発掘調査の概要	40
5. 検出遺構と出土遺物	43
6. 小結	66
3. 出土遺物	77
4. 小結	78

挿図・図版目次

第83次調査

Fig. 1	近隣の調査地点 (1/2,000)	41	Fig. 13	SD-002-012出土遺物実測図 (1/3)	55
Fig. 2	調査区位置図 (1/400)	42	Fig. 14	SC-015実測図 (1/40)	56
Fig. 3	第83・84次遺構配置図 (1/100)・(折り込み)		Fig. 15	SC-015出土遺物実測図 (1/3)	56
Fig. 4	前方後方形周溝墓SD-001・011 (1/100) ..	44	Fig. 16	SK-003-005・007実測図 (1/40)	57
Fig. 5	SD-001・011土層断面図 (1/40)	45	Fig. 17	SK-003-005-007出土遺物実測図 (1/3)	58
Fig. 6	SD-011土器出土状況 (1/20)	46	Fig. 18	SE-016実測図 (1/40)	59
Fig. 7	SD-001出土遺物実測図 (1/3)	47	Fig. 19	SE-016出土遺物実測図 (1/3)	60
Fig. 8	SD-011出土遺物実測図 I (1/3)	49	Fig. 20	SX-004実測図 (1/40)	62
Fig. 9	SD-011出土遺物実測図 II (1/4)	51	Fig. 21	SX-004出土遺物実測図 (1/3)	62
Fig. 10	SD-011出土遺物実測図 III (1/3)	52	Fig. 22	その他の出土土器実測図 (1/3)	64
Fig. 11	SD-013出土遺物実測図 (1/3)	53	Fig. 23	石器・石製品実測図 (1/2・1/1)	65
Fig. 12	SD-002-012-017実測図 (1/40)	54	Fig. 24	周辺の古墳時代前期の遺構 (1/1,000)	66
PL. 1	1. 調査区全景 (西から)		2.	周溝SD-001 (南東から)	
PL. 2	1. 周溝SD-011 (南西から)		2.	周溝SD-011 (東から)	
PL. 3	1. 周溝SD-001 (西から)		2.	周溝SD-001土層 (南西から)	
	3. 周溝SD-011西端土層 (北から)		4.	周溝SD-001中央土層 (東から)	
	5. 周溝SD-011東端土層 (北から)		6.	西側道路切り通し周溝土層 (南から)	
PL. 4	1. SD-011北東隅遺物出土状況 (北東から)		2.	SD-011北東隅遺物出土状況 (南西から)	
	3. SD-011北東隅遺物出土状況 (南から)		4.	前方部周溝SD-013 (北東から)	
	5. 溝状遺構SD-002 (南から)		6.	溝状遺構SD-012 (東から)	
PL. 5	1. 穫穴住居SC-015 (西から)		2.	土坑SK-005・006 (北から)	
	3. 土坑SK-007 (南東から)		4.	井戸SE-016・溝SD-017検出状況 (北から)	
	5. 井戸SE-016・溝SD-017 (北東から)		6.	井戸SE-016・溝SD-017 (北から)	
PL. 6	1. 防空壕SX-004 (西から)		2.	調査作業風景 (北東から)	
	3. 第83次調査出土遺物 (縮尺不同)				

第84次調査

Fig. 25	トレンチ土層断面図 (1/40)	75	Fig. 27	出土遺物実測図 (1/4)	78
Fig. 26	トレンチ断面図 (1/40)	76			
Ph. 1	工事立会状況		Ph. 6	B トレンチ (西から)	
Ph. 2	調査状況全景 (南東から)		Ph. 7	C トレンチ (南から)	
Ph. 3	調査区全景 (東から)		Ph. 8	D トレンチ (左)、E トレンチ (右) (北から)	
Ph. 4	調査区全景 (西から)		Ph. 9	D トレンチ (西から)	
Ph. 5	A トレンチ (南東から、上が南西)		Ph. 10	E トレンチ (東から)	

I. 第83次調査の記録

1. 調査に至る経過

福岡市教育委員会では市域内の埋蔵文化財の保護のため、包蔵地においてビル建設などの開発行為が予定された場合には、事前に試掘調査を行って地下の遺跡の状況を確認するとともに、現状保存が困難な場合には地権者等の協力を得て記録保存のための緊急発掘調査を行っている。

福岡市博多区那珂2丁目213-2、214-1、214-3、221の宅地跡において、川邊モヨ氏による共同住宅建設が計画され、平成13年11月9日付で福岡市教育委員会埋蔵文化財課（以下「埋文課」）に埋蔵文化財事前審査申請書の提出があった。申請地は福岡市文化財分布地図では那珂道跡群に含まれ、かつ北側隣接地では第62次調査を実施して方形周溝墓などの遺構を確認していた。申請地は外周道路より約1m高く、埋文課では遺跡が良好に残っている可能性が高いものと考え、確認調査を行う必要がある旨を回答した。12月6日に対象範囲に重機により3本のトレーナーを設けて調査を実施した結果、地表下1mのローム面で土坑や柱穴、溝などの遺構を確認し、弥生土器・土師器・須恵器が出土した。試掘調査の結果を踏まえ、埋文課では申請者と協議を持ち、予定建築物の本体部分については遺構に影響を与えないよう掘削レベルを上げて工事を行う旨の合意に到ったが、駐車場部分については外周道路と同レベルまでの切り下げが避けられない状況であったことから、申請面積662.37m²のうち工事によって影響を受ける約200m²の範囲について、やむなく記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなった。調査対象となった範囲は、申請地北辺の道路に面した幅6m前後の部分と、南西隅の11m×3.5mの部分の計2箇所である。試掘調査で遺構の密度が薄いと判断し、15日以内での調査終了が見込まれたため、埋文課内規により国庫補助事業の対象とした。

発掘調査は平成13年12月20日に開始し、年内終了を目指したが、方形周溝墓を検出したため調査が長引き、年末年始を挟んで翌平成14年1月10日までを要した。整理報告書作成は諸般の都合により遅れ、平成20年度に行った。

なお、調査終了後に建設工事が行われたが、当初計画では工事が遺構に影響しない予定だった敷地中央部において、表土すき取りが遺構面に及び、また地山が露出したことによって、発掘調査で検出した方形周溝墓が前方後方形になることが判明した。このため工事を一時中断させ、関係者と協議のうえ追加調査を急速実施した（第84次調査）。調査次数は異なるが、一連の調査であるため整理報告書作成は第83次調査と合わせて行い、73~78ページにこの調査成果を掲載した。

2. 調査の組織

調査にあたり、地権者である川邊モヨ氏には埋蔵文化財保護について快いご理解を賜った。また、地元住民の皆様にご協力を頂いた。記して感謝申しあげたい。第83次調査は以下の組織で行った。

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 生田征生（調査時）、山田裕嗣（現任）

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男（調査時）、山口龍治（現、埋蔵文化財題1課長）

埋蔵文化財課調査第2係長 力武卓治（調査時）、米倉秀紀（現、調査係長）

調査庶務 文化財整備課管理係 御手洗 清（調査時）、井上幸江（現、文化財管理課）

調査担当 埋蔵文化財課事前審査係 大塚紀宣、田上勇一郎（試掘担当）

埋蔵文化財課調査第2係 吉武 学、本田浩二郎（本調査担当）

調査協力 阿部幸子、池 勝子、大音輝子、金子二三枝、川崎 良、小池温子、幸田信乃、

小路丸嘉人、小路丸良江、清水 明、菌部保寿、塙本よし子、寺園恵美子、中野裕子、

永田律子、永田優子、夏秋弘子、能丸勢津子、野口ミヨ、増田ゆかり、山内 恵、
山崎光一、吉川暢子、渡辺淑子（五十音順、敬省略）

整理協力 田中克子（技能員）、青木悦子、下山慎子、萩尾朱美、森 寿恵（五十音順、敬省略）

3. 第83次調査地点の位置と周辺の調査例 Fig.1・2

那珂遺跡群は御笠川と那珂川に挟まれた洪積丘陵上に立地する。第83次調査地点は那珂八幡前方後円墳の南側約60mの位置にあり、周辺には古墳時代前期の方形周溝墓が複数存在することがこれまでの調査で明らかとなっている。道路を挟んだ北側では第62次調査が行われ、方形周溝墓2基を確認している。第83次調査地点の本来の地形は、東から西へ緩やかに下る傾斜面であったと思われるが、現在では宅地開発により段状に造成されており、調査前は北側と西側を道路に囲まれた宅地であったが、以前は畠地であったと聞く。地表面は周辺の道路面（8.1～7.8m）より1mほど高く、海拔標高9.4～8.8mで、東から西へ緩く傾斜する。

第83次調査の主要を占めるものは方形周溝墓（第84次調査により前方後方形であることを確認）であるため、これまでに周辺調査で確認した古墳時代前期墳墓について見ておきたい。庄内式併行期墓造と考えられる那珂八幡古墳に始まる那珂遺跡群の前期墳墓群は、第32・62・63次で検出した那珂八幡古墳南西側の方形周溝墓3基及び今回検出の前方後方形周溝墓1基からなる一群と、南に約230m離れた第9・41・70・110次で確認した台地最高所に群集する方形周溝墓8基からなる一群の二つの墓域が存在することが知られていた。これらは那珂八幡古墳と前後して掘削された溝間6～7m前後で並行して伸びる2条の溝の東西に規則的に配置されており、2条の溝は道路側溝であったと考えられている。ところが、この二群の中間地域で行った第114次調査においても、並行して伸びる2条溝の西側に前方後方形周溝墓1基、円形周溝墓2基（ともに古墳時代前期前半）が南北に並ぶ状況が確認でき、那珂八幡古墳の南側に長さ400m弱に渡って墳墓群が整然と並ぶ状況であったことが明らかとなってきた。一帯にはこの時期の集落遺構は少なく、完全に墓域として意識されていたことが読み取れる。現在までに確認した墳形は、那珂八幡前方後円墳を除くと、前方後方形2、方形11、円形2である。ただし、前方後方形をなすものは2基とも後方部に比べて前方部の周溝が極めて浅くなる特徴があり、これまで方形周溝墓としてきた遺構についても前方部周溝が削平消失している可能性がある。これらの周溝墓ではいずれも主体部の痕跡が認められず、低い盛土の中に主体部を構築したと考えられる。また、方形周溝墓の溝内から古墳時代後期の須恵器片が多数出土することから、少なくとも7世紀頃までは周溝や盛土が残っており、古墳群としての景観を留めていたようである。今後、周辺調査によって、これらの墳墓群の形成過程がより明らかになっていくものと期待される。

4. 発掘調査の概要 Fig.3, PL. 1～4

地表面の標高は9.4～8.8mで東が高く、西と南へ下る。調査前には二区画の宅地があり、60cmの段差があった。基本的な層序は、表土層が厚さ20～50cm、その下層に10～20cmの遺物包含層（暗褐色土）があり、鳥栖ロームの遺構面へと移行する。ロームは削平されている。

宅地造成工事によって大きく削平される申請地の南端部（I区）と北辺部（II区）について発掘調査を実施した。調査はI区から始め、漸次II区へ移行した。I区は東西最大長10.0m、南北7.6mの不整三角形区画をなす。I区遺構面は北東隅が最も高く標高8.4m、20cmほどの段差を経て緩く南西へ下っており、西端で標高8.0mである。II区は東西32.0m、南北5.8mの長方形区画で、遺構面は中央部が最も高く標高8.7mで、西へ緩く下り、西端で8.2mを測る。ただし、外周道路に面した北側と

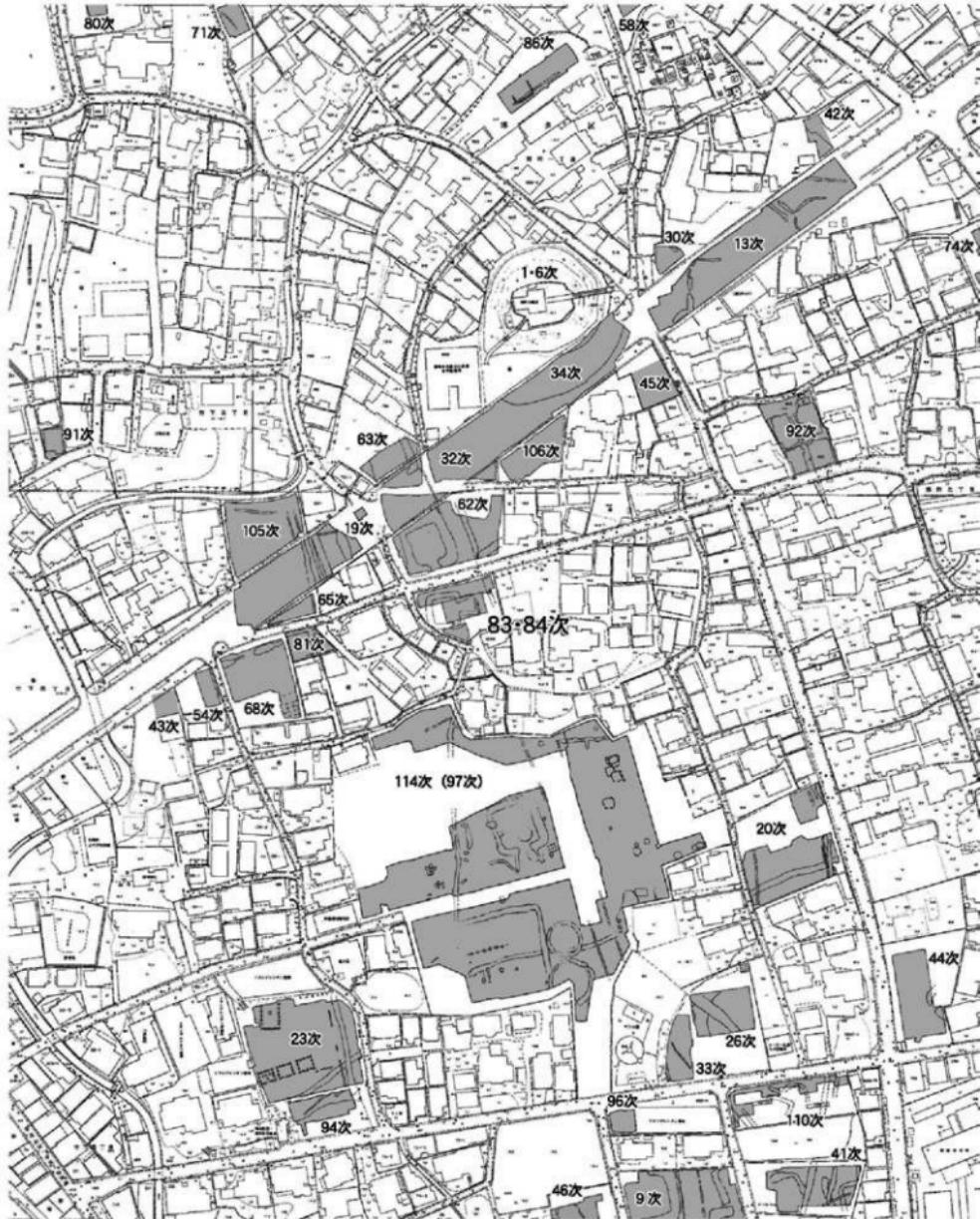


Fig. 1 近隣の調査地点 (1/2,000)



Fig.2 調査区位置図 (1/400)

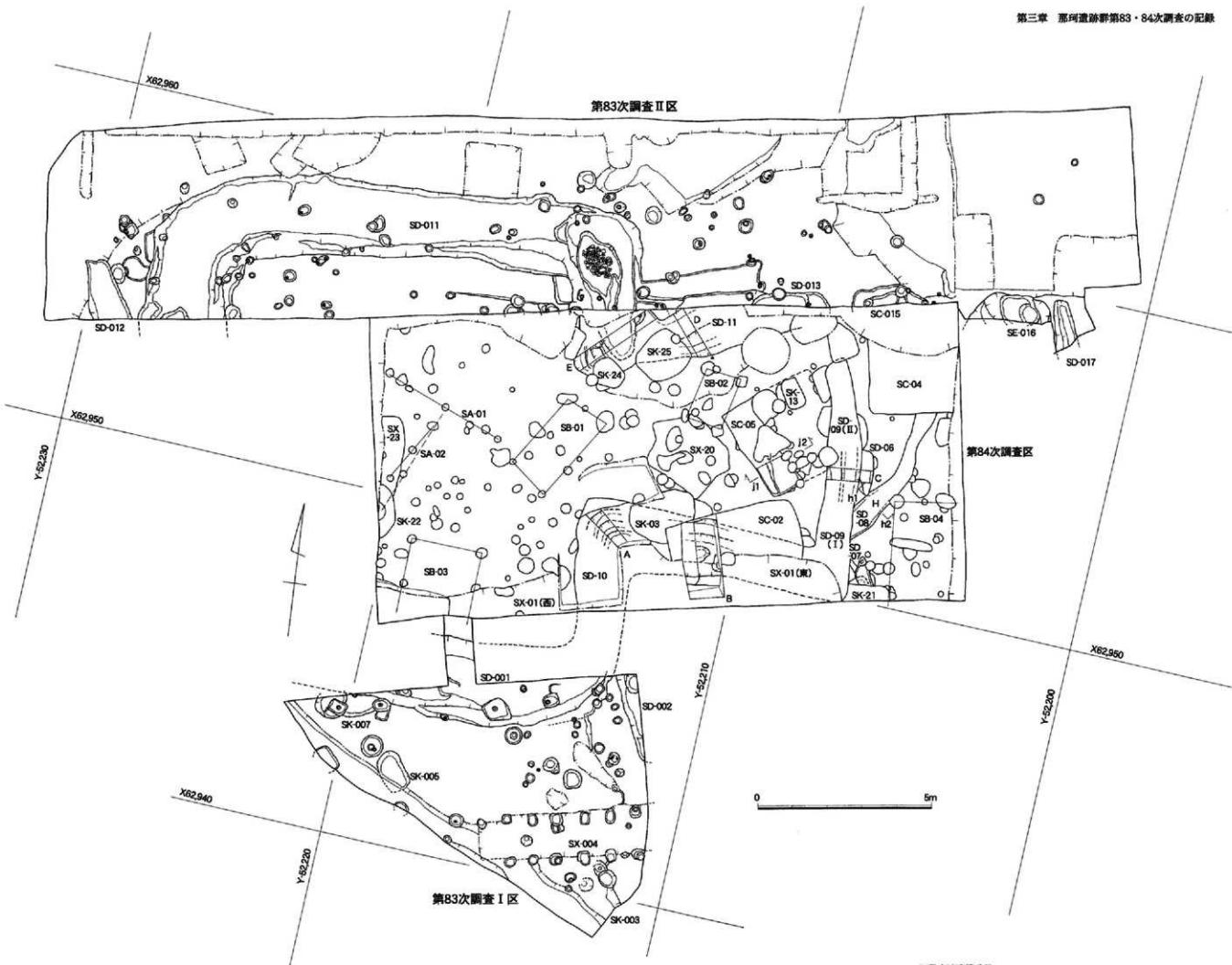


Fig. 3 第83・84次遺構配置図 (1/100)

西側は削られて60cmほど落ちる斜面となっている。また、東端部は車庫を造る際に大きく土取りされて90cmほど落ちており、遺構が残っていない。

検出遺構は、古墳時代前期の方形周溝墓1・弥生時代後期～古墳時代後期の堅穴住居1・溝2・土坑3・ピット多数、古代の井戸1・戦時の防空壕跡などである。出土遺物は古式土師器が主体を占め、ほかに弥生土器、土師器、須恵器、瓦、陶磁器など、合わせてコンテナケース約10箱が出土した。

方形周溝墓は、周辺でこれまで調査したものの中でも最も小型の部類に属する。遺物は主に溝の中位層から出土したが、北東コーナー部では古式土師器の壺形土器1個体が横倒しになった状態で出土した。溝上層からは古墳時代後期の須恵器が出土することから、この頃までは窪みとして周溝が残っていたと考えられる。周溝墓の主体部は今回の調査対象範囲からはずれているが、第62次調査結果から推して削平消滅していると考えられる。また、本次調査終了後に行った第84次調査により、この周溝墓の東側が台形状に張り出して前方後方形となることを確認した。

遺構実測の基準線は調査区の形状に合わせて任意に設定し、後『博多区・南区内（那珂～井戸地区）遺跡基準点測量委託 四級基準点測量成果簿（平成6年2月）』の成果を利用して国土座標（第II系）上に位置づけた。標高もこれによる。

5. 検出遺構と出土遺物

（1）方形周溝墓（前方後方形周溝墓） SD-001・011 Fig.4~6, PL.1~4

I区（南側調査区）の北壁際で検出した溝と、II区（北側調査区）の西半を占める溝とによって構成される方形に巡るとみられる溝である。調査時には方形周溝墓と考えていたが、その後第84次調査によって東側に台形状に張り出す溝が付き、前方後方形となることが明らかになった。I区で検出した周溝をSD-001、II区で検出した周溝をSD-011として遺物を取り上げた。SD-001とSD-011間の南北距離は、溝の内法で最大10.9m、外法で最大15.4mを測る。

SD-001は東西長7.5m分を確認した。遺構面は西へ向かって緩く下り、標高8.4~8.1mである。溝の東端は緩やかに北へ曲がっているが、調査区東端から西へ1.5mの部分に削平による20cm弱の段差があり、本来は図に点線で示したようなコーナーをなすと考えられる。西側は調査区外へ伸びているが、外周道路に面した崖面の土層観察により北へ伸びていくことを確認した。溝幅を調べるために調査区を北側へ一部拡張し、上端幅2.4mであることを確認した。土層断面図は溝主軸に直交していないが、横断面形は概ね逆台形を呈し、北側（周溝墓本体側）の立ち上がりがやや急である。溝の深さは最大45cmを測る。土層断面を見ると、中位に黒色粘質土がレンズ状に堆積し、その上下にやや色の薄い粘質土が堆積するが、小動物（齧歯類）又は木根による生痕が多くみられ、層が攢乱されている。

SD-011は東西長（外法）14.2mを確認した。溝の内法で東西10.0mを測る。遺構面の標高は周溝内の東端部が最も高く8.7mを測り、削平により周溝外縁へ向かって傾斜し、最も低い部分で8.2mまで落ちる。周溝の外周は更に大きく削平されて外周道路に向かって落ち込んでおり、あたかも周溝を残して回りを切り下げるような状況を呈する。この削平による影響のため中央部は溝幅が若干狭くなる。周溝の横断面形は逆台形をなし、中央部では北側壁（周溝墓と反対側）の傾斜がほんの僅かに急である。溝幅と深さ（遺構面標高-底面標高）は、西端で幅2.5m・深さ0.7m（8.3m-7.6m）、中央で幅1.8m、深さ0.65m（8.6m-7.95m）、東端で幅2.0m・深さ0.7m（8.6m-7.9m）で、遺構面・底面ともに西へ低い。北東コーナーは一段深く掘り下げており、底面から30cmほど浮いた位置で古式土師器の壺形土器が一個体出土した。また周溝墓の北東隅と北西隅の周溝内側は段状の傾斜面をなす。

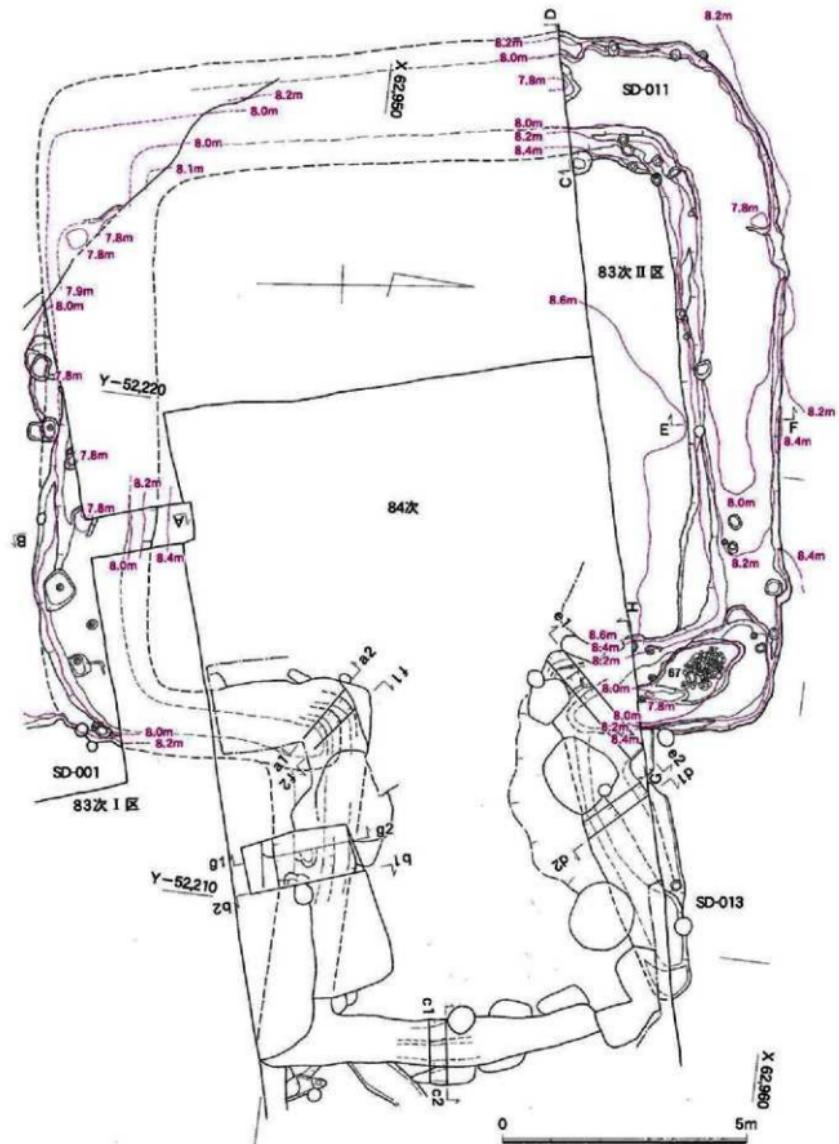


Fig.4 前方後方形周溝墓SD-001・011 (1/100)

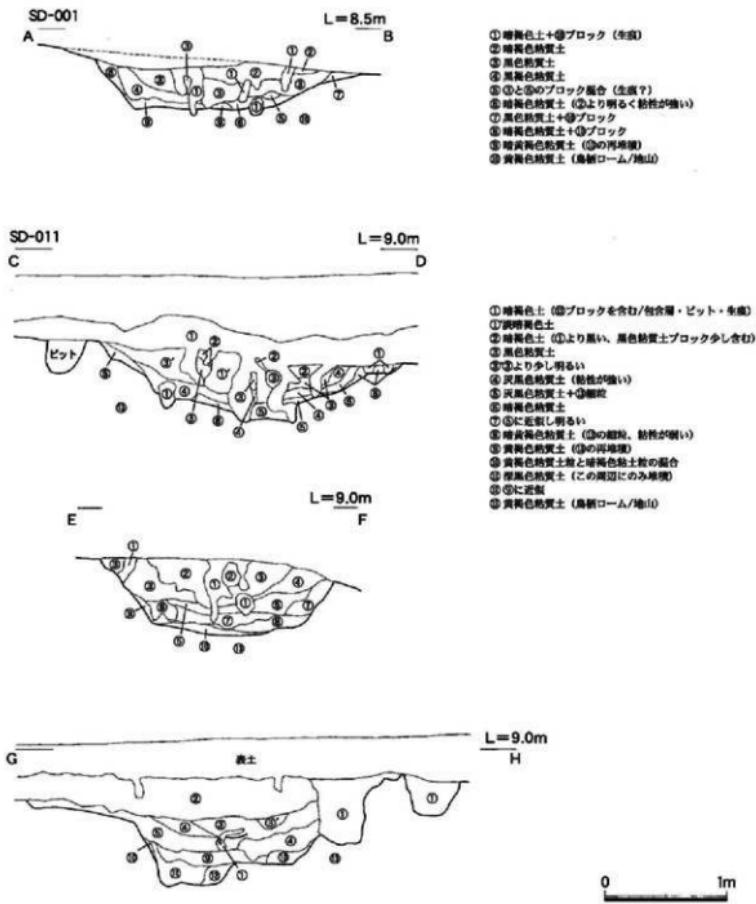


Fig. 5 SD-001・011土層断面図 (1/40)

土層の堆積は概ねSD-001と同様で、中位に黒色～灰黒色粘質土が堆積し、上層に暗褐色土、下層に地山ロームの堆積土が堆積し、生痕による擾乱を受ける。

SD-011東側の調査区壁に方形の窓みがあり、調査時には別の遺構と考えてSK-013の番号をふったが、第84次調査によってこれが前方部の一部であることが分かったためSD-013と改称し、この項で報告する。SD-013はⅡ区の南壁沿いに検出した。SD-011東端から長さ5.5mを測る。底面は南へ向かって落ち込んでいく。東隅がやや深く、底面まで30cm。

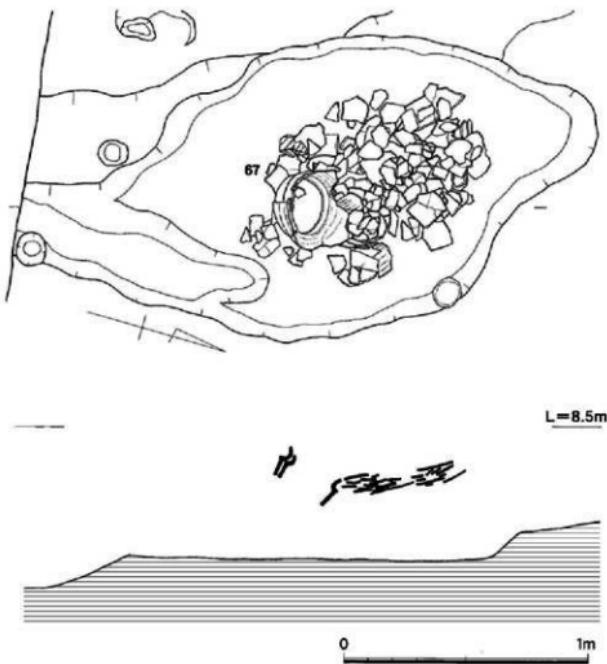


Fig. 6 SD-011土器出土状況 (1/20)

SD-001出土土器 Fig. 7, PL. 6

出土した遺物は約10cmごとに4層に分離して取り上げた。弥生土器、古式土師器、須恵器、白磁など、コンテナ1/2箱程度が出土した。

1～6は弥生土器である。1は壺の口縁部小片で逆「L」字形をなす。摩滅が著しく調整不明。淡黄褐色～橙褐色。胎土に細かい砂粒を多量に含み、焼成不良である。2は壺又は高坏の口縁部小片で鉤先形。調整不明。暗橙褐色で胎土精良、焼成良好。3は壺の胴部小片で、外面に台形突帯を貼付する。調整不明。淡橙褐色で細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成良好。4は壺の肩部片で、頸部に三角形突帯を貼付し横ナデ。内面は刷毛目後ナデか。淡橙褐色で、粗粒混じりの細砂粒を極めて多く含み、焼成良好。5は壺の底部小片で調整不明。淡橙褐色、胎土精良で雲母粒を含み、焼成良好。6は底部小片で摩滅する。淡橙褐色、細砂粒と雲母粒・暗赤色粒を少量含み、焼成良好。

7は古式土師器の二重口縁壺であろう。頸部小片。口縁は垂れ下がり気味に開く。胴との接合部から剥落する。内外面とも横ミガキか。にぶい橙褐色で、胎土精良で雲母粒を含み、焼成良好。3層出土。

8～11は須恵器の製作技法による土師器、いわゆる赤焼け土器である。8は壺身の小片で摩滅が著しい。灰白色で胎土精良、焼成良好。9～11は壺の胴部小片で同一個体か。外面擬格子タタキ、内面は不明瞭だが、当て具痕を刷毛目又はナデにより消す。橙褐色で、胎土に多量の細砂粒の他、雲母粒・暗赤色粒を含み、焼成不良。外面のタタキ以外は土師器の特徴を持つ。

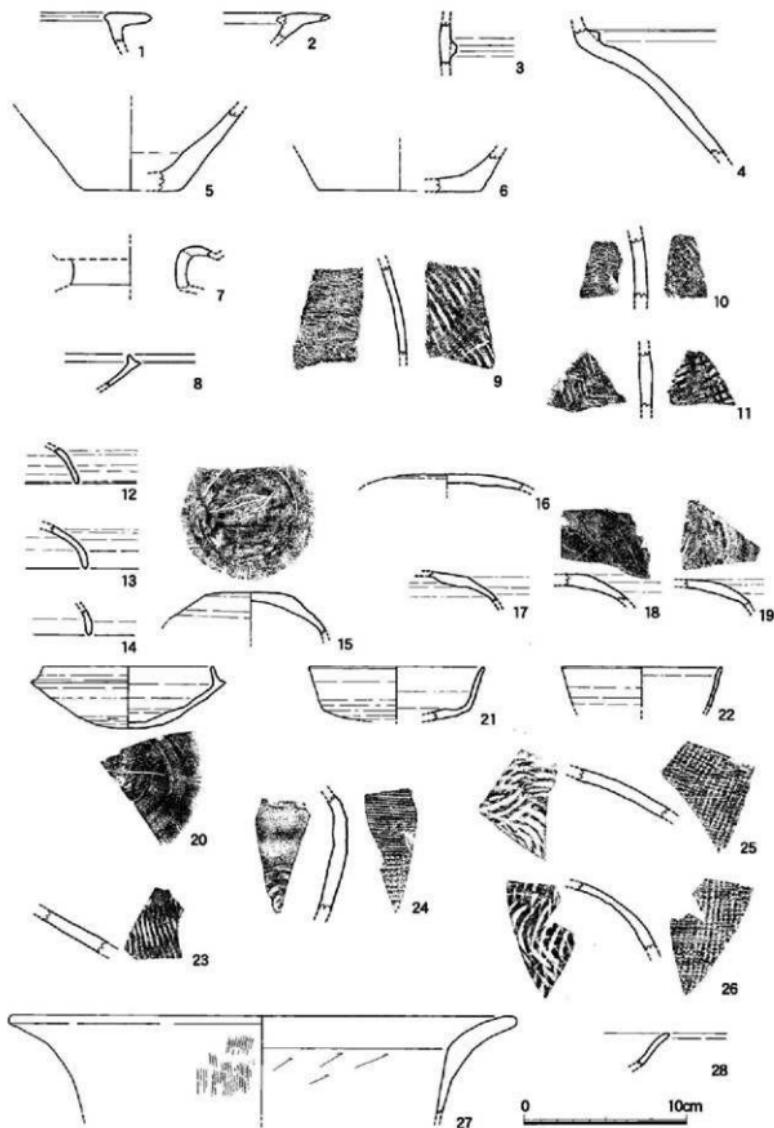


Fig. 7 SD-001出土遺物実測図 (1/3)

12~20は須恵器蓋坏である。12~14は蓋の小片で口縁端部は丸い。天井部回転ヘラ削り。12は灰黒色で細砂粒を多く含み、焼成不良。13は淡灰褐色で細砂粒が多く、焼成不良。14は淡灰青色で微細砂粒含み、焼成やや不良。15~19は蓋として固化したが確認はない。天井部内面に一部ナデを加え、外側は回転ヘラ削り。15は粗雑で厚みがあり、瓶類の底部かもしれない。天井部はヘラ切り後ヘラ削りで、魚文に似た3本のヘラ記号を入れる。ロクロ回転は逆時計回り。灰黒色で径2mm前後の白色粒を含み、焼成良好。16は灰黒色で微細砂粒を多く含み、焼成不良。17は外側が滑らかで視に用いたか。灰黒~灰青色で胎土精良、焼成不良。18はヘラ記号1本がある。淡灰~淡褐色で微細砂粒が多く、焼成不良。19もヘラ記号1本がある。灰黒~黑色で、粗砂粒混じりの微細砂粒を多く含み、焼成不良。20は坏身。蓋受けの返りは低く、端部は丸い。横ナデし内底の一部をナデ。体部外面の1/2を回転ヘラ削りし、ヘラ記号3本を入れる。ロクロ回転は時計回り。淡橙褐色で胎土精良、土師質焼成だが硬質である。復元口径10.4cm。21は須恵器坏身又は無蓋高坏か。底部回転ヘラ削りで、ロクロ回転は逆時計回り。暗灰青色で、径1~2mmの白色粒を多量に含み、焼成良好。22も須恵器無蓋高坏か。薄手。暗赤褐色で胎土精良、焼成良好。23は須恵器壺の胴部小片で、外側平行タタキ、内面は当て具痕を丁寧にナデ消す。灰青色で細砂粒を少量含み、焼成不良。24~26は須恵器瓶類の胴部片で同一個体と思われる。外側に擬格子タタキ、内面に半円形の当て具痕が残る。24の上半は外側カキ目、内面横ナデ調整する。黒~灰黒~灰青色を呈し、微細~細砂粒を多く含み、焼成良好である。

27は土師器壺の口縁部小片で、外反して開く。摩滅するが外側縦刷毛目、口縁内面横刷毛目、胴内面ヘラ削り。淡橙褐色で、細砂粒多量・雲母粒少量を含み、焼成良好。28は中国産白磁皿小片。体部外側下半ヘラ削り。胎土は淡灰青色で黒色微粒を含み密、緑味のある透明釉で、外側下端は露胎。

古墳時代後期~中世の須恵器・土師器・陶器は1層出土で、須恵器の一部は2層からも出土した。4~7などが遺構の時期を示す土器と考えられる。

SD-011出土土器 Fig.8~10, PL.6

SD-001と同様、遺物は約10cmごとに4層に分離して取り上げたが、生痕による搅乱が著しい。弥生土器、古式土師器、須恵器、砥石など、コンテナ4箱程度がある。

29~63は弥生土器である。29~36は逆「L」字形口縁の壺で、小片。29は口唇に刻目を入れ丹塗りする。淡橙褐色で胎土精良、焼成良好。30は横ナデ調整。淡橙褐色、細砂粒を多く含み、焼成良好。31は頸部に三角形突帯が付く。黄白色で、細砂粒を多く含み、焼成不良。32は横ナデ調整か。橙褐色で細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成良好。33は調整不明。淡橙褐色で細砂粒が特に多く、焼成良好。34は横ナデか。橙褐色、細砂粒を多量に含み、焼成良好。35は調整不明で、淡褐色、細砂粒を多量に含み、焼成良好。36は調整不明。赤褐色で細砂粒を多量に含み、焼成良好。37~40は口縁が「く」字形に屈曲して開く壺の口縁部小片で、頸部内面の稜は不明瞭。37は横ナデ調整。橙褐色で、細砂粒を多量と雲母粒を含み、焼成良好。38も横ナデ調整。橙褐色、細砂粒多量と径4mm粗砂粒を含み、焼成良好。39は調整不明。橙褐色で細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成やや不良。40は摩滅するが胴外面刷毛目か。橙褐色、細砂粒多量と雲母粒含み、焼成良好。41~43は中~大型の壺である。41は口縁が鷹先形をなし脛が張る。小片で図の傾きは不確。頸部に突帯が付く。横ナデ調整。橙褐色、径3mm以下の砂粒を多量に含み、焼成やや不良。42は口縁が「く」字形に開き頸部に三角形突帯を貼付する。淡黄褐~淡橙褐色、細砂粒を多量と暗赤色粒を含み、焼成不良。43も口縁「く」字形で内済する。頸部に三角形突帯を貼付。調整不明。橙褐色で径3~4mmと細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。44も「く」字形口縁でやや内済する。横ナデ調整。橙褐色、細砂粒多量と雲母粒・暗赤色粒を含み、焼成良好。45~46は口縁部の極小片で、器種不明。外反して開く。45は調整不明。淡黄褐色、細砂粒

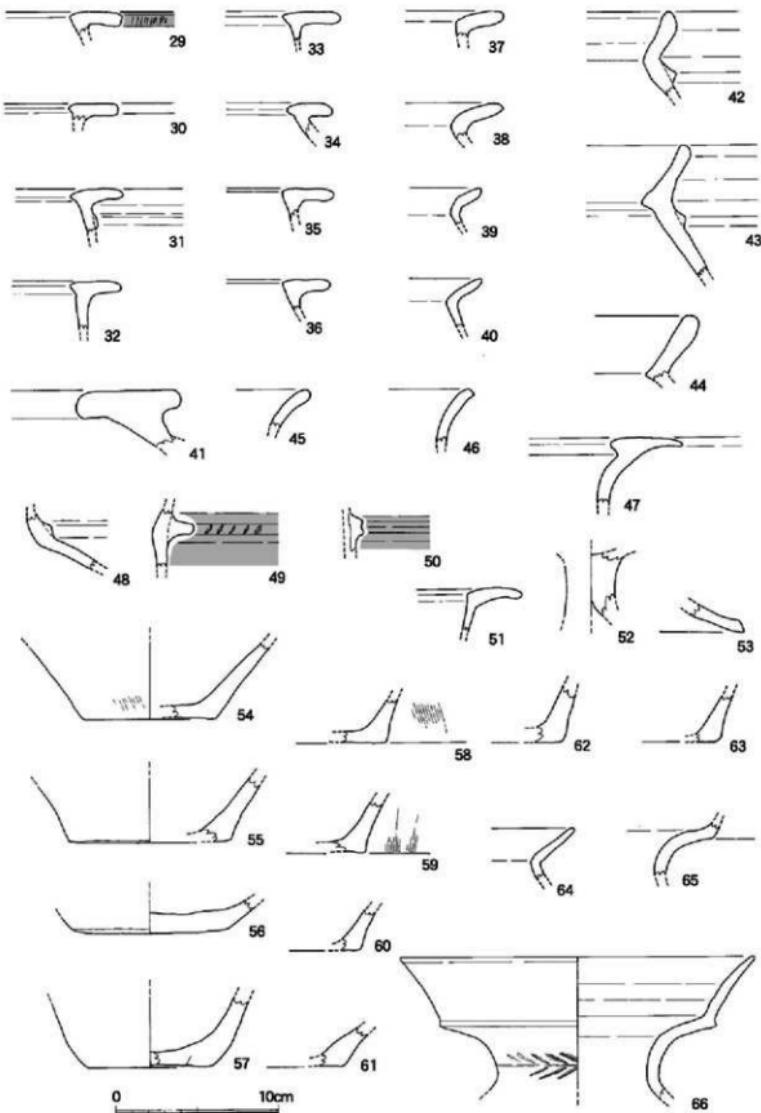


Fig.8 SD-011出土遺物実測図 I (1/3)

多量とカクセン石を含み、焼成やや不良。46は外面刷毛目調整か。淡褐～淡黄褐色、径3mmまでの砂粒を多量に含み、焼成良好。47～50は壺である。47は口縁部小片で鋸先形。横ナデ調整。橙褐色、細砂粒を多量と雲母粒を含み、焼成良好。48は頭部小片で、三角形突帯を貼付し横ナデ。橙褐色、細砂粒を少し含むが精良、焼成良好。49は瓢形壺の小片で、突帯は上向きで高く、端部にヘラ刻目がある。外面丹塗り。橙褐色で丹は暗赤色、細砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成やや不良。50は胴部小片でM字突帯が付く。外面丹塗り。明橙褐色で丹は暗赤色、胎土精良で雲母粒を含み、焼成やや不良。51～53は高壺である。51は逆「L」字形をなす口縁部小片で、壺の可能性もある。調整痕は残らない。淡黄褐色、胎土精良で雲母粒を含み、焼成良好。52は脚小片で、摩滅するが外面ナデ、内面ヘラ削りか。橙褐色、胎土精良、焼成不良。53は底部小片か。端部は面取り。調整不明。淡黄褐色、胎土精良、焼成良好。54～63は甕・壺・鉢等の底部片である。小片で器種不明のものがあり一括した。54は外面ナデ調整。にぶい橙褐色、細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成良好。55は調整不明。細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成良好。56は外底の摩滅が著しい。内面指押え→ナデ調整。橙褐色、径3mm以下砂粒・雲母粒多量、カクセン石僅かに含み、焼成良好。57は器壁完全剝落。細砂粒を多く含み、雲母粒が混じる。焼成不良。58は外面継刷毛目、内面不明。橙褐色、細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成良好。59は外面継刷毛目、内面ナデか。淡橙褐色、細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。60は調整不明。にぶい橙褐色、細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成やや不良。61も調整不明。橙褐色、径3mm以下の砂粒を少量含み、焼成やや不良。62は外面に刷毛目が僅かに残り、内面摩滅。橙～淡黄褐色、細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成不良。63は摩滅が著しい。橙褐色、細砂粒多量、焼成良好。

64～67は古式土師器である。64は布留系壺の口縁部小片で、摩滅して調整不明。淡黄褐色で、胎土に径3mmの粗砂粒混じりの微細砂粒と雲母粒を含むが精良と言え、焼成良好。65は壺か。小片で摩滅するが、内面上端にヘラミガキを施すか。外面橙褐色、内面淡褐～黒褐色。胎土に径4mmまでの粗大砂粒と細砂粒を多く含み、焼成不良で破面が黒色をなす。66は二重口縁壺。破片二つがあるが接合しない。摩滅するが内面横ナデか。外面は調整不明。頭部外面に沈線一条を巡らせ、上下に刷毛目具の小口を押圧して羽状文を施す。外面淡黄褐色、内面淡橙褐色。胎土に細砂粒を少量含むが精良な印象を受け、焼成良好。復元口徑21.7cm。67は北東コーナーで出土した大型壺である。溝底から浮いており、造墓後しばらくたってから供献されたと考えられる。二重口縁で、口縁内傾する。頭部に沈線と刷毛目具による羽状文を三段に施す。倒卵形胴部で丸底。胴外面は継刷毛目で、肩と胴中位を横刷毛目で装飾する。胴内面ヘラ削り。仕上げに頭から口縁を横ナデ調整。橙褐色、胎土に細砂粒を少量と暗赤色粒・雲母粒を含み、焼成不良。肩部に黒斑がある。

68～73は弥生時代後期～古墳時代前期の壺の底部で、いずれも不安定な平底ないし丸底である。68は胴下半の破片で底部の痕跡を残す。外面は底部付近に下から上のヘラ削りがあるが他は摩滅、内面はナデ調整か。淡黄褐色で、径3mm以下の砂粒・暗赤色粒を少量含み、焼成不良。69は調整不明。外面淡橙褐色、内面淡黄褐色。細砂粒を多量に含む他、径4mm粗砂粒・暗赤色粒が混じる。焼成不良で破面が黒色をなす。70は摩滅して調整不明。にぶい橙褐色、細砂粒が多く、雲母粒・暗赤色粒を含み、焼成良好。71は底部のみ完存する。凸状の不安定な底部で、外面ヘラ整形、内面に指押え痕が残るが摩滅が著しい。淡橙褐色～淡黄褐色で、細砂粒を含むが精良、焼成良好。72も同様の底部。内面刷毛目調整。外面黒色、内面淡灰色、胎土精良、焼成不良。73は小片。底端部がやや外に張り出す凸レンズ状底部。摩滅が著しいがナデ調整か。淡橙褐色、径3mm以下の砂粒を多量に含み、焼成良好。

74～77は器台である。74は1/5周が残る。内外とも指頭によるナデ調整。淡黄褐色で、細砂粒を少量含み、焼成不良。75は小片。外面継刷毛目、内面ナデ。外面淡橙褐色、内面淡黒褐色。径3mm粗粒・

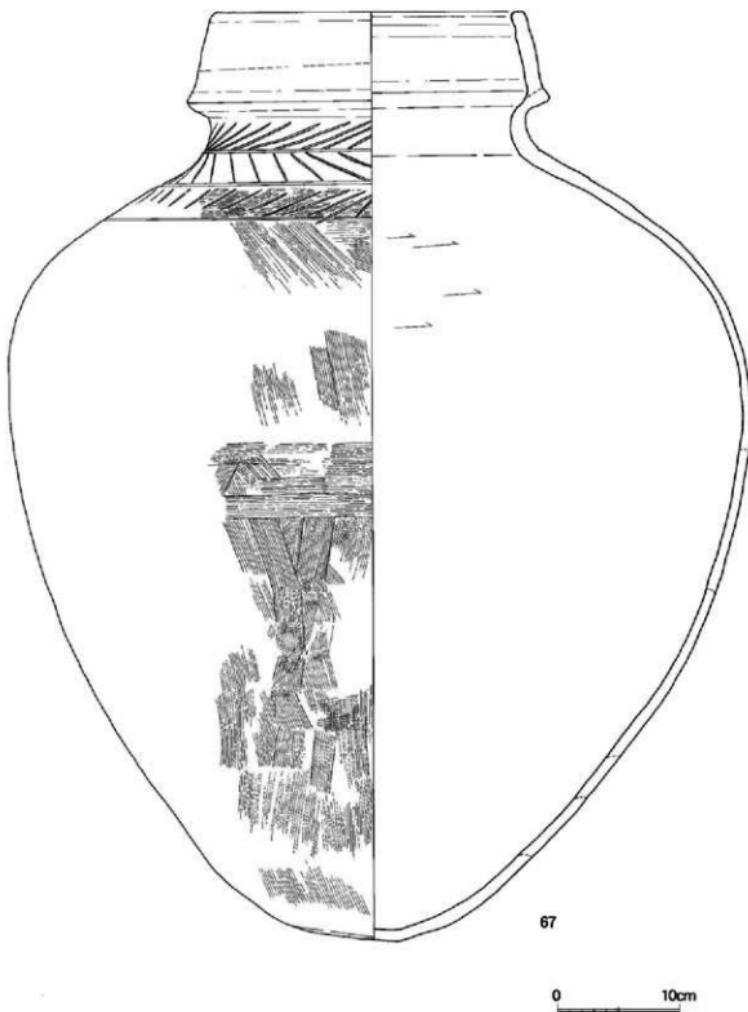


Fig.9 SD-011出土遺物実測図Ⅱ (1/4)

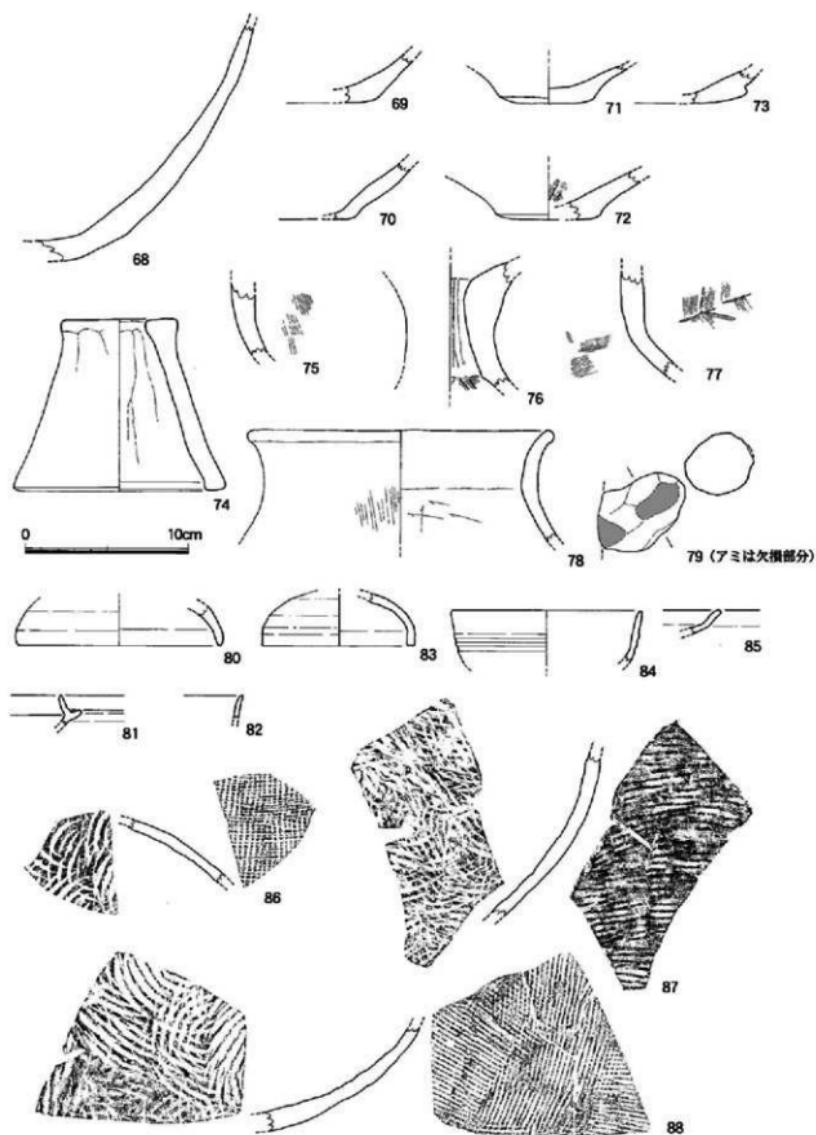


Fig.10 SD-011出土遺物実測図III (1/3)

雲母粒が僅かに混じる細砂粒を少量含み、焼成良好。76も小片。外面は摩滅するが刷毛目とナデの痕跡が残り、内面は指頭によるナデで、下端は刷毛目調整。橙褐色、細砂粒を多量に含み、焼成不良。77も小片。内外とも刷毛目調整。橙褐色、細砂粒・雲母粒を少し含み、焼成不良。

78・79は古墳時代後期以降の土師器である。78は甕又是瓶の口縁部片。胴外面擬刷毛目、内面ヘラ削りで、口縁横ナデで仕上げる。暗橙褐色、径3mmまでの砂粒を多量に含み、焼成良好。79は甕の把手。摩滅が著しい。橙褐色、粗砂粒少量、細砂粒多量、焼成良好。

80~88は須恵器である。80は坏蓋の小片で、2片あり接合しない。横ナデ。灰黒~淡赤褐色、径4mm粗粒混じりの細砂粒を少量含み、焼成不良。81は坏身で小片。蓋受けの立ち上がりは低く端部は丸い。横ナデ。淡灰青色、精良、焼成良好。82は器種不明。小片のため國の傾きは不確実。横ナデ。淡灰黒色、径1~2mm砂粒を少量含み、焼成良好。83は壺類の蓋か。口縁は直に立ち、端部は面取りする。天井部全体を回転ヘラ削り。外面淡灰青色、内面灰黒色。胎土精良、焼成良好で、外面に降灰を被る。84は無蓋高坏の口縁部小片。体部外面に沈線2条を巡らす。外面灰青、内面黑色。胎土精良、焼成良好。口縁外面から内面に降灰しており、横置焼成。85は古代の須恵器皿小片。暗灰青色、胎土精良、焼成良好。86は壺脇部片。外面擬格子タタキ→カキ目、内面半円文の當て具痕。外面灰黒色、内面黒色。胎土精良で焼成やや不良。87も壺の脇部下半。小片で摩滅している。外面平行タタキ、内面半円文の當て具痕。赤茶色、細砂粒を少量含む。焼成不良。88は壺の底部付近の破片。外面擬格子タタキで、一部ナデを加える。内面半円文の當て具痕。淡灰青色、細砂粒を少量含み、焼成やや不良。

SD-011では第4層(最下層)からも須恵器小片が出土しており、小動物による擾乱が著しい。SD-001・011とも溝中位に堆積した黒色土(③層)から須恵器が多く出土しており、少なくとも7世紀頃までは周溝の形が残っていたものと考えられる。67の古式土師器大型壺が溝底面より約30cm浮いた位置から潰れた状態で出土しており、造墓と祭祀時期の手がかりとなろう。

SD-013出土土器 Fig.11

前方部周溝の一部と考えられる落ち込みである。弥生土器、古式土師器、須恵器等が少量出土した。

89は弥生土器甕の口縁部小片で、逆「L」字形をなす。調整不明。淡黄褐色、径3mmまでの砂粒を多量に含み、焼成良好。90は弥生土器の底部片で、摩滅が著しい。赤橙~灰黒色、径3mm以下砂粒を多量とカクセン石を含み、焼成不良。91は古式土師器高坏で、口縁と底部を欠く。坏底に脚を差し込んで接合する。摩滅が著しいが、脚筒部は横ミガキか。根部は擬刷毛目調整。内面の調整は、筒部をヘラ削り→ナデ、裾部はナデ調整か。橙色、胎土精良で、焼成良好。92は須恵器坏蓋で、天井部の約1/2を回転ヘラ削りし、「V」のヘラ記号を入れる。ロクロ回転は時計回り。暗赤褐色で、細砂粒を少量含み、焼成不良。外面に降灰がある。復元口径11.8cm。

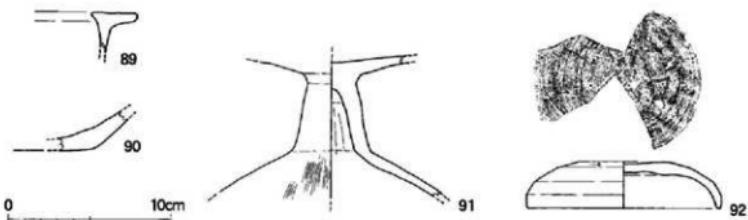


Fig.11 SD-013出土遺物実測図 (1/3)

(2) 溝状遺構

溝状遺構は3条を確認した。いずれも調査区の壁際や遺構面の落ち際で検出しており、一部分を確認したに留まる。

溝状遺構SD-002 Fig.12, PL.4

I区東壁際に検出した。形状から溝と判断したが、第84次調査区には伸びておらず、溝ではないと考えられるが性格は不明。調査区壁際に沿って長さ2.6mほど伸びており、現状で幅0.55mである。横断面逆台形を呈し、深さ25cmを測る。覆土は暗褐色土である。

SD-002出土土器 Fig.13

土師器、須恵器などが少量出土した。

93は土師器の甕で、縦に割れた1/5周ほどの破片である。口縁は外反して長く伸び、丸くおさめる。頸部は丸くくびれ、なで肩である。外面は斜～縦の刷毛目調整で、内面は口縁が横刷毛目、胴部がへラ削り調整。口縁内外横ナデ調整で仕上げる。外面橙褐色、内面淡褐色を呈し、胎土に径3mm粗粒混じりの細砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成良好である。復元口径24.2cm。94は須恵器壺蓋の小片である。端部は丸い。灰青色で、胎土に黒色粒を含み、焼成良好。

古墳時代後期の遺構と考えられる。

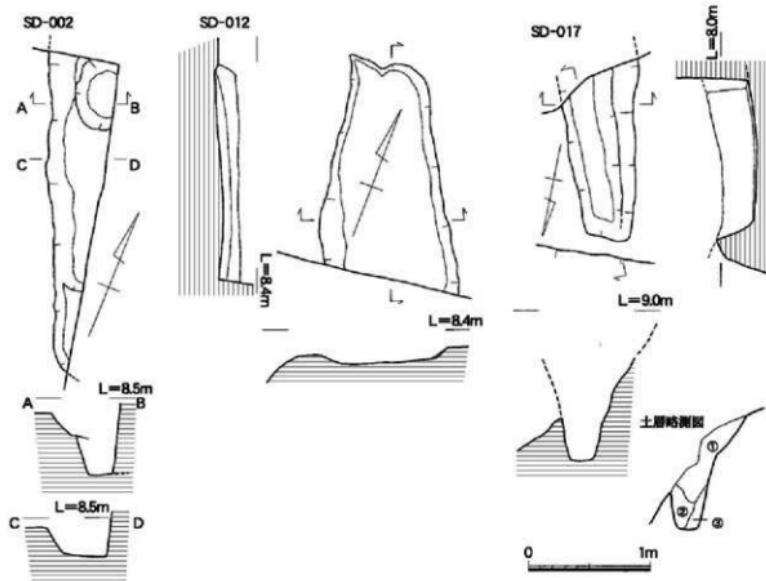


Fig.12 SD-002・012・017実測図 (1/40)

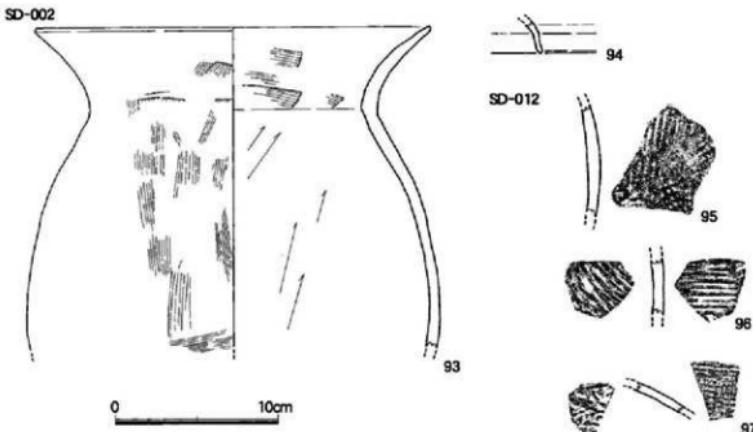


Fig.13 SD-002・012出土遺物実測図 (1/3)

溝状遺構SD-012 Fig.12, PL.4

II区西端に検出した。北端は削平消滅し、南側は調査区外へと伸びる。北西—南東方向に長さ2mほどを確認した。最大幅は1.05m。断面逆台形をなし、深さ20cmと浅い。覆土は黒褐色土である。調査範囲が狭く、溝である確証はない。

SD-012出土土器 Fig.13

土師器、須恵器が少量出土した。

95は須恵器の技法による土師器、いわゆる赤焼土器の壺の胴部小片である。外面は擬格子タタキで、内面は摩滅する。外面淡灰黄色、内面赤橙色をなす。径5mm粗粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成良好。96も赤焼土器の壺の胴部小片。外面平行タタキで、内面に半円文の当て具痕が残る。淡黄褐色をなし、胎土精良で暗赤色粒を含み、焼成良好。97は須恵器壺の胴部小片である。外面は擬格子タタキ、内面は半円文の当て具痕が残る。灰青色で胎土精良、焼成良好。

古墳時代後期の遺溝であろう。

溝状遺構SD-017 Fig.12, PL.5

II区の東端に検出した。調査区内では車軸造成により完全に削平消滅しているが、調査区南壁にかかった遺構（井戸SE-016）を拡張調査する際に隣接して検出した。磁北から25°西偏し、南側は調査区外へと伸びていく。長さ1.5mを確認した。最大幅0.6mだが、溝の東側は擾乱により損なわれており、本来の溝幅は1m前後となる。断面逆台形をなし、底面は平坦で、北へ僅かに傾斜する。北端は立ち上がっており、溝底には凹凸があるものと考えられる。覆土は①黒褐色土、②暗褐色土、③ローム二次堆積土である。断面等の形状から、北側第62次調査で検出した溝SD-009 (Fig.2参照) に連続すると考えられる。

遺物は出土しなかった。周辺調査例からみて、那珂・比恵遺跡群を縦断する古墳時代初頭の並列溝（道路側溝）の東溝と考えられる。

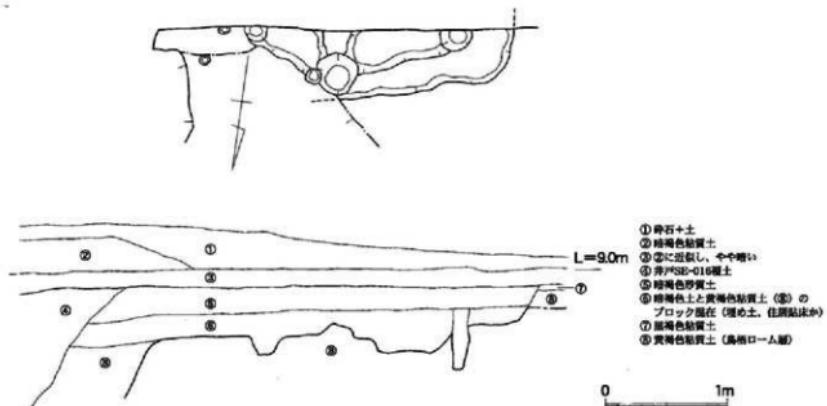


Fig.14 SC-015実測図 (1/40)

(3) 壊穴住居

壊穴住居SC-015 Fig.14、PL.5

II区の東半に検出した。調査区の南壁際で一部を確認したのみだが、第84次調査でプランを確認し、南北長7.5mの方形プランの壊穴住居と判明した。東側が攪乱により大きく破壊されており、東西長は不明であるが、5mを越えよう。南壁の土層断面では井戸SE-016に切られている。土層図の③層が住居覆土で、⑥層は貼床と考えられ、よって住居の深さは20cm程度となろう。床面はおおむね平坦である。第84次調査では保存のため掘り下げていないが、移動式カマドが出土している。

SC-015出土土器 Fig.15

土師器、須恵器の小片が12点出土した。

98は須恵器蓋坏の小片である。外面回転ヘラ削りで、ロクロ回転は時計回り。内面にナデを加える。暗灰青色で胎土精良、焼成良好。99も須恵器蓋坏の小片である。外面回転ヘラ削りでヘラ記号を入れる。赤味のある灰青色で、胎土精良、焼成良好である。

古墳時代後期以降の壊穴住居と考えられよう。

(4) 土坑

土坑は3基を報告する。他にI区で不整形の土坑1基を検出したが、遺物が出土していないため報告から省いた。

土坑SK-003 Fig.16

I区南端でその一部を確認した。周囲を攪乱により削られて覆土のみが残った造構で、プランや規模等は不明である。東辺とみられる立ち上がりがあるが、北端では東にやや開いており、複数の造構が切り合っていた可能性もある。南北1.9m以上、東西2.0m以上の造構で、深さ15cm。覆土は暗褐色土・黒色土・地山ロームの混合土である。

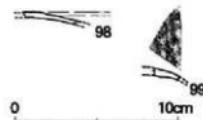


Fig.15
SC-015出土遺物実測図 (1/3)

SK-003出土土器 Fig.17

土師器、須恵器の小片35点が出土した。

100は須恵器模倣の赤焼け土器である。壺の胴部小片か。摩滅するが外面擬格子タタキ、内面は当て具痕の上から刷毛目調整を加える。外面暗褐色、内面にぶい橙褐色。胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好。101は須恵器の壺又は瓶類の小片で、外面は回転ヘラ削りの上からカキ目を加える。ロクロ回転は時計回りで、内面は横ナデ。淡灰色で、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成不良。102は須恵器壺の胴部小片で、外面は擬格子タタキにカキ目を加え、内面は同心円文当て具痕が残る。暗赤褐色で胎土精良、焼成は極めて不良。

古墳時代後期の遺構である。

土坑SK-005 Fig.16、PL.5

I区の西端付近に検出した。南側は道路により削平されているが、梢円形プランを呈するものと考えられる。長径1.2m、短径0.7mを測る。断面逆台形を呈し、深さ20cm弱である。覆土は暗褐色土である。

SK-005出土土器 Fig.17

土師器、須恵器などの小片が31点出土した。

103は土師器壺の口縁部小片である。胴内面ヘラ削りの他は調整痕が残らない。橙褐色～暗褐色で、径3mm粗砂粒と雲母粒混じりの細砂粒を極めて多量に含み、焼成良好。104は移動式カマドか。径が大きい。摩滅するが外面ナデか、内面は指押え痕が残る。橙～橙褐色で、細砂粒を極めて多く、雲母粒を多く含み、焼成良好。二次加熱により赤変し、底面は黒く変色している。105は赤焼け土器の小片で、外面擬格子タタキ、内面は当て具痕の上から刷毛目を加える。外面にぶい橙褐色、内面灰褐色。微細砂粒と雲母粒を少量含み、焼成やや不良。

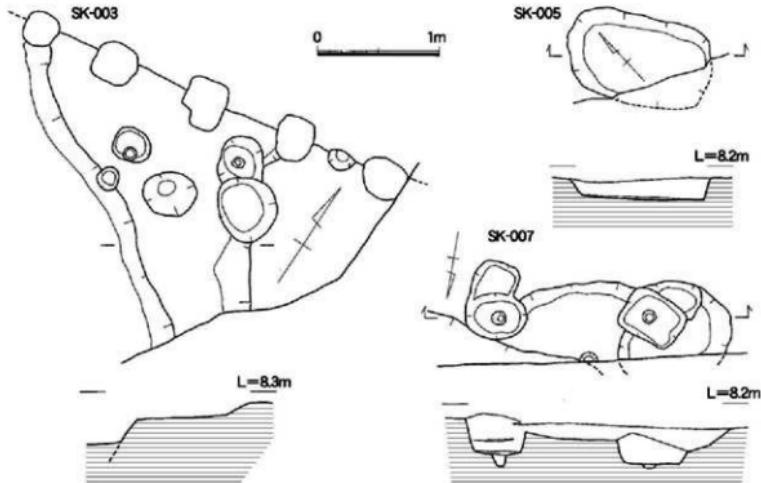


Fig.16 SK-003・005・007実測図 (1/40)

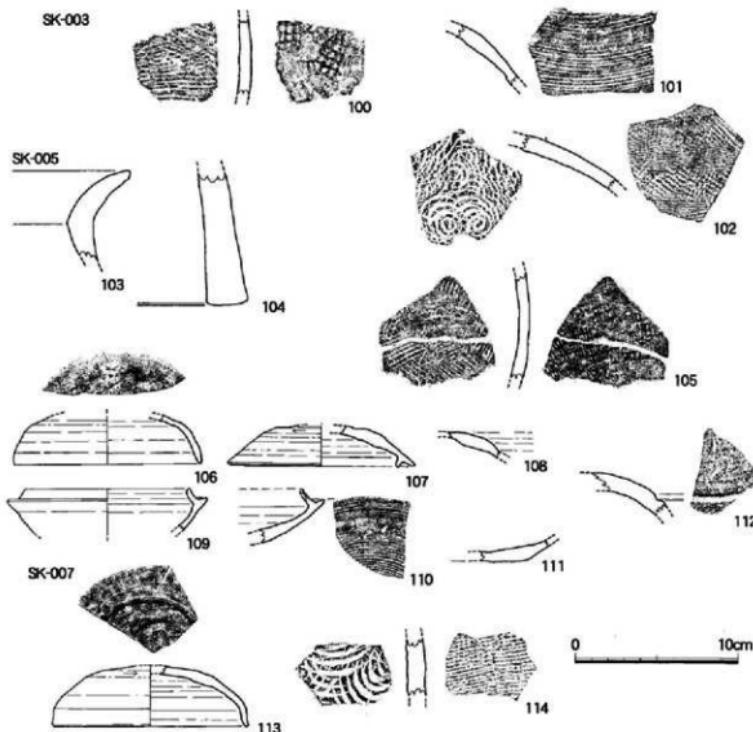


Fig.17 SK-003・005・007出土遺物実測図 (1/3)

106～111は須恵器蓋坏である。106は蓋で、天井部の1/2強の範囲を回転ヘラ削りし、ヘラ記号1本を加える。ロクロ回転は逆時計回り。濃灰青色で細砂粒を多く含み、焼成良好。復元口径11.4cm。107は蓋か。蓋受けの返りは極めて低く、僅かに外から見えるのみ。天井部1/2強を回転ヘラ削りする。ロクロ回転は逆時計回り。灰青色で胎土精良、焼成良好で、天井部外面に僅かに降灰がある。復元口径9.4cm。108は小片で、天井部はヘラ切り未調整。暗灰色で、微細砂粒含むが精良、焼成良好。109は身で、返りは低く内傾する。淡灰青色で胎土精良、焼成良好。外面と受け部の一部にかけて降灰がある。復元口径10.0cm。110も身で、外面にカキ目を施す。ロクロ回転は逆時計回り。灰黒色で胎土精良、焼成良好。111は小片で、外底はヘラ切り未調整。内底は横ナデの上からナデを加える。外面淡灰褐色、内面淡灰青色。径3～5mmの粗砂粒を少し含み、焼成不良。112は須恵器躰である。肩部に四線が回り、直下に列点文が僅かに認められる。外面灰黒色、内面淡灰青色をなす。径1～2mmの細砂粒を多量に含み、焼成不良。

古墳時代後期の遺構であろう。

土坑SK-007 Fig.16、PL.5

I区西端に検出した。北側をSD-001に、東西端をピットに切られるが、梢円形プランをなすとみられる。長径1.7m以上、短径0.7m以上。断面皿状をなし、深さ10cmと浅い。覆土は暗褐色土・黒色土・地山ロームの混合土である。

SK-007出土土器 Fig.17

図示した2点のみが出土した。

113は須恵器蓋で、天井部の1/2の範囲に回転ヘラ削りを施し、ヘラ記号1本を加える。ロクロ回転は時計回り。横ナテ調整で、内面はナテを加える。暗赤褐色を呈し、胎土に細砂粒を含むが精良で、素地土の練りが白色の縞状に残る。焼成良好。114は須恵器壺の胴部小片で、外面繊維格子タタキ、内面は半円ないし同心円文の当て具痕が残る。

外面灰青色、内面灰黒色をなす。胎土精良で、破断面に素地土の単位が縞状に見える。焼成良好。

古墳時代後期の遺構であろう。

(5) 井戸**井戸SE-016 Fig.18、PL.5**

II区の東端部に位置する。当初、調査区の南壁土層に落ち込みが認められたため、この性格を把握する目的で調査区の一部を南へ拡張して調査を行い、井戸であることを見た。井戸の上部は削平されており、東辺は擾乱により破壊を受けている。掘方は調査区南外へ広がりをみせるが、井戸の主要部分はおおむね調査区内におさまっている。掘方のプランは略円形をなすと考えられ、径2.5m以上となる。円筒状に掘り下げているが、壁面の崩壊が著しい。深さ3.0mを測り、底面には径0.6m、深さ10cmほどの水溜めの小穴がある。遺構壁面に観察される地山土の層は、①堅穴住居SC-015覆土、②鳥栖ローム、③八女粘土層で、②層下部で大きく崩落している。覆土は黒褐色～暗褐色粘質土で、自然に埋没した状況を示す。現在の湧水はない。

SE-016出土土器 Fig.19、PL.6

土師器、土器小片、須恵器、中国産陶磁器（越州窯系青磁・白磁）、瓦、砥石、骨がコンテナ1箱出土した。

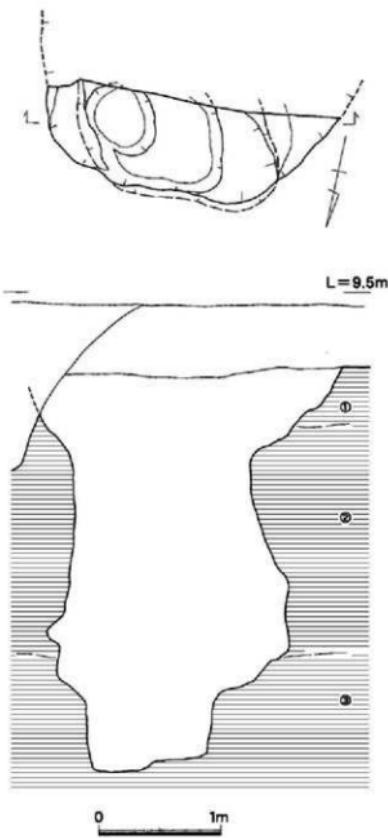


Fig.18 SE-016実測図 (1/40)

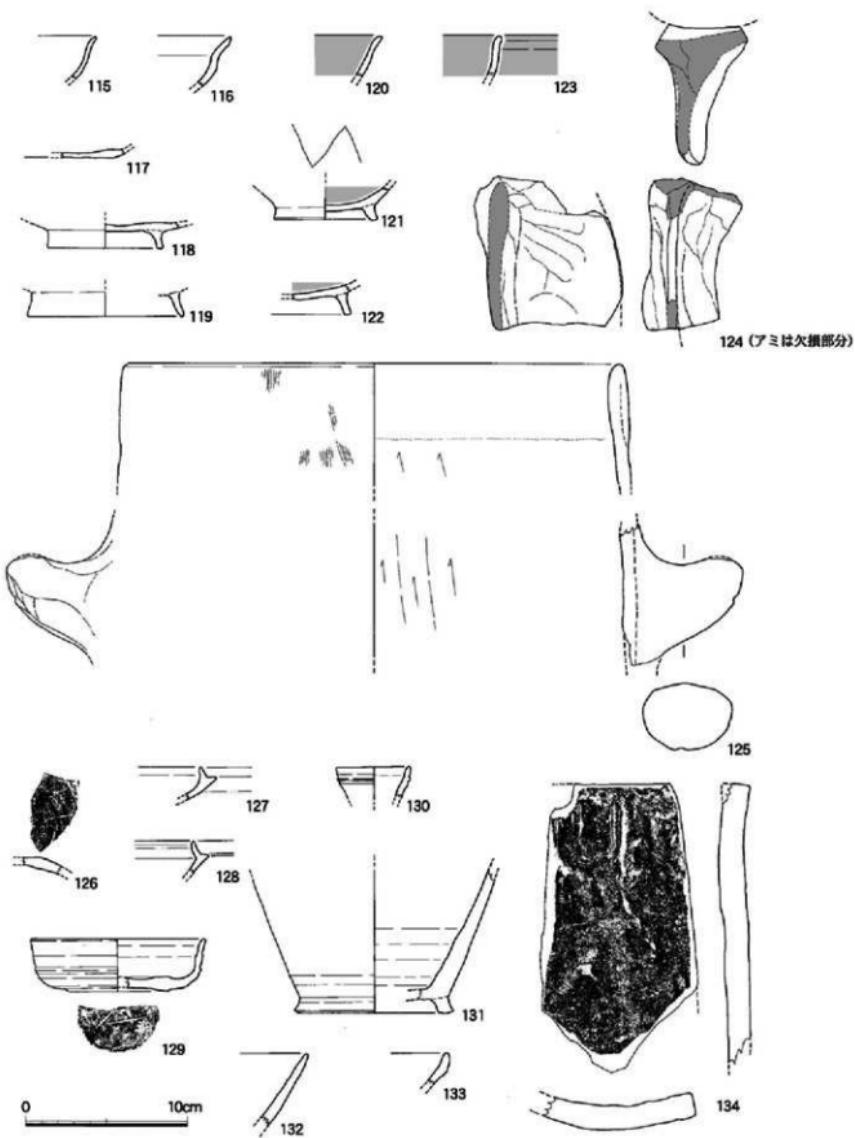


Fig.19 SE-016出土遺物実測図 (1/3)

115・116は古式土師器の鉢か。小片で摩滅が著しく、調整痕を留めない。胎土精良、焼成良好。

117～119は古代の土師器である。117は小片だが坏か。摩滅するが底部ヘラ切りであろう。淡灰～淡橙色で、胎土精良、焼成不良。118は高台付大皿か。底部ヘラ切りで、高台を貼付して横ナデ。黃白色で、外底は炭素が吸着して黒色をなす。細砂粒を少し含むが精良、焼成やや不良。119は楕の高台部のみの残欠で、接合部から剥がれている。灰白色で胎土精良、焼成良好。120～123は黒色土器である。120は内面のみ黒色に施したA類楕で、口縁部の小片。外面にはぶい橙褐色。胎土精良で雲母粒を含み、焼成良好。121も黒色土器A類楕で、底部完存する。高台接地部が圧を受けて一部潰れる。外底ヘラ切りで、高台横ナデ。体部内面は粗いヘラミガキで、焼成後のヘラ記号がある。外面黄白色で、胎土精良、焼成良好。122もA類楕の底部小片。外底ヘラ切りか。高台は高めで横ナデ調整。外面は淡黄灰色を呈する。胎土精良、焼成やや不良。123は内外とも黒色のB類楕。粗いヘラミガキを施す。胎土精良、焼成良好。124は移動式カマドの焼き口部分である。本体内面と鋤内面が黒変し煤が付着する。暗橙褐色で、細砂粒と雲母粒を少し含み、焼成不良。125は瓶である。口縁と把手があり接合しないが同一個体である。口縁は小片のため図の径と傾きは不確実である。口縁外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。外面は縱刷毛目→ナデ調整で、把手はヘラ状工具による整形、内面はヘラ削り。外面橙褐色、内面黒～灰褐色をなす。胎土に雲母粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成良好。二次加熱を受けており、特に内面に顯著である。

126～131は須恵器である。126～129は蓋坏である。126は蓋として図示したが、小片のため不確実である。天井部回転ヘラ削りで、ヘラ記号1本を入れる。ロクロ回転は時計回り。内面は横ナデにナデを加える。外面灰黒色、内面暗赤褐色をなす。胎土に細砂粒を少量含み、素地土の練りの単位が白色の縞状に残る。焼成良好。127は坏身か。小片のため図の傾きは不確実。返りは短く内傾し、端部は丸い。横ナデ調整。灰青色をなし、胎土精良で粘土の練りの単位が縞状に残る。焼成良好。128も坏身小片。返りは短く端部は丸い。横ナデ。灰青～暗赤褐色で、胎土精良、焼成不良。129は坏で、外底ヘラ切り又は板起こで、ヘラ記号を入れ、外縁を回転ヘラ削りする。灰黒～灰青色で、細かい白色粒を少量含み、焼成やや不良。内面に降灰がある。130は瓶類の口縁部小片で、外面に沈線2条を巡らす。黒色で、胎土精良、焼成良好。外面に降灰を被る。131は壺の底部小片で、底部の外縁に低い高台を貼付する。横ナデ調整。外面黒色、内面淡灰青色をなす。胎土精良、焼成良好。外面に降灰し、内面にも灰が散っている。

132は越州窯系青磁碗の口縁部小片である。釉下に白化粧土を施す。胎土は淡灰青色で密、濃緑色の釉で、体部下半は露胎である。133は白磁碗の口縁部小片で、全釉。博多分類のIV類又はXI類。

134は平瓦片である。凹面に模骨痕らしき溝みを認めるが摩滅して不明瞭。凸面は摩滅する。側面はヘラで面取りする。胎土に細砂粒を少量含むが精良と言え、練り合わされた白色粘土が縞状に層をなす。土師質焼成で橙褐色を呈する。

古代の井戸である。

(6) その他の遺構と出土遺物

SX-004 Fig.20, PL.6

I区の南半に検出した。東西方向に長い長方形プランの遺構で、東側は調査区外へ伸びる。東西長4.9m以上、南北幅1.3～1.35mで、西端部は幅が狭まり1.05mとなる。西側は削平されて遺構の残りが悪い。箱形に直に掘り下げており、最も残りの良い北東隅で深さ40cmを測る。底面は平坦で、傾斜はない。長辺の壁に沿って柱穴が7本密に並んでおり、柱間の平均は74cm。北側は壁の内側に、南側

は壁の外側に柱が立ち、柱穴底面のレベルが揃う。屋根の支柱と考えられる。西端の1間分がやや狭くなる部分は入り口と見られ、西側の切り通しの崖面に開口していたのであろう。覆土及び出土遺物から近代～現代の遺構と考えられ、農作物の穴蔵もしくは防空壕といった性格が考えられよう。

SX-004出土器 Fig.21

土師器、須恵器、中国產陶器(白磁・青白磁)、滑石片などが少量出土した。

135は土師器で火鉢か。底部に横棧があり、灰が下に落ちるように造られている。橙褐色で、径3mm以下の砂粒を多量に含み、焼成良好。136は青白磁の碗である。見込みに段があり、高台置付は若干内傾する。外面は回転ヘラ削りで、外底にハマの痕がある。胎土は白色で磁質、青味のある不透明釉を全体に施釉する。

その他の出土土器 Fig.22、PL.6

報告から漏れた土坑・柱穴などの遺構や、表土からの出土器、遺構検出時に出土した土器をまとめた。

137～142は弥生土器である。137は壺の口縁部小片で、図の傾きは不確実である。逆「L」字形をなす。摩滅するが横ナデ調整か。径3mm以下の砂粒多量と暗赤色粒を含み、焼成良好。138は摩滅した小片で器種不明。口縁もしくは脚の可能性もある。橙褐色、細砂粒多量と暗赤色粒を含み、焼成良好。139は壺の胴部小片で、台形突帯2条を貼付するが調整痕は残らない。暗赤色粒混じりの

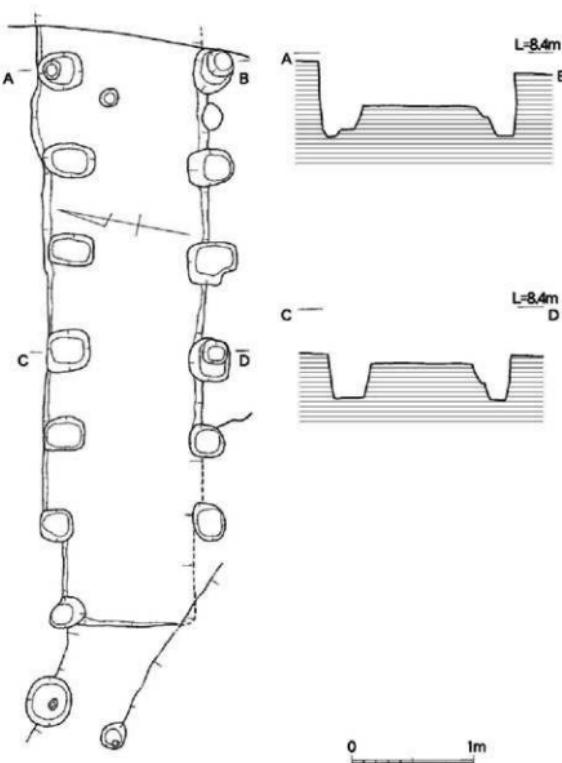


Fig.20 SX-004実測図 (1/40)

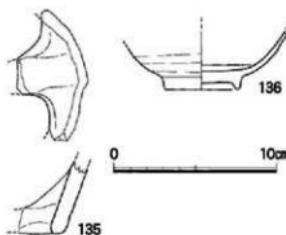


Fig.21 SX-004出土遺物実測図 (1/3)

細砂粒を多量に含み、焼成良好。140も壺の胸部小片で、台形突帯を雑に貼付してヘラ削りを入れる。淡橙褐色～黒色で、胎土に径3mm以下の砂粒を多量に含み、焼成不良。141は平底の底部小片で、摩滅し調整不明。橙褐色で雲母粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成良好。142も摩滅した底部小片で、平底。橙褐色～淡橙褐色で、細砂粒を多量に含み、焼成良好。

143は古代の土師器壺で、口縁部小片である。胴内面ヘラ削り、他は横ナデ調整。暗橙褐色で、径3mm粗粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成良好。外面に煤が付着する。

144～148は須恵器の技法で製作した土師器、いわゆる赤焼け土器である。いずれも壺の胸部小片で、外面のタタキ目は146・147が平行タタキ、他は擬格子タタキ。内面は摩滅するが刷毛目調整とみられ一部にナデを加える。144は頸部に近い破片で、上端の内外を横ナデ調整する。橙褐色を呈し、胎土の砂粒は少なめで暗赤色粒を含む。焼成は145・148が不良、他は良好。

149～160は須恵器蓋坏である。149は蓋で、天井部に扁平な宝珠状鉢が付き、口縁端部は下方に垂れて断面三角形をなす。天井部の2/3弱に回転ヘラ削りを施す。ロクロ回転は時計回り。灰青色で、細砂粒を多く含み、焼成良好でやや瓦質、外面に一部降灰がある。復元口径16.2cm。150は身の小片で、図の傾きは不確実。蓋の可能性もある。灰黒色で、焼成良好。外面に降灰がある。151は身で、返りは低く、端部は尖り気味である。底部の約2/3に回転ヘラ削りがあり、ロクロ回転は逆時計回り。内底は横ナデの上からナデ。外面灰青色、内面淡灰色。細砂粒を少量含み、焼成不良。復元口径10.0cm。152も身で、体部が扁平である。返りは低く端部は丸い。底部の1/2を時計回りの回転ヘラ削り。横ナデで、内底にナデを追加する。灰黒色で細かい白色粒を含み、焼成良好。外面に薄く降灰する。復元口径8.8cm。153は身の小片で図の傾きは不確実。返りは短く尖り気味。灰黒色で焼成良好。154も身の小片で、図の傾きは不正確。返りは短く丸い。灰黒色で、細砂粒を少量含み、焼成良好。外面に降灰がある。155も身で、外底は平坦でヘラ切り未調整か。ロクロ回転は逆時計回り。ヘラ記号1本を入れる。灰黒色で細かい白色粒を少量含み、焼成良好。外面に薄く降灰する。復元口径9.2cm。156～160は小片で、蓋か身か区別できない。156は外面が逆時計回転のヘラ削りで、ヘラ記号1本を入れる。灰黒色で、焼成良好。157は外面回転ヘラ削り。灰黒色で、胎土に練られた素地土の単位が織状に残り、焼成不良。158は外面回転ヘラ削り。焼成良好で、全面に炭素が吸着し黒色を呈する。159は外面ヘラ切り未調整か。その脇を回転ヘラ削りし、ヘラ記号1本を入れる。ロクロは逆時計回り。灰黒色で、細かい白色粒を多く含み、焼成良好。160は外面ヘラ切り未調整で、ヘラ記号1本がある。削りは加えない。灰黒～暗赤褐色をなす。胎土に細砂粒を多量に含み、焼成不良。161は須恵器疋か。底部は時計回りの回転ヘラ削りで、内底にナデを加える。灰青色で、外面は炭素が吸着して黒変し、一部が銀化する。胎土精良で焼成不良。162は須恵器小片で天地不明。脚もしくは瓶頸口縁か。外面黑色、内面灰青色。胎土精良で黒色粒を含み、焼成良好。

163は土師器小皿で、摩滅するが底部ヘラ切りか。淡橙褐色で、胎土精良、焼成良好。復元口径9.6cm。164は瓦器小皿で、調整痕は残らない。外面黒色、内面淡灰色をなす。胎土精良で焼成良好である。

165は半瓦片である。凹面に竹状の模骨と布目の圧痕を残し、ヘラ削りを加える。凸面はヘラ削り→平行タタキ→一部ナデの順に荒く調整する。側面は面取りする。胎土に径5mm粗砂粒を僅かに、径2mm以下の細砂粒を少量含み、素地土に練り混ぜた白色土が帶状に入る。ぶい橙褐色を呈し、焼成良好である。表土から出土した。

石器・石製品 Fig.23

各遺構等から出土した石器・石製品をまとめた。166は方柱状の砥石の一部で、主に片方の平坦面を砥石として用いており、角は面取されている。裏面にも軽微な研磨痕がある。井戸SE-016上層か

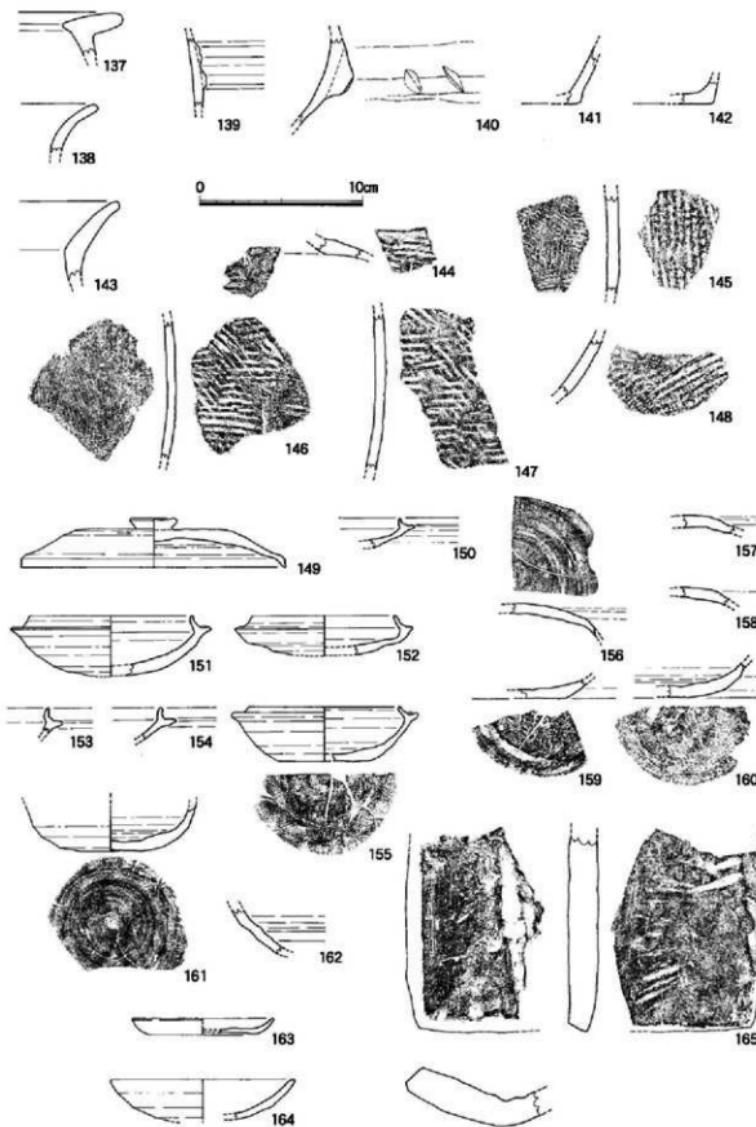


Fig.22 その他の出土土器実測図 (1/3)

ら出土した。167は大型の砥石の一部分で、一面が研磨により浅く窪む。硬質砂岩製。SD-011北東隅3層の壺形土器周辺より出土した。168は細い板状の小型砥石である。片面のみ使用しており、上下は折れて失われている。SD-011東4層出土。169は四石で表裏両面に凹みがある。SD-001の1層出土。170は打製石鏃で、方脚を僅かに欠く。基部の抉りは浅い。安山岩製。SD-011東4層出土。171は滑石製の白玉である。厚みが一様ではない。穿孔は下から行っている。径1.1cm。II区の遺構検出面から出土した。

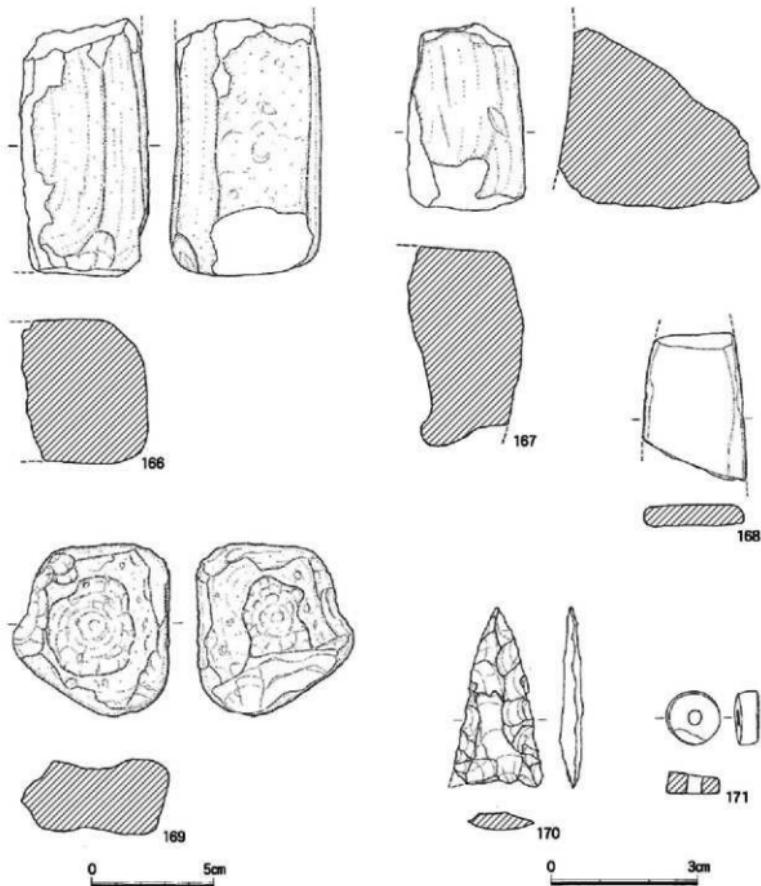


Fig. 23 石器・石製品実測図 (166~169は1/2、他は1/1)

6. 小結

検出した遺構を時期ごとに整理して第83次調査のまとめとする。①遺構は検出してないが、弥生時代中期中頃から後期初頭の丹塗り土器などが出土した。②古墳時代前期の方形周溝墓1基は、溝の内法で東西9.6m×南北10.7mを測る。その後の第84次調査により前方後方形に周溝が巡ることが判明した。遺物は主に溝の中層から出土したが、北東コーナー部で古式土師器壺形土器1個体が横倒しになった状態で出土し、造墓・祭祀時期の手がかりとなろう。溝の上層からは古墳時代後期の須恵器が出土することから、7世紀頃までは崖みとして周溝が残っていたものと考えられる。周溝墓の主体部は今回の調査対象範囲からはずれているが、第62次調査結果から削平消滅していると考えられる。他の古墳時代前期の遺構としては、遺物が出土していないが溝SD-017があり、第62次調査のSD-009に連続しよう。③古墳時代後期の遺構には溝SD-002・012、堅穴住居SC-015、土坑SK-003・005・007がある。出土遺物に乏しいが、SK-005は7世紀前半頃の遺構と考えられ、この時期に周溝墓周辺に新たな開拓の手が入ったことを示している。④古代の遺構には井戸SE-016がある。10世紀を前後する土器が出土し時期幅があるが、最も新しい土器である白磁の時期（11世紀前半）で押させておきたい。その他、⑤近現代の遺構として防空壕と思われるSX-004がある。那珂台地ではローム台地の斜面に掘った防空壕とみられる遺構をこれまでにも多数確認している。

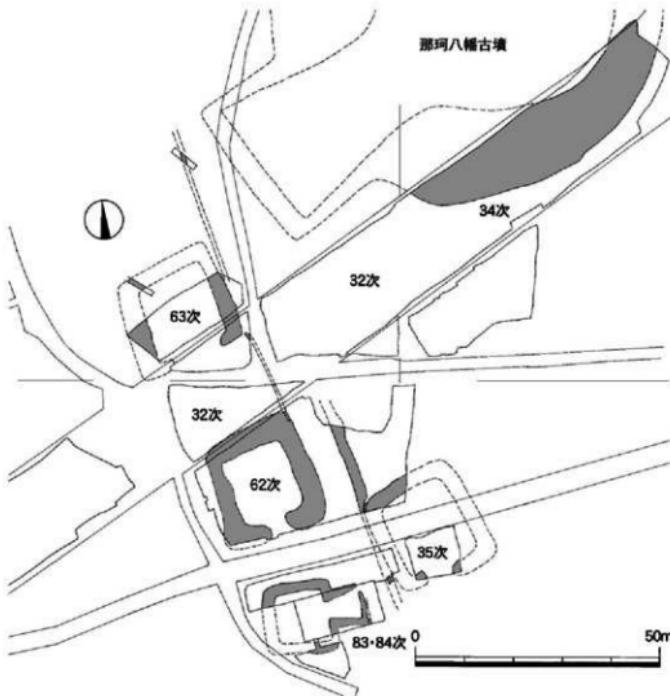


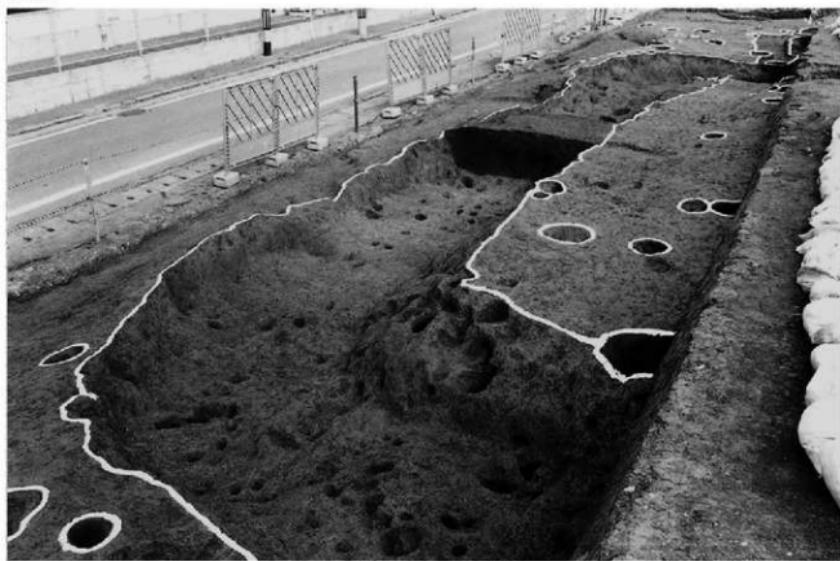
Fig.24 周辺の古墳時代前期の遺構 (1/1,000)



1. 調査区全景（西から）



2. 周溝 SD-001（南東から）



1. 周溝 SD-011（南西から）



2. 周溝 SD-011（東から）



1. 周溝 SD-001 (西から)



2. 周溝 SD-001 土層 (南西から)



3. 周溝 SD-011 西端土層 (北から)



4. 周溝 SD-001 中央土層 (東から)



5. 周溝 SD-011 東端土層 (北から)



6. 西側道路切り通し周溝土層 (南から)



1. SD-011 北東隅遺物出土状況（北東から）



2. SD-011 北東隅遺物出土状況（南西から）



3. SD-011 北東隅遺物出土状況（南から）



4. 前方部周溝 SD-013（北東から）



5. 溝状遺構 SD-002（南から）



6. 溝状遺構 SD-012（東から）



1. 穴住居 SC-015 (西から)



2. 土坑 SK-005・006 (北から)



3. 土坑 SK-007 (南東から)



4. 井戸 SE-016・溝SD-017 検出状況(北から)



5. 井戸 SE-016・溝SD-017 (北東から)



6. 井戸 SE-016・溝SD-017 (北から)



1. 防空壕 SX-004 (西から)



2. 調査作業風景 (北東から)



3. 第83次調査出土遺物 (縮尺不同)

II. 第84次調査の記録

1. 調査に至る経緯と調査の経過

那珂道跡群第84次調査（以下、「84次調査」）は、83次調査に統いて同一敷地内にて行われた補足的な確認調査である。2002年1月10日に83次調査の終了後、調査地では、調査原因であった共同住宅建設に伴う駐車場造成工事などが行われた。83次調査では、敷地中央の共同住宅建設部分については、現状からは掘削せずに盛土の上に基礎工事を行うことで造構検出面以下には影響が及ばないという設計が提出されており、工事着工を認めていた。しかしながら造構面は表土直下であり、なお工事の影響が及ぶ懸念があり、工事立会の実施を着工の条件としていた。そのため、基礎工事の着工日について施工業者のシノハラ建設システムから連絡があり、2002年5月10日に基礎工事の立会を行った。立会の結果、基礎工事の際の最初の工程として地表面を若干ながら削平して整地する作業を行っており（Ph.1）、整地作業は造構面であるローム地山上面を露出させ、また一部を削っていることが判明した。造構への影響が明白であったので、まず基礎工事の一時中止を要請した。また露出した造構面を精査した結果、83次調査で検出された方形周溝墓の周溝が屈曲し、前方後方形状となることも判明した。この重要な発見により、造構の保全だけでなく造構の表面確認作業をする必要があると埋蔵文化財課として判断した。これを受け、工事原因者側の施工業者と現地協議を行い、工事の一定期間の休止、造構面の保全のための盛土を含む基礎工事設計の変更、確認調査の実施について了承と同意を得た。確認調査は5月14日までの期間とした。確認調査は立会時の精査から統いて行ったが、露出した造構面の精査と造構分布の確認の実施を基本とし、保存前提の調査であり、掘削はトレチ調査のみとし、周溝墓など一部造構の断面を観察する程度にとどめた。きわめて早急に確認調査に移行したため、調査体制は十分に整えられず、埋蔵文化財課事前審査係の久住猛雄と田上勇一郎の2名が大部分の現地作業を行い、周囲近隣の発掘現場から僅かながら作業の応援を得た。

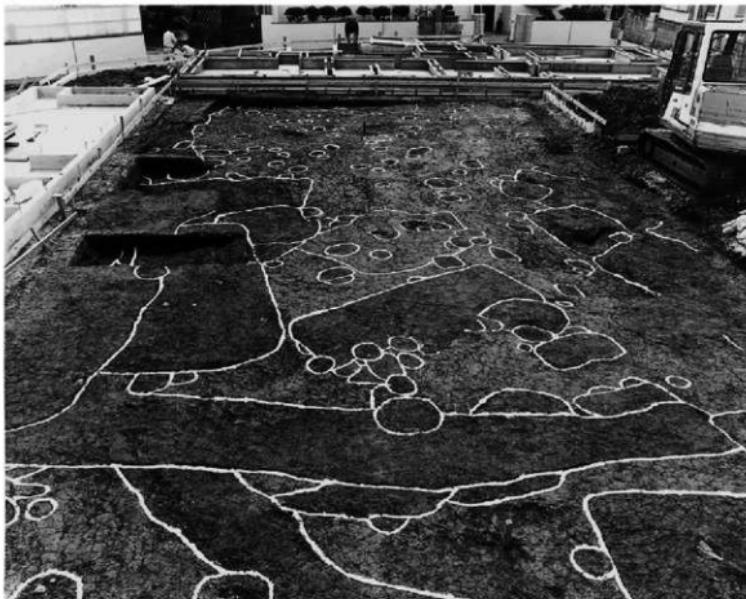
本調査は83次の補足調査であり調査中は「83次」の一部としたが、若干の中斷期間があり年度も替わっていることから別の調査次数を付すこととした。しかしながら、同一敷地の連続的な調査であり、工事原因や調査原因者（委託者）、その施工業者は同一であり、



Ph.1 工事立会状況



Ph.2 調査状況全景（南東から）



Plt.3 調査区全景（東から）

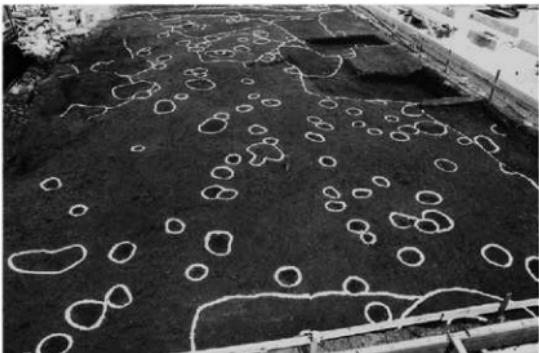
また83次報告のためには84次調査の成果を参照して遺構の評価をする必然性があることから、本書に報告を掲載することになった次第である。

なお確認調査終了後は表面を埋戻し、さらに若干の盛土をして基礎工事を行うように指導し、工事立会を行ってこれを確認している。

2. 検出した遺構

(83次Fig.3・4)

確認調査とした84次の調査面積は 150.25m^2 である。さらに周溝墓にA～Eのトレンチを設定して掘削し、また一部の遺構や包含層をトレンチで部分的に掘削した(83次Fig.3)。遺構は調査の経緯のように、地表面下-10cm以内前後で検出した。検出面レベルは8.5～8.7m前後である。検出遺構は、古墳時代前期前半の前方後方形周溝墓(後方部の大半は83次調査区)、弥生時代後期～古墳時代初頭



Plt.4 調査区全景（西から）

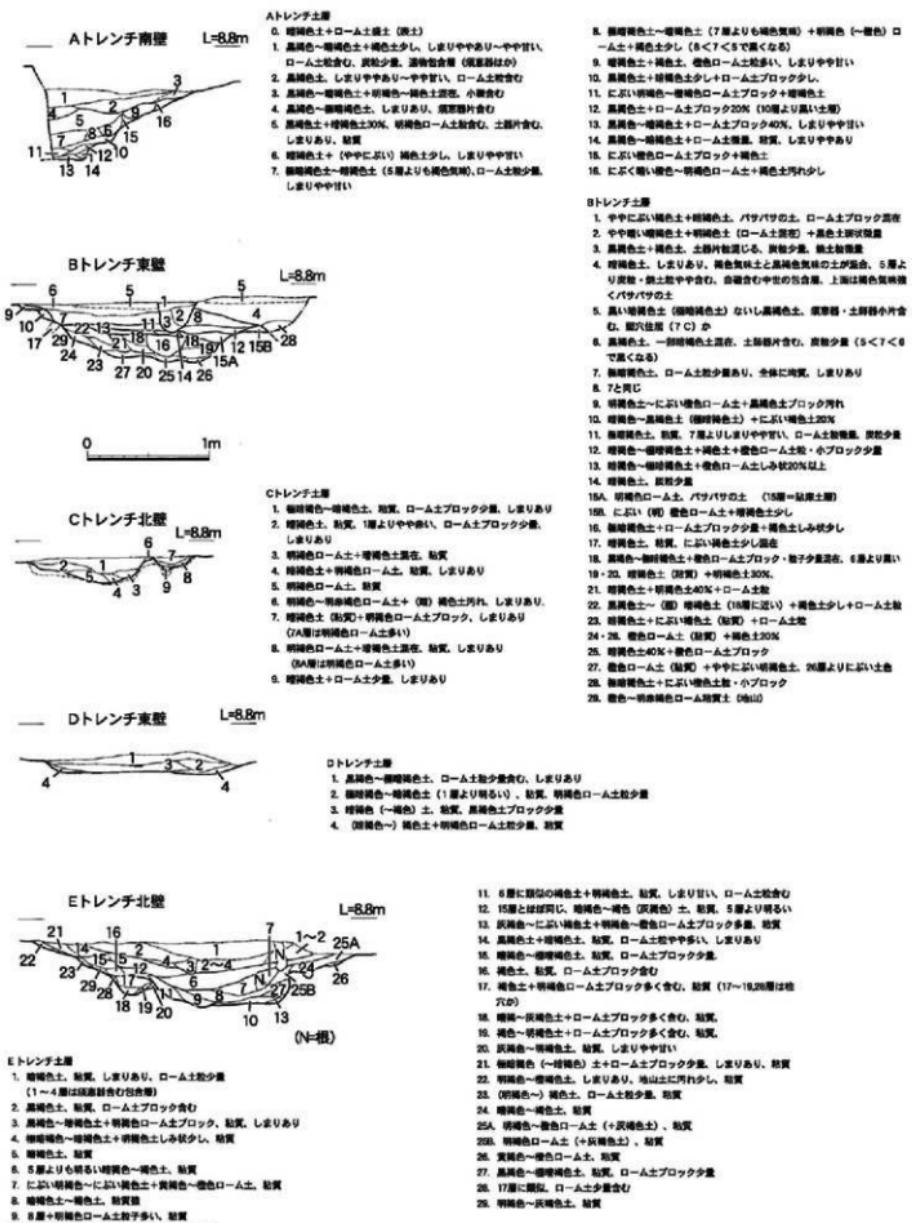


Fig.25 トレーンチ土層断面図（1/40）

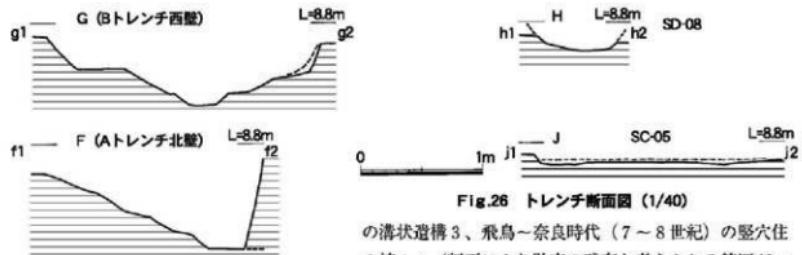


Fig. 26 トレンチ断面図 (1/40)

の溝状造構 3、飛鳥～奈良時代（7～8世紀）の竪穴住
3棟+α（削平により貼床の残存と考えられる範囲がい

くつかある）、弥生時代・古代～中世の土坑・柱穴、古代～中世の包含層などである。遺構は一部を除き平面検出のみであり、その時期推定は表面の遺物や覆土の色・質による推測であるため、多少の異動がありうる。

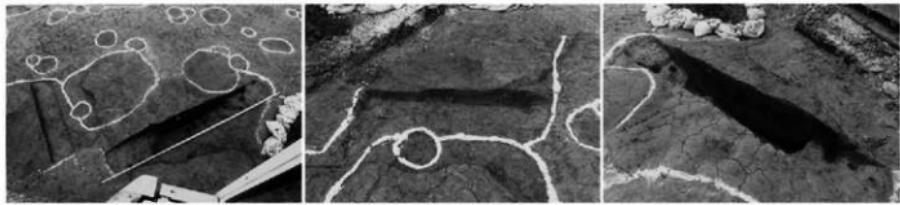
前方後方形周溝墓（SX00）は、83次検出の方形周溝が東側に屈曲し前方部となるものである（83次Fig.4）。北側くびれ部をSD12、前方部北側周溝をSD11、南側くびれ部をSD10、前方部東側周溝をSD09とした。SD09とSD11は繋がらず、前方部北隅角は隆起状となる。後世の造構の重複や包含層が覆っている部分（南側の厚い包含層をSX01とした）があり不明確な部分があるが、前方部側縁線は北側ではバチ形気味に広がっている。前方部中央の地山上面は僅かに高く（周溝側縁線の検出上端より5～10cm高い）、本来の墳丘の高まりを反映している可能性がある。各トレンチ（A～E）の状況から（断面図Fig.25・26、Ph.5～10）、両くびれ部（A・Eトレンチ）は比較的深く掘削されるが（83次の後方部周溝に続く）、前方部側縁（Dトレンチ）・前端部（Cトレンチ）はかなり浅い周溝である。著しい削平（竪穴住床面が残る程度）を考慮しても浅い。ただし前方部南側（Bトレンチ）はAトレンチ（南側くびれ部）よりはやや浅くなるが、北側（D）に比較するとしっかりと深く掘削している。浅い部分も含めて周溝の断面形はおよそ逆台形としてよいだろう。なお周溝の上半層には7世紀以後の遺物があり、これ以降に急速に埋没したと考えられる。



Ph.5 Aトレンチ(南東から、上が南西)

Ph.6 Bトレンチ(西から)

Ph.7 Cトレンチ(南から)



Ph.8 Dトレンチ(左)、Eトレンチ(右)(北から)

Ph.9 Dトレンチ(西から)

Ph.10 Eトレンチ(東から)

周溝からの遺物は比較的少ないが、上半層に7世紀以降（IV期以降）の須恵器・土師器が出土している（Fig.27-1,3,5~8）。底部穿孔のある小型長頸壺とみられる土器片（Fig.27-4）や二重口縁壺の胴部片と推定できる破片があるが、時期的に周溝墓に伴うのはごく僅かである。

溝状遺構としてSD06、SD07、SD08がある。SD06はSD09（周溝前端）に切られる小溝で（Fig.25-Cトレンチ、Ph.7）、62次（北側）や114次（南側）で検出されている古墳時代初頭前後の「道路」の西側側溝の一部である可能性が高い。前平によりきわめて浅い残存である。SD07も同様に「道路」西側側溝の延長の小溝である。両溝が断続的であるのは、溝の深かった部分のみが残存したものと考える。SD06とSD07から、83次北側調査区のSD-017と合わせ、本対象地でも古墳時代初頭前後の「道路」が存在したことが判明した。また周溝墓との切合から、「道路」が先行して存在し、周溝墓の造営位置を規制したことか推定される。SD08は4m長、幅80cmの蛇行する溝でSD09とSC04に切られる。弥生時代の可能性が高いが、検出時上面には須恵器片もあったのでSD09との関係は今後検討をする。

堅穴住居ないしその痕跡として、SC02、SC04、SC05、SX20、SX23がある。SC02はSD10（周溝）を切り、SK03に切られる東西3.8mの方形住居。暗褐色覆土で、須恵器片から7世紀代だろう。上面に7世紀末~8世紀初頭の遺物があるが（Fig.27-12,13）、これ以前か。SC04は正方位に近い一辺2.5m以上の方形住居で、上面で土製カマド片を検出した（Fig.27-14）。他よりやや明るい褐色土氣味の覆土で、8世紀代か。SC05は検出時点ですでに貼床直上で（Fig.26-J）、東半分はそれもほとんど削平されている。IV期か。SX20、SX23は堅穴住居の貼床が辛うじて残っているものであろう。

土坑としてSK03、SK05、SK21、SK22がある。円形のSK03、SK05、SK22は井戸かもしれない。他にも小土坑があるが詳細は不明である。また柱穴は多数あるが、建物ないし欄列が推定できる部分がある。覆土などから、SB01、SB02、SB04は飛鳥時代（IV~VI期）あるいは奈良時代前半期の可能性があり、SB03、SA01、SA02は中世の可能性を考えられる。

3. 出土遺物 (Fig.27)

84次調査は遺構検出作業と部分的なトレンチ掘削にとどめたため、出土遺物は少なく、パンケース2箱程度の量である。弥生土器、古式土師器、飛鳥~奈良時代の土師器と須恵器、古代末以降の土師器・輸入陶磁器がある。なお、期待された周溝墓に伴う古式土師器の出土は少量であった。

1~14（Fig.27）は小片が多く、径の復元はいずれも反転推定である。1・2はAトレンチ上層（包含層SX01）出土。1は、軟質焼成（土師質）だがロクロとタタキ（内面当具痕）を用いる「赤燒土器」の甕。2は弥生時代中期後半の甕である。他に中期末~後期初頭の瓢形壺（丹塗）の破片もある。当該期の遺構も存在するか。3~8はEトレンチ上層出土。3は須恵器の壺Gの身。外底にヘラ記号。体部が深く、IV期新相か。4は古式土師器。底部に焼成前穿孔があり、周溝墓に伴うか。小片のため径の復元と傾きに難があるが、図から考えられる器形は比較的小型の長頸壺か。二重口縁壺の体部としてはバランスが悪い。5は須恵器の壺Bの蓋であるが、天井部はカキメ状であり高壺の蓋かもしれない。VI期（7世紀4/4期）。6は須恵器の壺Hの蓋。IV期新相か。7は須恵器の壺Hの身。ヘラ記号あり。8は須恵器の甕。外面は木目直交の握格子タタキ後、ほぼ全面にカキメを施す。内面は同心円文当具痕。9~11は包含層SX01出土。9は須恵器に類似する口縁部形態の「赤燒土器」の甕。ロクロ使用か。10・11は白磁碗V類ないしVI類で同一個体の可能性もある。12・13はSC02（Bトレンチ上層含む）出土（8bもSC02出土）。12は須恵器のVII期の杯蓋の形態だが、焼成は軟質で土師器である。8世紀初頭か。13は須恵器だが、天地は不明確。図の通りならVI期前後の台付長頸壺だが、平瓶かもしれない。外面はタタキ後に全面カキメ、上半は回転ナデ仕上げ。内面は回転ナデ・ナデだが凹

凸が顯著。14はSC04上面出土。土師器のカマド（移動式窯）の焚口部の推定右半部。鉢部の上面は一部ハケメ後ナデ、下面はナデ。内面はヘラケズリ。鉢部の突出が顯著。7世紀末～8世紀初頭の形態か。

4. 小結

84次調査により、83次調査の周溝墓は前方後方形であったこと、またその規模と形態が判明した。これらについては83次調査の成果とあわせた「Ⅲ」で触れる。また、周溝墓以外にも多くの遺構を確認した。遺構分布から、7世紀初頭頃までには前方部が破壊され、次いで7世紀末（VI期）頃までには「道路」域にも遺構が進出する。一方、後方部は遺構が比較的少なく、中世のある時点に削平されるまでは墳丘の名残が存在したと推定されよう。

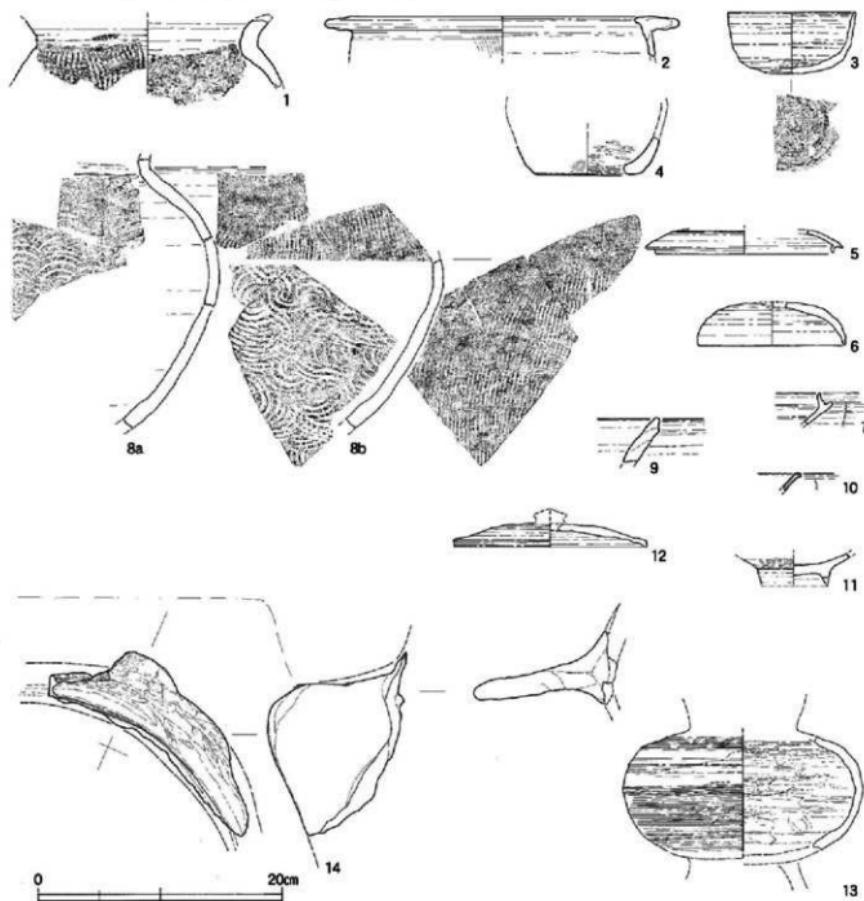


Fig.27 出土遺物実測図 (1/4)

III. 第83・84次調査の「前方後方形周溝墓」について

83次SD-017と84次SD-06・07は、那珂遺跡群各所で検出されている弥生時代終末期から古墳時代前期の道路遺構（久住猛雄1999b）の延長部分の両側側溝と考えられる。83・84次調査地点での両溝間の幅は6mであり、削平度を考慮した推定道路幅は5m前後であろう。84次SD-06・07は前方後方墳の前縁部周溝に切られている。ただし周溝の位置は、道路の空闊地を残す形となる。那珂9次、62次、114次の各調査地点と同様に、道路が先行して存在し、周溝墓（古墳）の位置を規制したこと、古墳築造後も「道路」が古墳群内に墓道のように残されることがここでも明らかになった。

83次に統く84次の確認調査により、周溝墓（古墳）の規模が明らかになった。後方部西側周溝は未調査であるが、83次北側調査区からその位置がおよそ推定できる（Fig.4）。周溝の下端を基準とした場合の計測値は以下の通りである。墳丘長（東西主軸）18.75m、後方部南北長11.7m、後方部東西長11.7～12.0m、前方部長6.7～7.0m、前方部前端幅7.5m（推定）、くびれ部幅5.2mとなる。

後方部を11.7m長とした場合、前方部長は7.05mであるが、後方部を8とすると前方部はおよそ5（正確には4.82）となる。これは那珂八幡古墳（全長約84～85m）の後円部：前方部比率がおよそ8：5であることによく近い（久住猛雄2002）。しかしながら那珂八幡古墳の全長と本調査区の前方後方墳の全長との間には有意な関係が見いだせない。ところが、114次調査1号墳（前方後方墳）がおよそ28m長であり、これは那珂八幡の1/3長である。114次1号墳は前方部前端部が不明確だが、これも8：5に近い比率になる可能性が高い。さらに、114次1号墳の約28mを基準とした場合、83・84次の前方後方墳の墳丘長はそのほぼ2/3となる。したがって墳丘長の企画論からは、那珂八幡古墳→114次1号墳→83・84次前方後方墳の順で築造されたと推定される。なお那珂八幡古墳はⅠB期新相（久住猛雄1999a・2006）、本調査前方後方墳はおそらくⅡA期新相ないしⅡB期古相（久住1999a参照）である。114次1号墳の位置づけが課題だが、墳端の把握や時期認定は今後の検討に委ねたい。

ここで前方後方墳の時期について、周溝出土土器から検討したい。84次では良好な資料の出土がないので83次の資料を検討する（Fig.7～11）。周溝には弥生時代中・後期の土器片が含まれ、周溝上層には古墳時代後期から飛鳥・奈良時代の土器が多く出土するが、これらは古墳の時期を示さない。検討対象は弥生時代終末期（庄内式併行）から古墳時代前期の土器である（土器編年と系統・器種分類は久住1999aによる）。SD-001出土土器（Fig.7）では、4・7が該期である。4は在地系複合口縁壺の頭部以下である。径は未復元であるが比較的太い頭部になるもので、ⅠA期（終末期古相）以降の型式だが、比恵・那珂遺跡群ではⅡA期に下る複合口縁壺はごく僅かであり、ⅠA～ⅠB期か。7は畿内系（C系統）の精製二重口縁壺である。頭部が短くやや太いもので、かつ外反する一次口縁部の先端が僅かに垂下気味となる型式はⅡB～ⅡC期に多く、ⅡA期には無い。比恵9次15号井戸（ⅡB期）、那珂9次SX004周溝墓（ⅡC期）、筑紫野市岬山1号墳（ⅡB期）に類似がある。古墳の供獻土器だろう。SD-011出土土器では（Fig.8～10）、67（Fig.9）の山陰系大型壺がある。口縁部形態や文様の有無ないし文様パターンの若干の相違があるものの、全体の形状や法量は西新町2次D区1号住居（福岡市第79集Fig.99）や、西新町12次105号住居（福岡県第154集第216図11）の大型壺に類似する。いずれもⅡB期である。66（Fig.8）の山陰系二重口縁壺は、頭部の長さと径や口縁部があまり発達しない点などからⅡA～ⅡB期である。64の布留式系甕は、口縁部や頭部のしまり具合、頭部内面ケズリのあり方を総合的にみてⅡB期か。65は、図ではさらに二次口縁が続くように描かれるが、跳ね上げた口縁部で終わると観察する。B系統の広口壺であろうが、細かい時期限定は難しい。68（Fig.10）は、底部周囲に外面ケズリを施す在地系甕（甕？）で、丸底と推定されⅡA期に下る。

古墳に伴う器種かは疑問もあるが、那珂62次SX028周溝墓には同様の在地系壺の土器棺がある。71・72は、突出する平底気味形態を残す畿内系（C系統）壺の凸状底部。72は内面に簾状ハケが残り、71よりも精良な胎土である。いずれも二重口縁壺だろう。底部形態は62次SX028周溝墓（II A期）の壺群と類似する。先進的土器様相の比恵・那珂や博多では（他の後進的土器様相の集落は別）、墳墓供獻二重口縁壺（C系統）の底部はII B期になると丸味の強い凸状底部や丸底が多くなる。71・72が墳墓供獻の二重口縁壺ならばII A期か、下ってもII B期古相であろう。73は一見類似するが、弥生後期後半の在地系壺の凸レンズ状底部の作りである。74～77は、弥生（後期後半～）終末の在地系器台であるが墳墓供獻土器ではないだろう。SD-013の91（Fig.11）の高坏は、水滴胎土の精製高坏（C系統）で、II A期である。以上、精製高坏や二重口縁壺にII A期があり、II A期の幅内での焼造の可能性が高く、山陰系大型壺や一部の二重口縁壺はII B期で、祭祀や二次埋葬がこの時期までなされたと考えられる。

さて前方後方墳の前方部周溝は北東側隅角が途切れ、ここが陸橋であった可能性が高い。陸橋が推定される北側側縁部が「バチ形」形状であることは、「道」としての前方部の機能を考えると興味深い（近藤義郎2000「前方後円墳観察への招待」青木書店）。また83次北側調査区の周溝東側（くびれ部の北側）に大型壺が発見されているが、祭祀の実践の出入口がこの陸橋であることと調和的である。

84次のトレンチ調査により、前方後方形周溝は後方部側がくびれ部付近まで深く、前方部は後円部周溝に比べて明確に浅くなることが判明した。特に前方部でも北側縁部と東側前部の周溝は極端に浅い（前方部南側縁部周溝はやや深い）。このような後方部と前方部の周溝の掘削深度の差異は、114次1号墳（前方後方墳）と類似する。また、比恵36次の方形周溝墓が比恵55次北西隅のL字状溝（前方部隅角か）と繋がって前方後方墳となるという推定（久住猛雄2002・2006）が正しいとすれば、55次の推定前方部周溝部分はきわめて浅く、同じ様相である。

84次調査においては、主体部の痕跡は検出できなかった。削平されていると考えられる。SX-23は後方部中央に近いがややすれており、未掘削であるものの、覆土の様相などから堅穴住居の貼床の残存と考えられ、主体部の痕跡ではない。那珂遺跡群では周溝墓と推定される方形・円形の周溝が多く検出されているが、いずれも主体部は検出されていない。周溝出土土器に壺類（二重口縁壺が多い）や精製器種、特に墳墓に供獻される底部穿孔壺がしばしば含まれることから、これらが墳墓である蓋然性は高い。62次SX028周溝墓（福岡市埋蔵文化財調査報告書第597集）では副次埋葬として周溝に土器棺墓もあり、やはりこれらの「周溝」は墳墓であろう。中央に主体部が検出されないのは、いずれも周溝内側の盛土が顕著であり、盛土中に主体部が構築（ないし掘削）される形態であったものが、全て削平されてしまったためではないかと考えられる。その想定が正しければ、主体部の垂直の位置からすれば「周溝墓」というよりも「古墳」とした方がより実感的だろう。那珂八幡古墳を造営の端緒とする、古墳時代初頭から前期が主体となる「那珂古墳群」として把握すべきである。

（文献）

- 久住猛雄 1999a「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIX, pp.62-143
久住猛雄 1999b「弥生時代終末期「道路」の検出」『九州考古学』第74号, pp.18-53
久住猛雄 2000「奴国遺跡—須玖・岡本遺跡群と比恵・那珂遺跡群—」『考古學から見た弁辰韓と倭』, 九州考古学会・嶺南考古学会第4回合同考古学大会, pp.143-167
久住猛雄 2002「九州における前期古墳の成立」『日本考古学協会2002年度櫻原大会研究発表資料集』, 日本考古学協会櫻原大会実行委員会, pp.295-310
久住猛雄 2006「土師器から見た前期古墳の掘年」『前期古墳の再検討』第9回九州前方後円墳研究会大分大会 発表要旨・資料集, pp.448-505

第四章 那珂遺跡群第98次調査の記録

調査名	那珂遺跡群第98次調査		遺跡調査番号	0421	
遺跡略号	NAK-98	調査地地籍	博多区那珂6-67	分布地図番号	0085
開発面積	250m ²	調査対象面積	93m ²	調査面積	65m ²
調査期間	2004年(平成16年) 5月10日～6月11日				

例　言

1. 本書に使用した遺構実測は藤野雅基、荒牧、遺物実測・製図は濱石正子、相原聰子、荒牧が行った。
2. 本書に使用した座標、方位は旧日本測地系（第II系）による。方位は真北より $0^{\circ}19'$ 西過する。

本文目次

I はじめに	
1. 調査に至る経過	83
2. 調査の経過	83
3. 調査体制	83
II 位置と環境	
1. 地形	85
2. 歴史的環境	85
III 調査の記録	
1. 調査の概要	85
2. 基本層序	86
3. 遺構と遺物	86
IV おわりに	92

挿図・図版目次

Fig. 1 調査地点位置図 (1/8,000, 1/1,000)	83
Fig. 2 調査範囲図 (1/200)	84
Fig. 3 遺構配置図 (1/100)	84
Fig. 4 調査区北壁・南壁土層図 (1/50)	86
Fig. 5 SC03、26実測図 (1/60)	87
Fig. 6 SC03カマド焚口、SC26内焼土塙SX36土層断面図 (1/40)	90
Fig. 7 SC03、26出土遺物実測図 (1/4)	90
Fig. 8 SD02、06断面実測図 (1/40)	92
Fig. 9 SD02出土遺物実測図 (1/4)	92
Ph. 1 調査地点全景 (南から)	84
Ph. 2 調査区南半 (北から)	85
Ph. 3 調査区北半 (南から)	85
Ph. 4 SC03検出状況 (北から)	88
Ph. 5 SC03貼床土除去後 (北から)	88
Ph. 6 SC03カマド検出 (西から)	88
Ph. 7 SC03カマド焚口土層 (南から)	88
Ph. 8 SC26検出状況 (北から)	88
Ph. 9 SX36完掘状況 (西から)	88
Ph. 10 SD02土層断面 (西から)	89
Ph. 11 SX05完掘状況 (北西から)	89
Ph. 12 SD02全景、調査区南壁土層 (北から)	91
Ph. 13 SD02全景 (西から)	91

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成16年4月1日、内野 進氏より福岡市博多区那珂6-67地内における共同住宅建設設計画に伴い「埋蔵文化財の有無について(照会)」の文書が埋蔵文化財課に提出された。これを受け当課では書類審査を行い、杭打ち工事が計画されていること等から確認調査(試掘)が必要とした。

確認調査では当該地に遺構が密度高く残ることが判り、発掘調査が必要と判断した。この結論のもと、施主の内野 進氏、大和工商リースと期間や費用について協議を重ね、費用について基準により国庫補助金を適用して平成16年5月10日より調査を開始することになった。

2. 調査の経過

敷地面積250m²に対し、調査対象地は南側の建物建築予定地の93m²に限られた。

遺構面までは約80cmと深く、廃土置き場を確保する必要から調査対象地を南北に2分割し、調査区と廃土置き場を反転しながら調査を進めた。

調査は平成16年6月11日に終了し、最終的な調査面積は65m²となった。

3. 調査体制

調査・整理作業は以下の体制で臨んだ。

【調査主体】福岡市教育委員会【調査総括】埋蔵文化財課長 山口譲治 調査第2係長 池崎譲二(前任)【庶務】文化財整備課 鈴木由喜 【試掘調査・協議】事前審査係長 濱石哲也 係員 久住猛雄【調査担当】荒牧宏行 【調査作業員】内山和子 藤野雅基 小野千佳 高手與志子 兼田ミヤ子 豊丸秀仁 渋谷留雄 濱フミ子 知花繁代 沖政芳 松若俊美【資料整理】濱石正子 松下伊都子 大石菜美子 相原聰子

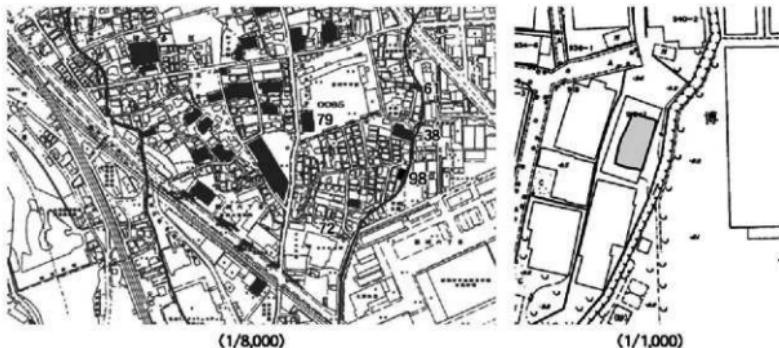
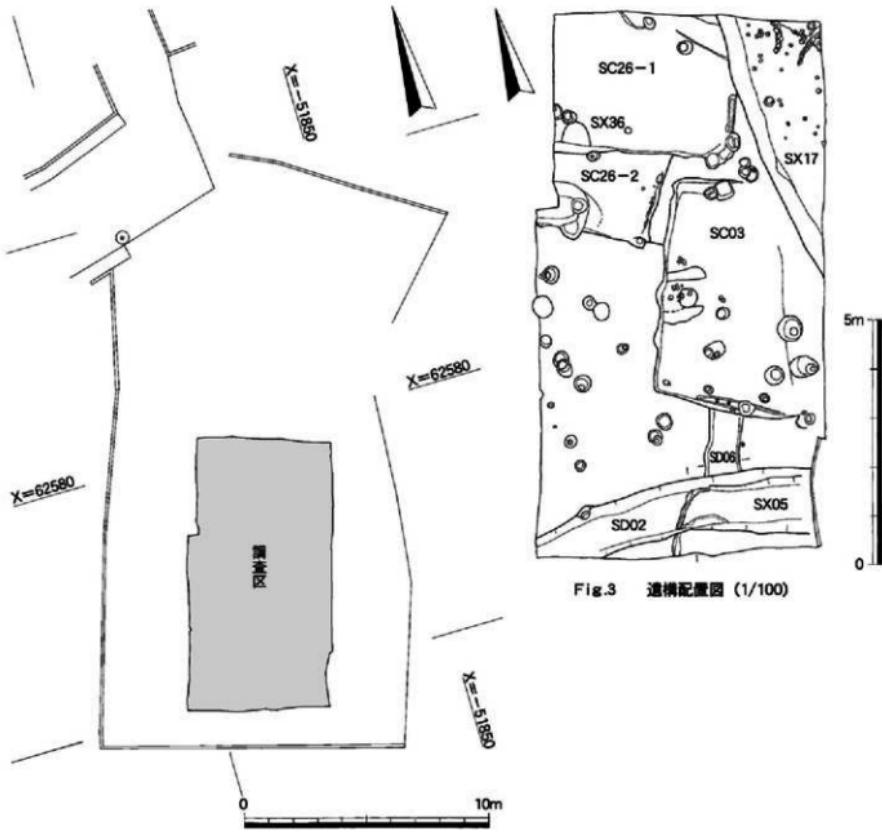


Fig.1 調査地点位置図





Ph.2 調査区南半 (北から)



Ph.3 調査区北半 (南から)

後期の集落は本調査地点を含めた38次調査区より南側に展開し、72次調査まで拡大している。

II 位置と環境

1. 地形

那珂遺跡群の南東端に位置する。那珂遺跡群は洪積台地からなり、中位段丘面の形状を呈す。調査地点付近はこの段丘面縁辺の形状を残し、現況の標高9.4mから水路を境にした沖積地の標高8.1mまで崖状に落ちている。

2. 歴史的環境

(周辺の既往の調査から)

本調査地点の北側に近接した38次調査では弥生中期の壇棺16基、古墳後期の竪穴住居跡4軒を検出した。(那珂14 第399集) その成果から壇棺は台地縁辺に立地しているが、本調査区までは延びない。また、群を異にする可能性があるが61次調査にみられるように北側の縁辺に広がっている。対して、集落は79次調査にみられるように台地中央部寄りに展開しているとみられる。また、古墳

III 調査の記録

1. 概要

那珂遺跡の台地縁辺に立地する。検出された遺構は古墳後期の竪穴住居跡4軒、中世の溝1条、近代以降と思われる段落ちなどである。周辺調査との関連はII-2で概述したとおりである。

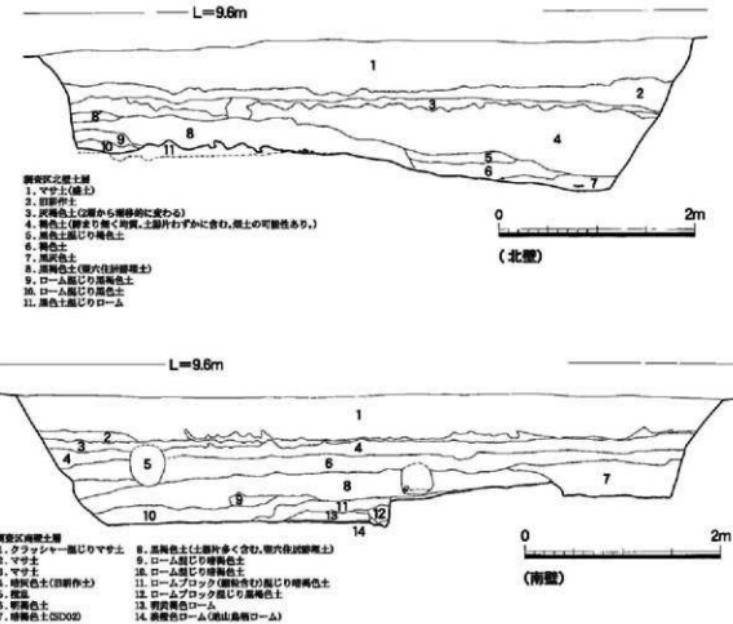


Fig. 4 調査区北壁・南壁土層図 (1/50)

2. 基本層序

現況はGL.9.3m前後を測る平坦地である。最上層に厚さ50cmのマサ土の整地層が覆う。その下層には灰褐色土の耕作土、縮まりがない畑耕作土の可能性がある明褐色土が堆積している。

明確に遺物を含む包含層ないし竪穴住居跡の埋土は標高8.5m前後からみられる。調査区内で地山の鳥栖ロームが最も高い位置で検出されるレベルもほぼ同じである。地山は東側へ緩やかに下降していくが、調査区北東隅には段落ちがみられる。

3. 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡 (SC)

検出できた竪穴住居跡は4軒であるが、残りは悪く、他に消滅した住居跡も多いものと考えられる。

SC03

調査区中央の東辺寄りで検出された。中央にカマドを設置した西辺の長さ4.5mが確認できたが、東側にかけては削平され規模は不明である。西辺の壁高は15cm、壁溝が南北両辺に沿って検出できた。

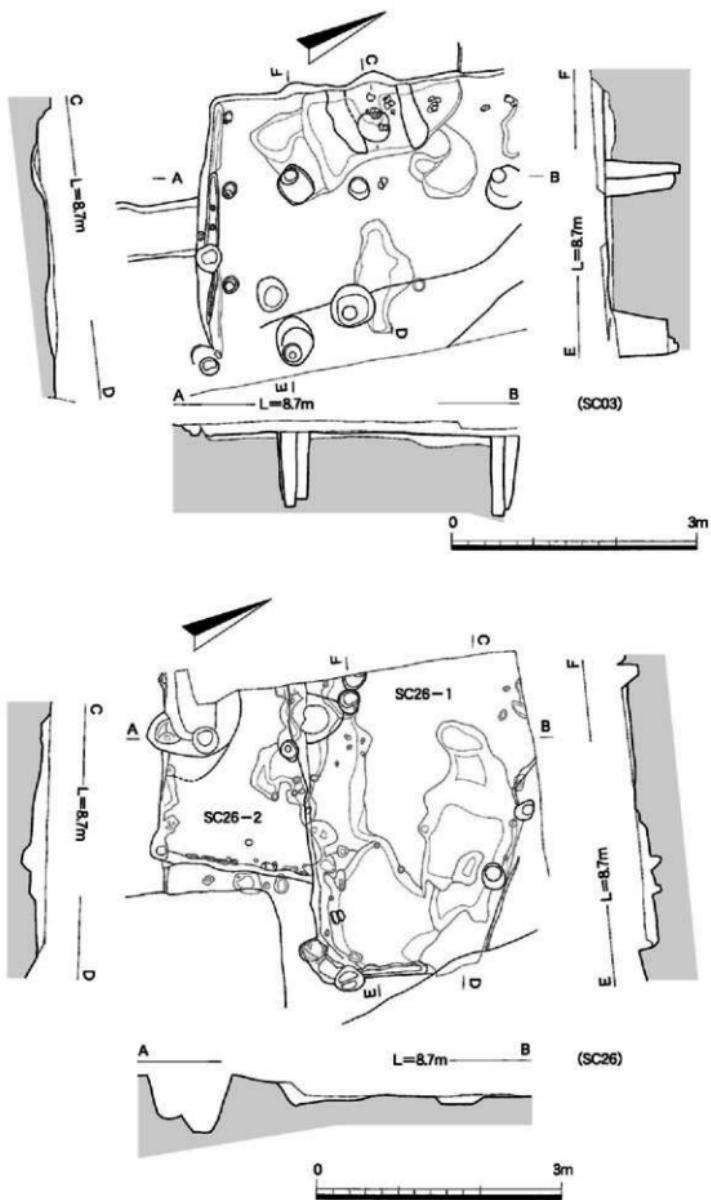


Fig.5 SC03、26実測図 (1/60)



Ph.4 SC03検出状況（北から）



Ph.5 SC03貼床土除去後（北から）



Ph.6 SC03カマド検出（西から）



Ph.7 SC03カマド焚口土層（南から）



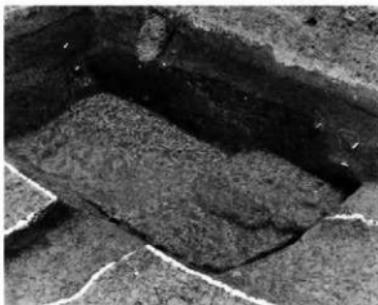
Ph.8 SC26検出状況（北から）



Ph.9 SX36発掘状況（西から）



Ph.10 SD02土層断面（西から）



Ph.11 SX05先掘状況（北西から）

主柱穴は4本と考えられ、検出された3本の柱間は2.5、2.2mである。南辺中央に小穴が2箇所、対になって検出され、入り口施設に付随したものと考えられる。

西辺中央で検出されたカマドは残りが悪く、袖部の基底と焚口のみが検出された。袖部の基底部は炭を含む灰白色粘土ブロック混じりの黒褐色土からなり、補修や破壊を受けている。焚口の焼土は径40cmの略円形プランを呈し、深さ15cm程度である。焼土面の中央上部に支脚に使用されたと思われる立方体の花崗岩が1点出土した。カマド付近は下部に不整形の掘り込みがみられ、帖床を施している。

出土遺物

1、2は須恵器、3、4は土師器である。1は体部中位に1条の沈線が施された杯である。3、4は器面が剥落し調整不明。5は粘板岩の砥石である。出土遺物の時期は下限が6世紀後半でおさえられる。

SC26

調査区北西部で検出された。プランから竪穴住居跡が2軒以上切り合っているものと考えられる。中央を東西に切っていく壁のラインが検出された。(SC26-1) その主軸方位より東に少し振れた方向に延長していく南辺を有した竪穴住居(SC26-2)は対応した北辺も検出され、その間隔は4.5mでSC03とはほぼ同規模となる。

中央で径40cm、深さ15cmの焼土壙が検出されたが、設置された竪穴住居を決めがたい。しかし、南辺際で検出された土壙と合わせSC26-2に付随している可能性がある。

出土遺物

6は滑石変成岩製と思われる石包丁である。7は目が細かい砂岩製の砥石である。4面の砥面を有し、刃物を研いだような条縫の刷痕がみられる。

SX05

調査区南際でSD02に切られた状態で検出された。調査区内で方形に折れる北西隅を検出し、竪穴住居跡の可能性がある。検出面からの深さは約40cmを測り、南西部に高さ20cm程度に地山のロームを貼り付けたベッド状の施設がみられた。

SX05と切り合った位置からSD02を延長した底面が深くなり、東端付近ではSX05の床面より掘り、

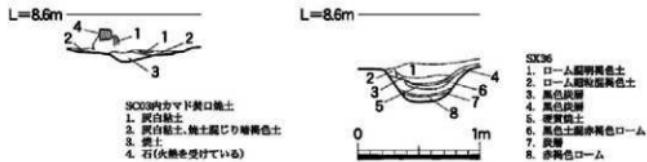


Fig. 6 SC03カマド焚口、SC26内焼土壌SX36土層断面 (1/40)

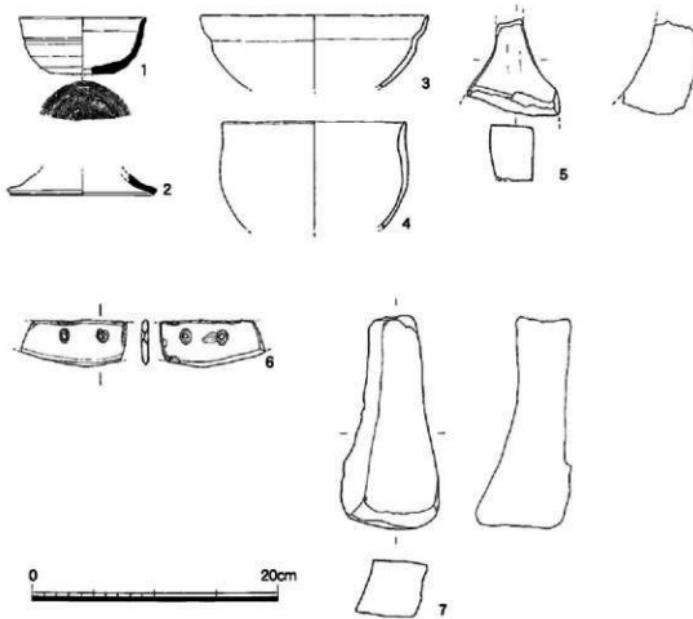


Fig. 7 SC03、26出土遺物実測図 (1/4)

下げられている。

SX17

調査区北東隅で検出された。西縁は湾曲して南北に延びる。当初、竪穴住居跡の可能性も考えSCと称したが、埋土や底面が東側へ下降している状況から他の用途が考えられる。埋土の上部は均質な繙まりがない明褐色土からなる。底面は東側へ傾斜しているが、平坦で杭状の小穴がみられる。用途として畠の造成による段落ちの可能性もある。



Ph.12 SD02全景、調査区南壁土層（北から）



Ph.13 SD02全景（西から）

SD02

調査区南界で検出された。幅1.1m、深さ30cmで湾曲しながら略東西方向へ延長していく。埋土は暗褐色を呈し、その底面からSX05が切られた状態で検出された。さらに調査区東界ではSX05床面より低いSD02の底面の掘り込みを検出し、急傾斜していたことがわかる。また東端では明褐色土のSX07が上部を切っている。

出土遺物

8は同安窯系青磁、9は土師器櫃の取手である。10は凸面に格子タタキ痕、凹面に布目を残す平瓦

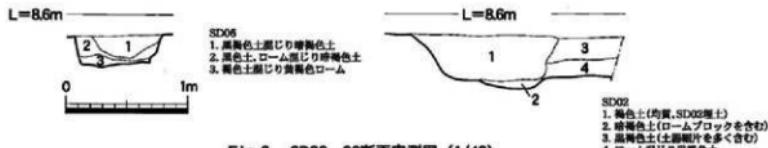


Fig. 8 SD02, 06断面実測図 (1/40)

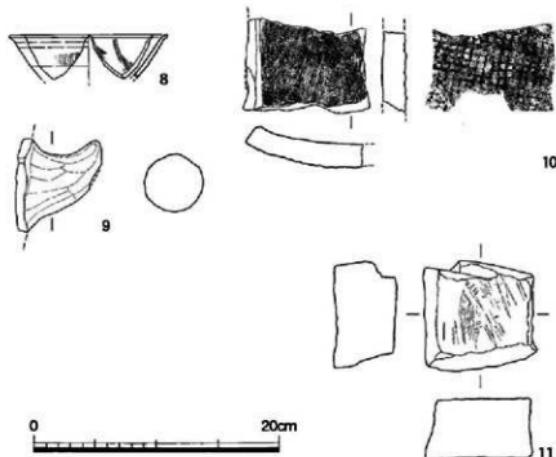


Fig. 9 SD02出土遺物実測図 (1/4)

である。11は砂岩製の砥石である。出土遺物からSD02の掘削時期は12世紀中～後半代とみられる。

SD06

調査区南側のSC03とSD02の間で検出された。幅70cm、深さ15cmを測る。南北の延長は不明。

IV おわりに

既往の調査成果との対比はII-2で概述し重複するが簡単にまとめておきたい。北側の38次調査で検出された本調査区までは展開されず、台地縁辺に立地した壇棺墓群の範囲がある程度みえてきた。

また、那珂遺跡の北側になるが4、31次調査で検出された壇棺墓群の例にみられるように共通する台地縁辺の立地には注意される。

本調査で検出された古墳後期の竪穴住居跡はこれまでの調査例からも急激に集落が拡大し台地縁辺まで展開してくることが知られる。今後、細かい単位が判明してくるであろう。

第五章 那珂遺跡群第110次調査の記録

遺跡名	那珂遺跡群第110次調査	遺跡調査番号	0550	遺跡略号	NAK-110
調査地地籍	博多区竹下5丁目515	分布地図番号	0085		
開発面積	893.01m ²	調査対象面積	243.65m ²	調査面積	257m ²
調査期間	2005年（平成17年）11月15日～12月20日				

例言

1. 本章に使用した遺構実測図の作製は吉武 学、坂口剛毅が行った。使用した方位は磁北である。
2. 本章に使用した遺物実測図の作製、図の製図は田中克子が行った。
3. 本章に使用した写真的撮影、本章の執筆は吉武が行った。

本文目次

1. 調査に至る経過	95	4. 調査の概要	98
2. 調査の組織	95	5. 検出遺構と出土遺物	99
3. 第110次調査地点の位置と周辺の調査例	95	6. 小結	132

挿図目次

Fig. 1 第110次調査区と近隣調査地 (1/2,000)	96	Fig. 18 SE-034出土土器実測図 I (1/3)	114
Fig. 2 第110次調査区の位置 (1/500)	97	Fig. 19 SE-034出土土器実測図 II (1/3)	115
Fig. 3 第110次調査遺構配置 (1/200)	98	Fig. 20 SE-034出土土器実測図 III (1/3)	117
Fig. 4 溝SD-002・003・006実測図 (1/40)	100	Fig. 21 SE-034出土土器実測図 IV (1/3)	118
Fig. 5 SD-002・003出土土器実測図 (1/3)	101	Fig. 22 井戸SE-035実測図 (1/40)	120
Fig. 6 溝SD-007 (014)・009実測図 (1/60)	103	Fig. 23 SE-035出土土器実測図 (1/3・1/6)	120
Fig. 7 SD-007・009出土土器実測図 (1/3)	103	Fig. 24 土坑実測図 (1/40)	122
Fig. 8 方形周溝墓SD-015実測図 (1/40)	104	Fig. 25 土坑出土土器実測図 (1/3)	123
Fig. 9 SX-010・SD-015出土土器実測図 (1/3)	104	Fig. 26 SX-004実測図 (1/40)	124
Fig. 10 SD-022出土土器実測図 (1/3)	106	Fig. 27 SX-024実測図 (1/40)	124
Fig. 11 溝SD-025・026実測図 (1/40)	107	Fig. 28 SX-024出土土器実測図 (1/3)	125
Fig. 12 SD-025・026出土土器実測図 (1/3)	108	Fig. 29 SX-001出土土器実測図 I (1/3)	127
Fig. 13 溝SD-030実測図 (1/40)	109	Fig. 30 SX-001出土土器実測図 II (1/3)	128
Fig. 14 SD-030出土土器実測図 (1/3)	110	Fig. 31 SX-001出土土器実測図 III (1/3)	129
Fig. 15 井戸SE-032実測図 (1/40)	111	Fig. 32 旧石器出土地点位置図 (1/100)	130
Fig. 16 SE-032出土土器実測図 (1/3)	112	Fig. 33 石器・鉄器実測図 (1/1, 1/3)	131
Fig. 17 井戸SE-034実測図 (1/40)	113	Fig. 34 周辺の溝状遺構との関係 (1/1,000)	132

図版目次 (133~138頁)

PL. 1 1. 調査区北辺東半 (西から)	2. 調査区北辺西半 (西から)
PL. 2 1. 調査区北辺西半 (東から)	2. 調査区西辺 (東から)
PL. 3 1. 溝SD-002土層 (北から)	2. 溝SD-003土層 (北から)
3. 溝SD-003 (北から)	4. 溝SD-009 (北西から)
5. 方形周溝墓SD-015・土坑SK-016 (北西から)	6. 方形周溝墓SD-015・土坑SK-016 (西から)
PL. 4 1. 溝SD-022 (東から)	2. 溝SD-025 (南から)
3. 溝SD-026 (北西から)	4. 溝SD-030 (北から)
5. 溝SD-030土層 (南東から)	6. 井戸SE-032 (北西から)
PL. 5 1. 井戸SE-034 (北から)	2. 井戸SE-034遺物出土状況 (北から)
3. 井戸SE-035 (北から)	4. 土坑SK-017 (西から)
5. 土坑SK-020 (北から)	6. 土坑SK-021 (北西から)
PL. 6 1. ローム層石器出土状況 (西から)	2. 調査作業風景 (南東から)
3. 第110次調査出土遺物 (縮尺不同)	

1. 調査に至る経過

福岡市博多区竹下5丁目515の倉庫跡地において、横山 悟氏ほか5名による共同住宅建設が計画され、平成17年6月16日付けで、福岡市教育委員会埋蔵文化財課（以下「埋文課」）に埋蔵文化財の事前審査申請があった。申請地は福岡市文化財分布地図では那珂遺跡群に含まれており、周辺では第9・26・33・41・44次調査など多数の調査を行っており、地下に遺跡の存在することが確実視された。埋文課では遺跡の保存状態を確認するために7月11日に確認調査を行い、申請地内に設けた2本のトレンチにより地表下60cmで遺物包含層を、75~85cmのローム層上において溝・土坑・柱穴などの遺構を検出し、遺跡が良好な状態で保存されていることを確認した。この結果を踏まえ施工側と協議を持ち、基本的には盛土を行って地下へ影響を与えないよう工事を行うことで全面調査となることは回避した。しかし建物前面の給排水設備やサービスヤード部分の工事など、敷地外周については掘り下げる部分が生じたため、やむなく申請地の一部に対して記録保存のための緊急発掘調査を行うこととなった。工事計画は、倉庫跡である敷地を6名の個人地主が分筆し、6棟の共同住宅を株式会社シノケンがそれぞれ別個に受注する方式であり、各件が15日以内の短期調査となるため埋文課内規に照らして補助事業の対象とした。必要書類は6件別個に提出を求めたが、調査に際しては煩雑さを避けるため、全てを統合して調査次数は一つとし、まとめて発掘調査を行うこととした。

発掘調査は2005年（平成17年）11月15日~12月20日に国庫補助事業として行い、報告書作成は2008年（平成20年）度に同じく補助事業として実施した。

2. 調査の組織

発掘調査にあたり、地権者である横山 悟氏、室 麻矢氏、片岡紀昭氏、俣野浩之氏、飯田 博氏、岡本龍雄氏、および株式会社シノケンの皆様の快いご理解を得ることができた。また、近隣住民の皆様には、調査に対するご理解とご協力を頂いた。記して感謝申しあげたい。

調査は以下の組織で行った。

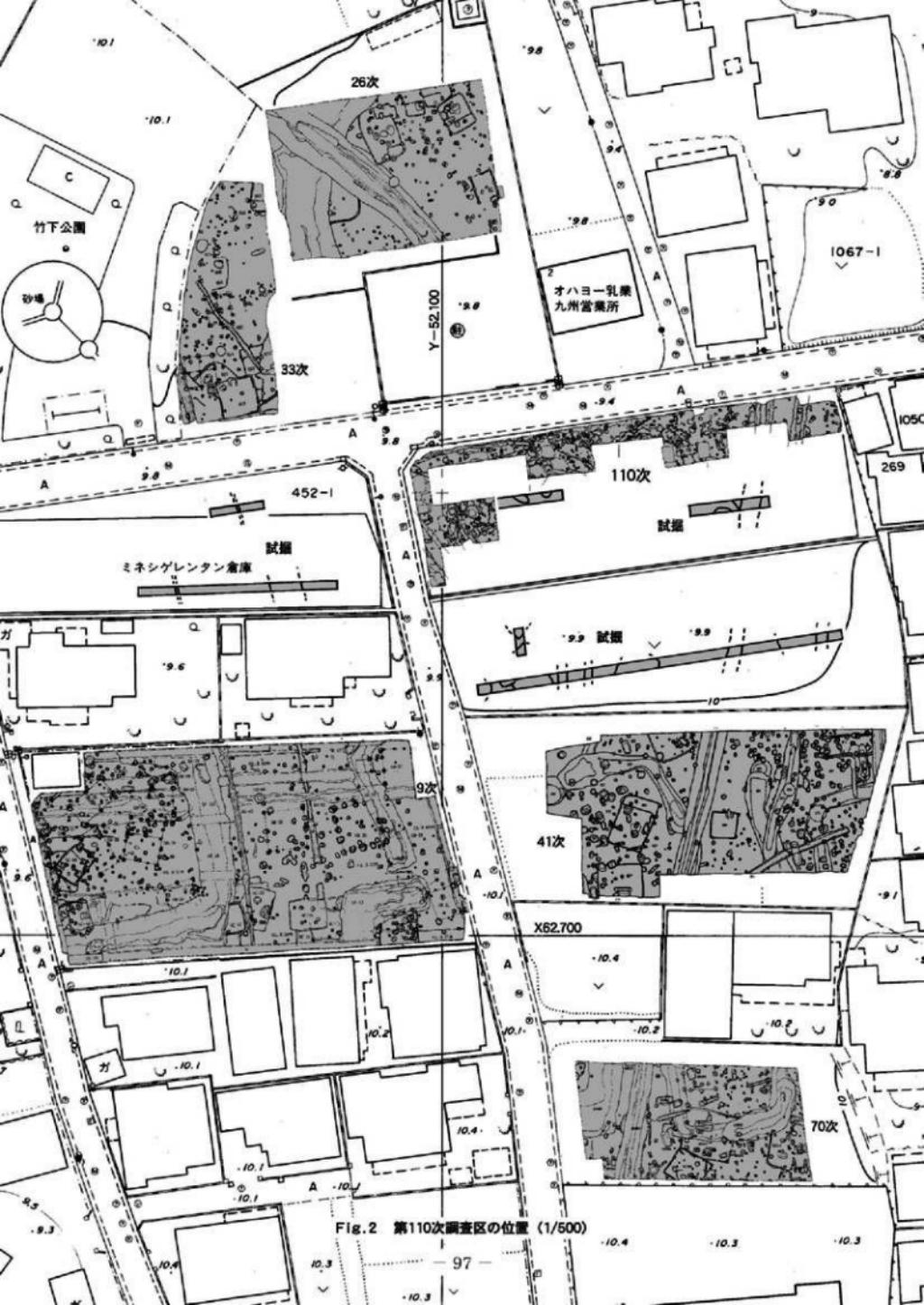
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 植木とみ子（調査時）、山田裕嗣（現任）
調査総括	埋蔵文化財課長 山口頼治（現埋蔵文化財第1課長）
	埋蔵文化財課調査第2係長 山崎龍雄（調査時）、米倉秀紀（現任、調査係長）
調査庶務	文化財管理課管理係 鈴木由喜（調査時）、井上幸江（現任）
調査担当	埋蔵文化財課事前審査係 本田浩二郎（試掘調査担当・調査時）
	埋蔵文化財課調査第2係 吉武 学（本調査担当・調査時）
調査協力	坂口剛毅（技能員）、池田省三、上野龍夫、江島光子、加藤常信、唐島栄子、坂下達男、大長正弘、高野瑛子、谷 正則、永松トミ子、中村尚美、布江孝子、三浦 力、山下智子、結城フヂ子、吉住政光、吉田恭子、吉田米男（五十音順、敬省略）
整理協力	田中克子（技能員）、青木悦子、下山慎子、萩尾朱美、森 寿恵（五十音順、敬省略）

3. 第110次調査地点の位置と周辺の調査例 Fig.1・2

那珂遺跡群は、福岡市博多区博多駅南から那珂一南区五十川方面にのびる台地上に立地しており、今回の調査地点はこの南端付近にあって、尾根筋に近い中央部に位置する。北側に道路を挟んで第26・33・44次調査地点、南側に一区画置いて第9・41次、更に1区画離れて第70次調査地点が位置しており、第70次のあたりで最も台地が高くなり、海拔標高10.4mを測る。これまで周辺で実施した発掘調査では、旧石器時代包含層（第41次）、弥生時代住居・溝、古墳時代前期方形周溝墓・並列溝（道



Fig. 1 第110次調査区と近隣調査地(1/2,000)



路側溝)、後期古墳周溝、古墳時代後期~古代の溝、中世の溝などを確認している。旧石器時代遺物、古墳時代の方形周溝墓群や後期古墳の存在は、この一帯が台地最高所であることに深く関係するものと考えられよう。

4. 調査の概要 Fig.3, PL.1~2

試掘調査時にはミネシゲ練炭工場の倉庫が建っており、調査前には解体が終了して更地となっていた。発掘調査は建設工事によって削られる敷地外周道路沿いを対象とし、調査区はL字形をなす。排土処理等の関係から、まず北辺部分の調査を行い、次に排土を反転して西辺部分の調査を行った。地表面の標高は海拔10m前後である。遺構面は鳥栖ロームで、標高9.0~9.4m。隣接道路より若干低いレベルにあり、東側へ緩く下っている。削平を受けているが、東端の一部ではローム上にクロボク土(黒色粘質土)が残る。

検出遺構は、弥生時代中期末~後期中期の溝2・井戸3、古墳時代前期の方形周溝墓1・及びそれに切られる住居・土坑、古墳時代後期の溝2、奈良時代の溝2であるが、調査区が狭いため遺構の時期や性格は不確実である。また、一部で鳥栖ロームを掘り下げ、旧石器時代包含層の調査を行い、彫器・二次加工のある剝片・使用痕のある剝片など6点が出土した。

遺物は弥生土器を中心に、コンテナケース22箱が出土した。

遺構実測の基準線は調査区の形状に合わせて任意に設定し、後に「博多区・南区内(那珂~井尻地区)遺跡基準点測量委託四級基準点測量成果簿(平成6年2月)」の成果を利用して国土座標(第II系)上に位置づけた。標高もこれによる。

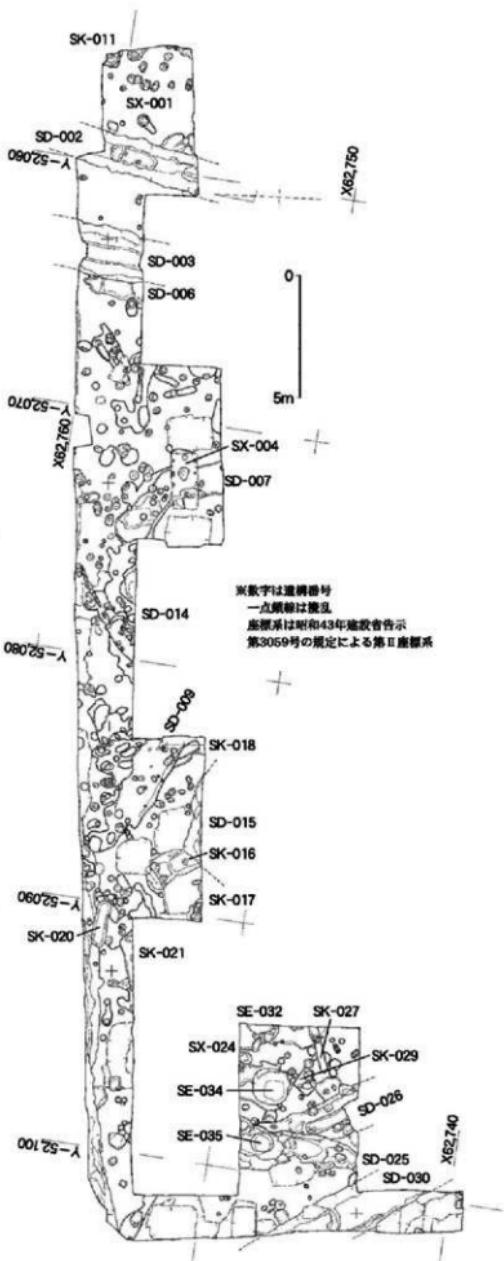


Fig.3 第110次調査遺構配置 (1/200)

5. 検出遺構と出土遺物

検出遺構は、溝状遺構10、井戸3、土坑8、その他2である。調査範囲が狭いため出土遺物が少なく、遺構の時期を決定できない、あるいは周辺調査例からして想定される時期の遺物が出ていない遺構がある。よって、時期ごとにまとめず、遺構記号・番号順に報告する。

(1) 溝

10条を検出した。以下に報告した以外にSD-012があるが、一部の確認に留まるため省略した。

溝SD-002 Fig.4, PL.3

調査区北辺の東端部に検出した。南北方向に直線的に伸び、主軸方位は磁北から13° 東偏する。南北最大長5.2m、東西幅1.5m、底面幅0.5m前後、深さ45~55cm。底面には凹凸が見られ、僅かに北へ傾斜する。断面逆台形を呈し、西壁に比べて東壁の傾斜がやや急である。覆土は黒褐色粘質土で、砂質土の堆積はない。出土遺物は3層に分けて取り上げた。上・中層が土層図の①層に主に相当し、以下は最下層出土としたが、層位による出土器の時期差は認められない。

SD-002出土遺物 Fig.5

弥生土器、須恵器がコンテナ1/2箱出土した。

1~8は弥生土器である。1は壺の口縁部小片で、逆「L」字形をなし、口縁上面が内傾する。横ナデ調整。橙褐色を呈し、胎土に細砂粒を多量に含むほか、暗赤色粒子・雲母粒を含み、焼成やや不良である。2も壺の口縁部小片で「く」字形をなす。器壁剥落して調整不明。胎土に細砂粒多量を多量と径3mmの粗大砂粒を多めに含み、焼成良好。3は壺の口縁部小片で、鶴先形をなす。調整不明。径4mm以下の砂粒を多量に含み、雲母粒が混じる。焼成良好。4~7は壺、壺、鉢などの底部で、いずれも小片。4は摩滅し調整不明。橙褐色で、細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成やや不良。5は外底がやや丸みを持つ。内外ナデ調整。明橙褐色で、径4mmまでの砂粒多量と雲母粒を含み、焼成不良。6は摩滅するが、外面は工具による強いナデか。外底削り後ナデ。内面は器面が完全剥落する。淡褐色で、径3mm以下の砂粒多量と雲母粒を含み、焼成不良。7は外面丁寧なナデ、内面ヘラなどの工具によるナデ調整。明橙褐色で、径2~3mmの砂粒を少し含むが精良、焼成不良。8は鉢か。口縁内湾し、口径が大きい。摩滅して調整不明。暗橙褐色で、細砂粒多量、雲母粒少量を含み、焼成良好。

9~11は須恵器である。9は壺蓋の小片で、端部は丸い。灰青色で砂粒含まず、焼成良好。外面灰被り。10は小片で蓋として図化したが確証はない。外面回転ヘラ削りで十字のヘラ記号があり、タール状の黒色灰を被る。ロクロ回転は時計回り。灰青色で胎土に細い白色粒を少量含み、焼成良好。11も蓋として図化したが確証はない。外面回転ヘラ削りで、二本のヘラ記号が見える。ロクロ回転は時計回り。灰黒色で、砂粒は含まず、焼成良好。

溝の最下層から他に須恵器片2点が出土している。出土遺物から古墳時代後期に位置付けられるが、SD-003とはほぼ並走し、覆土も近似することから同時期の溝である可能性が強い。

溝SD-003 Fig.4, PL.3

調査区北辺の東端部に検出した南北に伸びる溝の一部である。直線的に伸び、方位は磁北から9° 東偏と計測できるが、調査範囲が狭く確証はない。長さ2.8mを確認した。幅1.8~2.1m、底面幅45~55cm、深さ1.3mを測る。断面は箱形をなし、上半部はV字形に大きく開く。SD-002同様、東壁の傾斜がやや急である。溝の上半はロームブロックが主体であり、中位まで埋没した段階で埋めら

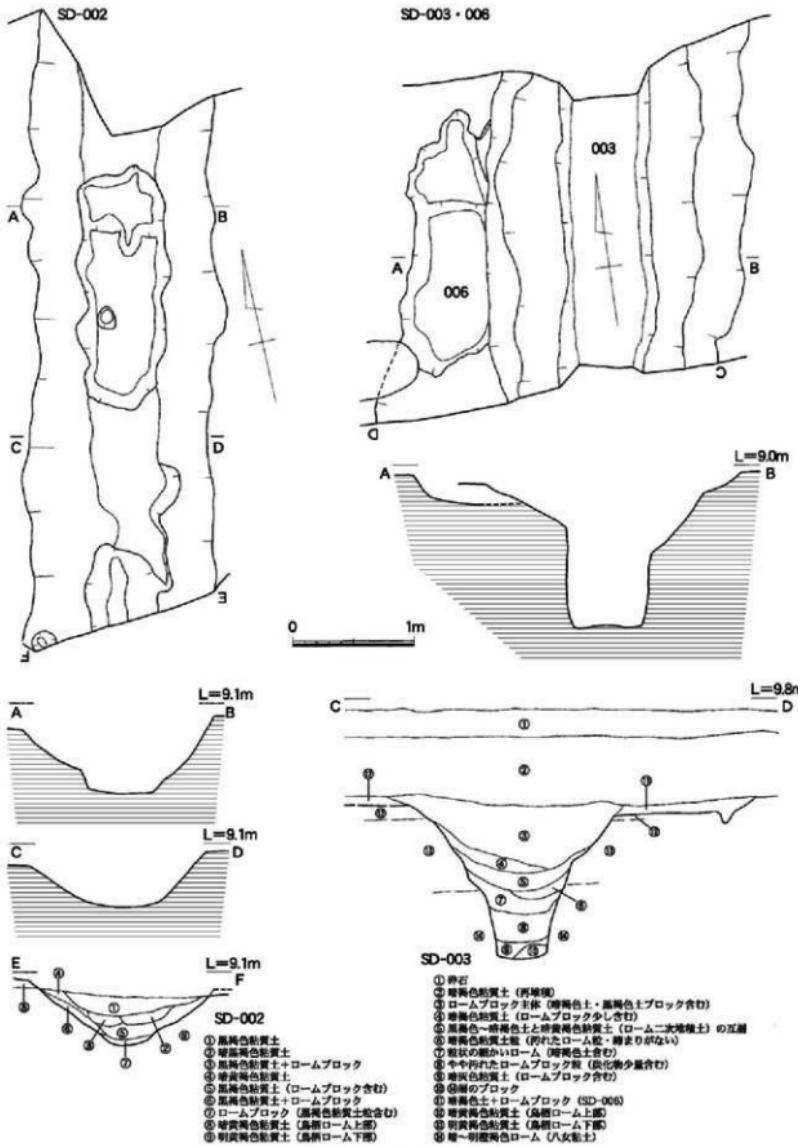


Fig. 4 溝SD-002・003・006実測図 (1/40)

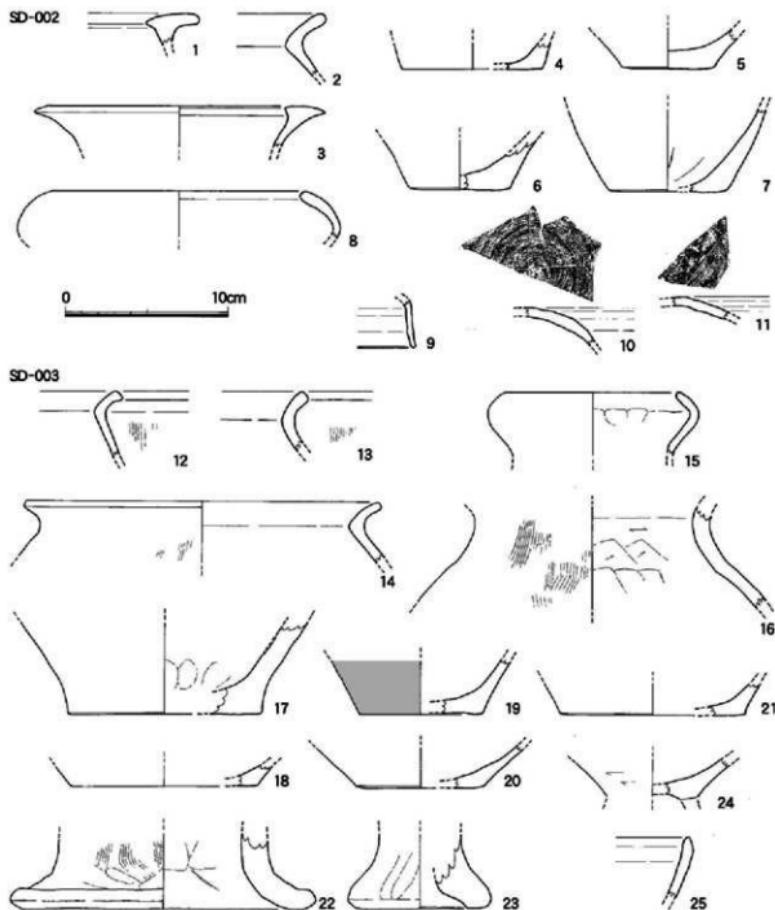


Fig.5 SD-002・003出土土器実測図 (1/3)

れたものと考えられる。遺物は5層に分けて取り上げた。上位3層までが土層図の③層に相当する。

SD-003出土遺物 Fig.5

弥生土器、須恵器等がコンテナ1/2箱出土した。

12~23は弥生土器である。12は壺の口縁部小片である。「く」字形に短く開く。外面縦刷毛目、内面磨滅、口縁横ナデ調整。淡橙褐色をなし、細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成不良で外面に黒斑がある。13も壺の口縁部小片か。外反して開き、端部が肥厚する。外面縦刷毛目、内面ナデ、口縁横ナデ。淡橙褐色で、細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成良好。14は壺の口縁部小片。「く」字形で内面の稜は

甘い。外面縦刷毛目、内面剥落、口縁横ナデ。外面橙褐色、内面淡灰一灰黑色。径3mmまでの砂粒多量と雲母粒を含み、焼成良好。**15**は袋状口縁壺の小片で、内面に指押え痕が残る他は調整不明。淡黄褐色で径3mm以下の砂粒多量と雲母粒を含み、焼成良好。**16**は壺の肩部で、胴外面縦刷毛目、内面板状工具によるナデ。頸部内外横ナデ。外面淡黄褐色、内面淡橙褐色。細砂粒少量と雲母粒を含み、焼成良好。**17-21**は壺・壺・鉢などの底部片である。**17**は外面ナデか。内面ナデで、内底に指押え痕が残る。暗橙褐色で細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成やや不良。**18**は摩滅した小片で、調整不明。橙褐色で細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成良好。**19**は外面丹塗り、内面は摩滅。暗橙褐色で丹は暗赤色。細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。**20**は調整痕が残らない。淡黄褐色で、細砂粒が多く、カクセン石・暗赤色粒を少し含み、焼成やや不良。**21**は調整不明。橙褐色。細砂粒多量と雲母粒・カクセン石を含み、焼成良好。**22**は器台の底部か。外面指押え→縦刷毛目、内面指押え→ナデ。暗橙褐色で細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成良好。**23**は器台で、小片のため天地不明。指頭による整形痕が残るのみ。淡灰一淡橙褐色で、径3mm以下の砂粒多量とカクセン石を含み、焼成良好。二次加熱を受ける。

24は底部片で脚もしくは高台が付こう。外面横ナデ、外底ナデ、内面は丁寧なナデ調整。暗橙褐色を呈し、細砂粒を少量含み、焼成不良。硬質で外面に黒斑がある。**25**は鉢か。口縁部小片で、内外横ナデ調整。淡黄灰色で細砂粒を少量含むが精良。土師器坏、もしくは焼成不良の須恵器か。

他にも下層から須恵器壺小片が出土している。**24・25**等より古墳時代後期以降に下る可能性が高い。

溝SD-006 Fig.4

SD-003の西に重複し切られる。南北に伸びる溝の一部か。南北長2.6m、東西幅1m以上、深さは最深部で20cm、他は10cm前後。北側は造構面が15cm下がっており、削平消滅したと考えられる。

土器片3点が出土したが、図化可能なものはない。SD-003に先行する造構であるが、時期は不詳。

溝SD-007・014 Fig.6

調査区北辺のほぼ中央に位置する。南へ弧を描く東西溝で、東半部をSD-007、西半部をSD-014としたが、SD-014はプランが曖昧である。弧の外径は推定12m、同じく内径9.0mとなる。溝幅は1.2~1.7m、深さ15cmと浅く、断面皿状をなす。覆土は暗褐色粘質土で、古墳時代後期~古代と考えられる。円墳周溝ないしは地山整形痕の可能性もあるが、全形を確認できないため確証はない。

SD-007・014出土遺物 Fig.7

SD-007からは弥生土器などの小片が少量出土した。**26**は弥生土器の底部で、摩滅した小片のため器種不明。平底。橙褐色を呈し、胎土に細砂粒を少量含むが精良と言え、焼成良好。

SD-014からは土器小片が7点出土したが、図示できるものはない。

出土遺物が少ないが、覆土からみて古墳時代後期以降と考えられる。

溝SD-009 Fig.6, PL.3

調査区北辺のほぼ中央に位置する。北西~南東に伸び、南東は調査区外に伸展する。不整な形状だが、南西辺は直線的である。長5.8mを確認した。最大幅1.6m、深さ10cm前後で、断面皿状を呈する。覆土は暗褐色粘質土である。SD-007・014に類似する造構か。

SD-009出土遺物 Fig.7

土器小片・須恵器などが少量出土した。図示した遺物はいずれも須恵器蓋坏である。

27は小片だが蓋か。灰黒色で砂粒含まず、焼成良好。**28**は坏身小片で、蓋受けの返りは低く短く、

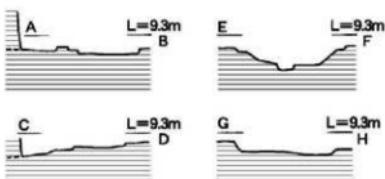
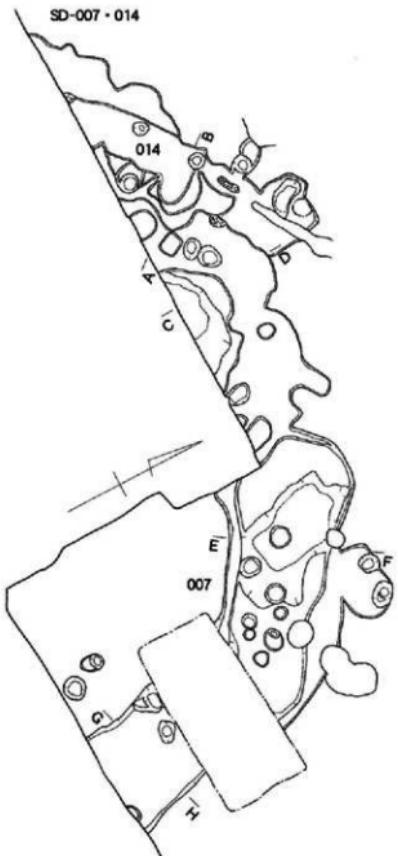


Fig. 6 溝SD-007(014)・009(007)実測図 (1/60)

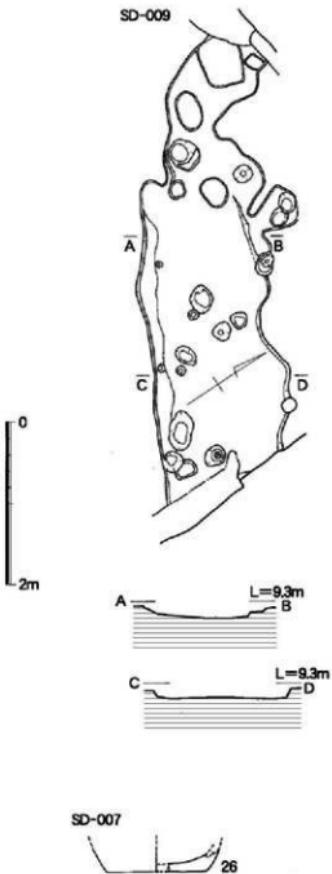


Fig. 7 SD-007・009出土器実測図 (1/3)

端部は丸い。灰青色で胎土に白色粒を少し含み、焼成良好。外面降灰。29も坏身で、返りの立ち上がりは28よりやや高く、端部は丸い。外面の約1/2に回転ヘラ削りを加える。ロクロ回転は時計回り。灰青色で砂粒を少量含み、焼成良好。復元口径10.6cm、器高3.9cm。古墳時代後期の遺構であろう。

方形周溝墓SD-015 Fig.8, PL.3

調査区北辺のやや西寄りに位置する。住居跡状のSK-017・土坑SK-016と重複し、これらに後出する遺構だが、プランがつかみ難く、上層ではSX-010として遺物をまとめて取り上げた。南へ直角に曲がる溝の一部と考えられ、周辺調査例からみて方形周溝墓と推定される。東西長3.0m以上、調査区南壁際で深さ60cmだが、更に南へ落ちていく。覆土は黒一暗褐色の粘質土である。

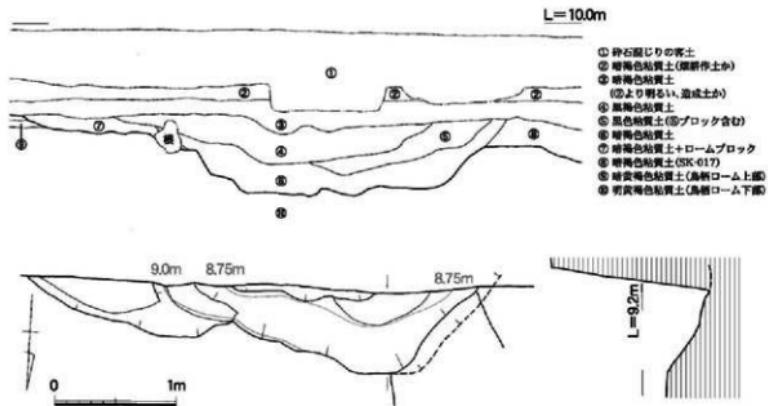


Fig.8 方形周溝墓SD-015実測図 (1/40)

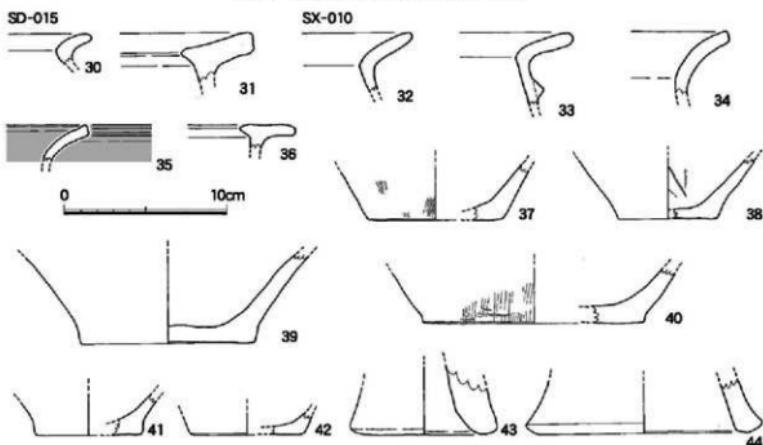


Fig.9 SX-010・SD-015出土土器実測図 (1/3)

SD-015 (SX-010) 出土遺物 Fig.9

SD-015として取り上げた遺物には、弥生土器・磨滅した土器小片が26点ある。

30は弥生土器壺の口縁部小片で、強く外反して短く聞く。摩滅し調整不明。橙褐色で、径2mm以下の砂粒を多く含み、焼成不良。31は弥生土器中型壺の口縁部小片。逆「L」字形で上面内傾する。摩滅し調整不明。赤橙-淡橙褐色をなす。細砂粒少量と雲母粒を含み、焼成不良。

以下はSD-015、SK-016・017の上層 (SX-010) から出土した遺物で、遺構の切り合いからSD-015が最も後出するため、本項で報告する。弥生土器等がコンテナ1/3箱出土し、砾石1、鉄片1を含む。

図は全て弥生土器である。32は壺の口縁部小片で、「く」字形をなす。調整不明。径3mm以下の砂粒を多く含み、焼成不良。33も「く」字形で、頭部に三角形突帯を貼付する。調整不明。径4mmまでの粗砂粒を多く含み焼成不良。34は壺か。口縁部小片。口縁外反する。調整不明。淡黄褐色で、粗粒・雲母粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成やや不良。35は広口壺の口縁部小片。内外面丹塗り。暗橙褐色で丹は暗赤色。胎土精良で雲母粒を多く含み、焼成良好。36は壺又は高坏の口縁部で、T字形をなすが、小片のため図の傾きは不確実。調整不明。暗橙褐色、径4mm粗粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成良好。37~42は壺・壺・鉢類の底部片で、全て平底。37は外面の縱刷毛目その他は調整不明。赤変し赤橙色をなす。径3mmの粗砂粒と斜長石を少し含み、焼成不良。38は内面に工具圧痕が残るが、摩滅して調整不明。淡橙褐色で細砂粒を多量に含み、焼成不良。二次加熱で底部赤変する。39は底部完存する。外面細かい刷毛目→ナデ、外底ナデ、内面剥落。外面橙褐色、内面淡橙褐色。胎土精良で径3mm粗砂粒・細砂粒・雲母粒・暗赤色粒を少量含み、焼成良好。40は外面縱刷毛目、外底ナデ、内面ナデ調整。暗橙褐色で、胎土精良で雲母粒を含み、焼成不良。41は摩滅するが内外ともナデ調整か。黒褐色で、細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成不良。42は調整不明。橙褐色で、細砂粒多量と雲母粒含み、焼成良好。43は器台底部か。内外ともナデ調整。外面褪せた橙褐色、内面灰黒色をなし。胎土は砂粒・カクセン石を少量含み、焼成良好。二次加熱受け脆い。44も器台小片。摩滅するが内面ナデ調整か。橙褐色、径3mmまでの砂粒を多量に含むほか、カクセン石・雲母粒を含み、焼成やや不良。因化不能だが、他に土師器の可能性のある土器小片がある。

弥生土器がほとんどだが、上記したように古墳時代前期の遺構と考えられる。

溝SD-022 Fig.3, PL.4

調査区北辺の西隣で検出した。調査区隅をかすめて東西方向に伸びていく溝の一部で、北側の現道路下に埋没している溝と考えられる。遺構検出面から1.3mまで掘り下げたが底面に到達せず、道路際で崩落の危険があるため掘り下げを断念した。壁は直立気味に立ち、壁面は崩れて落下している。

SD-022出土遺物 Fig.10

土器片、須恵器、中国産白磁・青花、国産陶磁器（白磁、染付、陶器）、瓦、石製品、鉄滓などが出土したが、量は少ない。

45は福建産白磁碗の底部である。胎土は淡黄白色で精良磁質、やや黄味を帯びた乳白色不透明釉で、高台脇以下は露胎である。内底を輪状釉刺ぎする。46は明代青花皿の底部。胎土はやや赤味を帯びた淡黄白色で精良、磁化していない。乳白色不透明釉を全面にかけ、疊付を釉刺ぎする。内底に「大明成化年製」の銘がある。47は唐津灰釉陶器皿の底部。胎土は淡黄白色で、微細白色砂粒を少量含み硬陶質。やや水色を帯びた淡灰白色不透明釉を内面にかける。施釉時に高台を掴んだと思われる釉が付着する。48は肥前系白磁丸碗の底部片。胎土は白色・精良で、磁化していない。やや水色を帯びた淡灰白色不透明釉を全面にかけ、疊底を釉刺ぎする。49は肥前系白磁紅皿の底部片。胎土は白色・精良

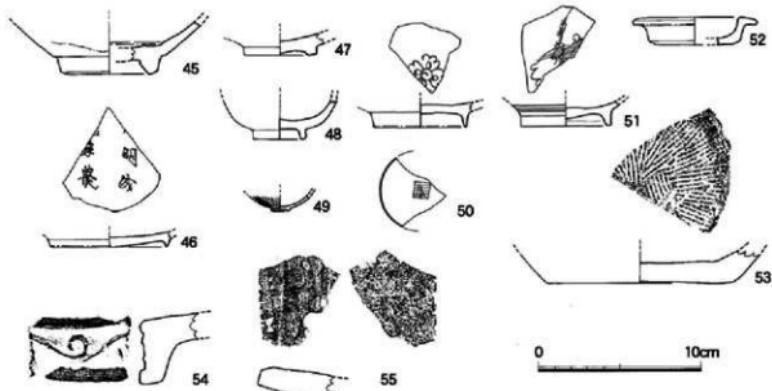


Fig.10 SD-022出土土器実測図 (1/3)

で磁質、僅かに水色の半透明釉で外面露胎。50は肥前系染付あるいは明青花であろう。碗底部。胎土は淡褐色を呈し、精良で磁化せず。釉は乳白色不透明で豊付は釉剝ぎ。内底に花文、外底に銘を入れる。51は肥前系染付碗の底部で、胎土は白色精良で磁質。釉はやや水色気味の半透明で全釉、豊付を釉剝ぎし砂が付着する。内底に人物文を描く。52は国産灰釉陶器の急須蓋。胎土は黒褐色で精良、硬陶質。灰白色不透明釉で、外底面は露胎である。53は国産無釉陶器の擂鉢。胎土は赤褐色で、径1mm前後の白色砂粒を少量含む。焼成不良。

54は軒平瓦の瓦当片で、内区に唐草文を配す。胎土に砂粒と雲母粒を含み粗く、焼成良好で、全面が焼しにより黒色をなす。55は平瓦片で、凹面布目、凸面ナデ調整。側面は面取り。硬く焼き締まり、凹面は降灰により黒色をなす。

近世の溝である。

溝SD-025 Fig.11, PL.4

調査区西辺中央で検出した南北方向に伸びる溝状の遺構である。南北とも調査区外に進展するが、調査区北辺では検出できず、ここまで伸びない。調査区内で長さ5m、幅は南端で0.7m、北側へ広がり、北端で2.2mを測る。南端で深さ20cm弱、北側へ傾斜し、北端で深さ50cmとなる。断面形は不整なU字形をなす。覆土は暗褐色粘質土である。

SD-025出土遺物 Fig.12

弥生土器が少量出土した。須恵器と石製品を数点含む。

56は弥生土器壺の口縁部小片である。器壁が完全に剥落する。胎土に細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。57も弥生土器壺の口縁部小片。器壁完全剥落。径3mmまでの砂粒を多量に含み、焼成不良。58は弥生土器の底部小片で、摩滅が著しい。径5mmまでの砂粒を少し含むが精良、焼成やや不良。

59は須恵器の坏蓋。横ナデで、内面の一部にナデを加える。天井部は扁平で1/2強に回転ヘラ削りを行う。ロクロ回転は時計回り。灰青色で、胎土に白色粒を少量含み、焼成やや不良。

古墳時代後期の遺構であろう。

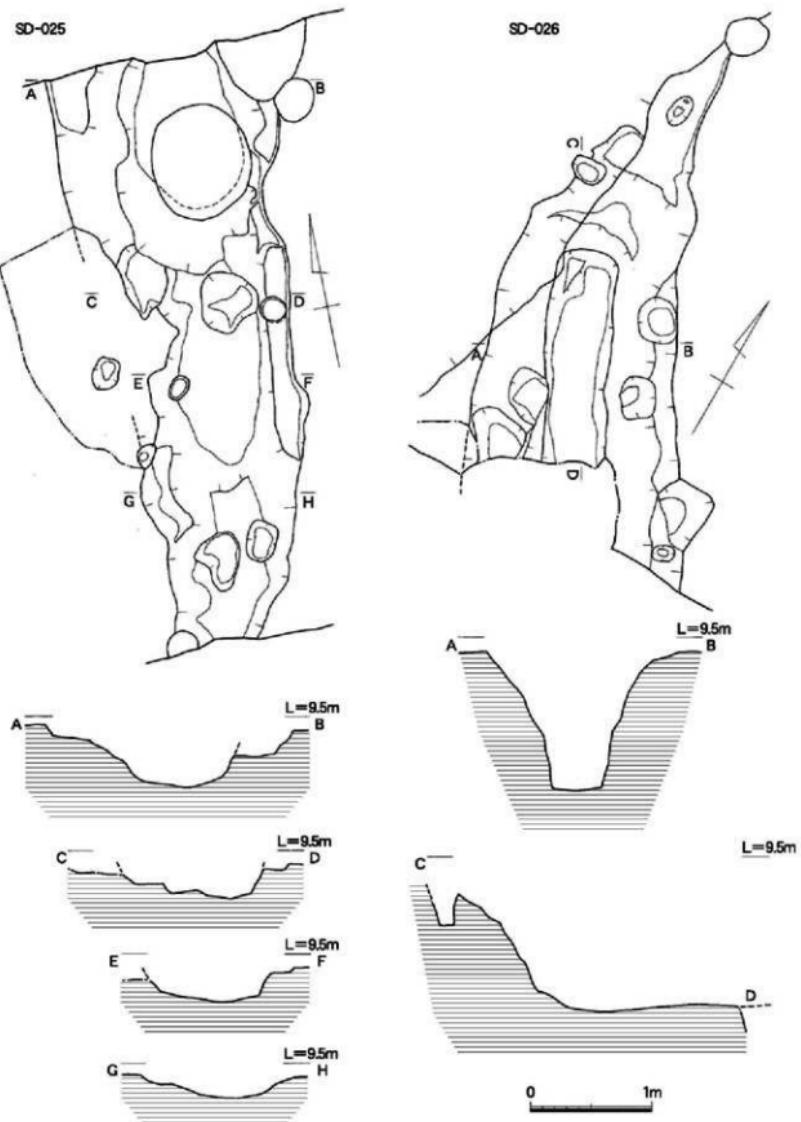


Fig.11 溝SD-025・026実測図 (1/40)

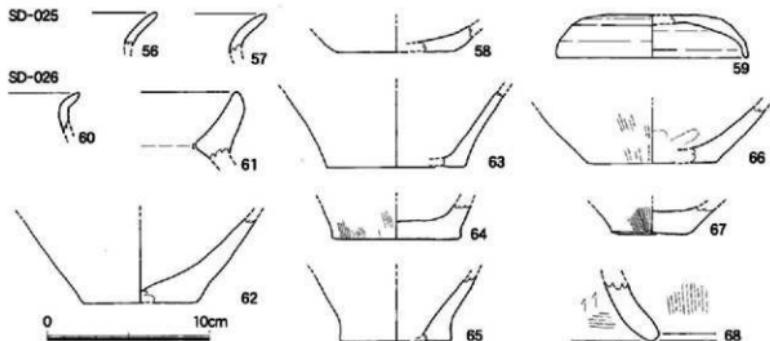


Fig.12 SD-025・026出土土器実測図 (1/3)

溝SD-026 Fig.11, PL.4

SD-025の東に重複し、これに切られる。北西—南東方向に伸びる溝で、弧状に東へゆるく湾曲するプランをなす。溝はSD-025と重なる中央部分で急に立ち上がり、北側は深さ5cm前後と極めて浅くなる。現状で全長4.5m、最大幅1.7m、南半は深く、最深部で造構検出面から1.25mを測る。横断面は逆台形で上部はラッパ状に開き、底面は平坦である。覆土は黒褐色粘質土である。環溝の陸橋部分に相当する可能性があるが、調査区北辺では確認できず、確証はない。第41次調査でも類似する溝が確認されている。

SD-026出土遺物 Fig.12

弥生土器の他、砥石1点が出土した。コンテナケース1/3ほどの量である。

全て弥生土器である。**60**は小壺か。口縁部小片で、図の傾きは不確実。調整不明。淡黄褐色で胎土精良、焼成不良。**61**は壺の口縁部小片で、口径が大きい。「く」字形に屈曲し、口縁内湾する。摩滅のため調整不明。橙褐色で、細砂粒を多量に含む他、径3mmまでの粗砂粒・暗赤色粒・雲母粒を含む。焼成良好。**62~67**は壺・壺類の底部片である。**62**は調整不明。外面淡黄褐色、内面淡橙褐色。径3mm石英粒・雲母粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良。**63**は内外ナデ調整。外面赤橙色、内面褪せた橙褐色。細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成不良。二次加熱により赤変し、内底に炭化物が付着する。**64**は壺底部。外面刷毛目、内面ナデ。外面暗橙褐色、内面淡橙褐色。径3mm粗砂粒・雲母粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成良好。**65**も壺底部。調整痕は全く残らない。細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成不良。**66**は壺か。小片で摩滅する。外面継刷毛目、内面ナデで指押え痕が残る。外面淡黄褐色、内面灰色。多量の細砂粒の他、径3mm粗砂粒・斜長石を含み、焼成不良。**67**は壺底部で完存する。外面継刷毛目、外底工具によるナデ、内面指押え痕。暗橙褐色で、細砂粒を極多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。外底に植物茎の圧痕が残る。**68**は器台底部。小片で図の傾きは不確実。外面継刷毛目、内面横刷毛目。淡黄褐色で、細砂粒を多量、雲母粒・暗赤色粒を少量含み、焼成良好。

弥生時代後期初頭頃の溝であろう。

溝SD-030 Fig.13, PL.4

調査区西辺で検出した溝である。北西—南東に直線的に伸びるが、北西の第33次、南東の41次調査区ではこの溝の延長は出ておらず、途中で屈曲するか途切れるものと考えられる。調査区内では磁北

から33°西の方角に真っ直ぐ伸び、現状で長さ7m強、幅2.0m、深さ75cm前後である。断面逆台形を呈し、底面は平坦で緩やかに北に下る。覆土は黒～黒褐色粘質土で、水流の痕跡はない。

SD-030出土遺物 Fig.14

弥生土器がコンテナ2箱出土した。須恵器片1点と、石製品数点を含む。

89を除き全て弥生土器である。69～71は口縁が逆「L」字形をなす壺の小片である。69は小片で図の傾きは不確実だが、口縁上面は内傾する。摩滅のため調整痕は残らない。淡黄褐色を呈し、胎土の砂粒は径3mm以下で少ない。焼成良好。70も図の傾きは不確実だが、やはり上面は内傾する。外面ナデ、口縁横ナデ。内面は器壁剥落。橙褐色で、細砂粒を多量に含み、焼成不良。71は口縁水平。摩滅するが横ナデ調整か。暗橙褐色で、細砂粒・雲母粒を少し含むが精良、焼成良好。72～77は口縁が「く」字形をなす壺である。72は口縁内面の後は不明瞭。摩滅し調整不明。橙褐色、細砂粒を多量に含む他、暗赤色粒・雲母粒を含む。焼成良好。73も口縁内面の後は不明瞭。器壁剥落し調整不明。径3mmから細砂粒までを少量含み、焼成良好。74も口縁内面の後は不明瞭。調整不明。淡黄褐色で、細砂粒多量と暗赤色粒を含み、焼成良好。75も内面の後は不明瞭。調整不明。橙褐色で、細砂粒多量と暗赤色粒を含み、焼成良好。76は胴から口縁の破片で、口縁内面の後は不明瞭。胴径が口径を上回るが、胴の張りは少ない。胴外面は細かい継刷毛目、内面は板状工具で横にナデ調整。口縁は外に継刷毛目、内に横刷毛目を施し、横ナデ調整。外面橙褐色～黒褐色、内面橙褐色を呈し、胎土に細砂粒を多量に含む他、径3mm粗砂粒・雲母粒・暗赤色粒を含み、焼成良好。77は口縁内面の後が強調され、頸部外面に三角形突帯を貼付する。口径が大きい。調整痕は残らない。橙褐色を呈し、胎土に径3mm以下の砂粒を多量に含む他、雲母粒・暗赤色粒を含み、焼成良好。78は壺であろう。口径は復元不能。胴から口縁にかけて緩く屈曲し開く。内外ナデ調整で、内面に指押え痕が残り、口縁横ナデ。外面明橙褐色、内面暗橙褐色。細砂粒を多量に含む他、径4mmの粗大砂粒・雲母粒・暗赤色粒を含み、焼成不良。二次加熱により器面がひび割れる。79は袋状口縁壺の口縁部小

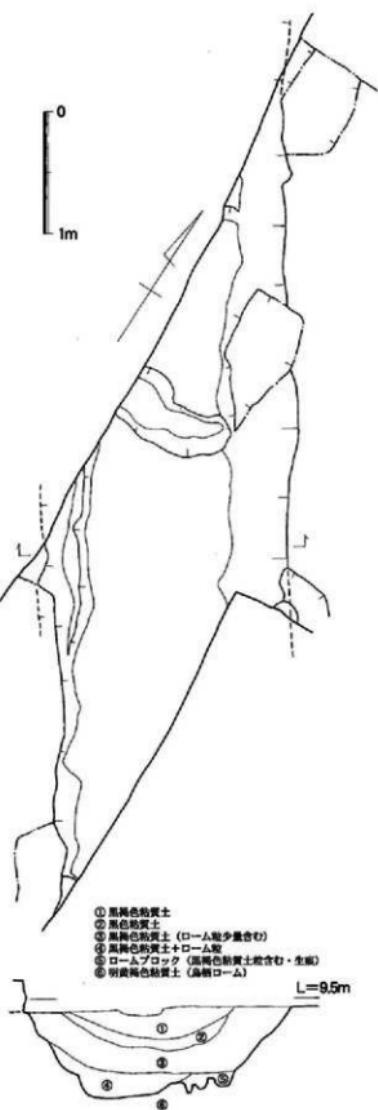


Fig.13 溝SD-030実測図 (1/40)

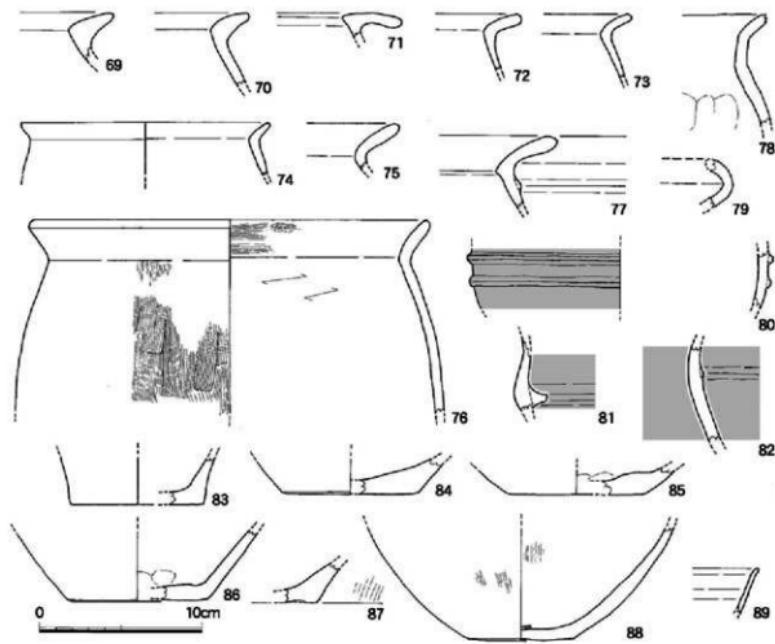


Fig.14 SD-030出土土器実測図 (1/3)

片。摩減するが横ナデか。暗橙色で、径5mm粗大粒混じりの細砂粒を多く含み、焼成不良。80は壺の胸部片で、台形突帯2条を回し横ナデする。摩減するが外面丹塗り。橙褐色で細砂粒を多く含み、焼成良好。81は瓢形壺の胸部小片である。外面に高い台形突帯を貼付し、丹塗りする。橙褐色で、胎土精良で雲母粒を含み、焼成良好。82は壺の頸部小片で、低い三角形突帯を貼付する。摩減するが内外とも丹塗り。橙褐色で丹は暗赤色。細砂粒を少量含み、焼成良好。83は壺の底部小片で、調整不明。淡黄褐色で、外底は赤変する。細砂粒を少量含み、焼成不良。84は底部小片で、調整不明。淡橙褐色で、細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成不良。85は壺の底部か。小片。器壁が剥落するが、内底に指押え痕が残る。外面赤橙～黒褐色、内面にぶい淡黄褐色。径3mm以下の砂粒を極めて多量に含む他、暗赤色粒を含み、焼成不良。86は底部小片。内底に指押え痕が残るほかは調整不明。外面淡褐色、内面橙色。径3mm以下の砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。二次加熱を受ける。87も底部小片。外面縦刷毛目、内面ナデ調整。灰褐色で、細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成不良。88は小形甕もしくは壺の底部か。内外とも刷毛目調整だが器壁剥落が著しい。橙褐色で、径4mm粗砂粒・雲母粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良。

89は古代の須恵器坏で高台が付くか。口縁部小片。横ナデ調整。灰青色で、砂粒含まず、焼成良好。上層から出土しており、混入遺物であろう。

須恵器1点が上層から出土したが、遺構覆土等から見て古代まで下がると考えられない。弥生時代後期初頭の溝であろう。

(2) 井戸

井戸は3基検出した。調査区西辺に集中分布する。

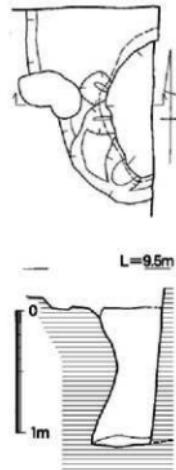
井戸SE-032 Fig.15、PL.4

調査区西辺中央で検出した。調査区の東壁にかかり、一部を調査したのみである。円形プランをなし、径1.1m。壁面は一旦すばまり、底面で開く。底径1.2m。深さ1.2mで、他の井戸と比べると極端に浅く、土坑とすべきかもしれない。

SE-032出土遺物 Fig.16

弥生土器のみが出土した。コンテナ1/2箱がある。

以下は全て弥生土器である。90~99は口縁が「く」字形に屈曲して開く壺で、大半が小破片である。90~92は口縁内面の稜は不明瞭であるか又は丸みを持つ。他方、93~99は口縁内面の稜が明瞭である。90は外面縦刷毛目、内面ナデ、口縁内面横刷毛目後、口縁全体を横ナデ調整する。橙褐色を呈し、胎土精良、焼成良好。91は頸部に三角形突帯を貼付する。調整不明。橙褐色で、細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。92は調整不明。明黄褐色で、径3mm粗砂粒を多く含み、焼成不良。93は横ナデ調整で、内外丹塗り。橙褐色で丹は暗赤色。胎土精良で雲母粒・暗赤色粒を含み、焼成良好。94は口縁がかなり外反する。調整不明。外面淡褐色、内面淡黄褐色。細砂粒多量と雲母粒含み、焼成良好。口縁外面に煤が付着する。95は横ナデ調整で、口縁内面にヘラで放射状に沈線を刻む。橙褐色で、胎土に細砂粒・雲母粒・暗赤色粒を含み、焼成良好。96は横ナデ調整、外面暗橙褐色、内面淡橙褐色。細砂粒多量と雲母粒・暗赤色粒を含み、焼成良好。97は調整不明。橙褐色で胎土精良、焼成良好。98は口縁端部が跳ね上がる。調整不明。淡橙褐色で細砂粒を少量含み、焼成良好。99は胴から口縁にかけて1/4周弱が残る。口縁端部が肥厚し、面取りにより窪む。頸部外面に台形突帯を貼付する。器面が荒れているが外面は口縁指押え→胴縦刷毛目→突帯以上を横ナデの順に調整か。内面は器壁が完全に一枚剥落する。赤褐色を呈し、径2~3mm砂粒と細砂粒とともに多く含み、暗赤色粒が混じる。焼成不良。復元口径40.8cm。100は壺又は高坏の口縁部小片で、鋸先形をなす。口縁外端部にヘラ刻目を入れる。口縁上面はヘラミガキ後放射状に暗文を入れ、外面にも放射状暗文を施す。内面は摩滅するがナデか。外面から口縁上面、口縁の内側まで丹塗り痕跡が残り、おそらく全面丹塗りであろう。暗橙褐色で丹は暗赤色を呈し、胎土精良で細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。復元口径24.0cm。101は袋状口縁壺の小片で、外面丹塗り、内面ナデ調整。橙褐色で丹は暗赤色、胎土精良で雲母粒を含み、焼成良好。102も袋状口縁壺で小片。内外にヘラミガキを施し、口唇部から外面に丹塗り。淡橙褐色で丹は暗赤色、胎土精良で雲母粒を含み、焼成良好。103も袋状口縁壺で、極小片。外面丹塗り、内面ナデ調整。暗橙褐色、胎土精良で雲母粒含み、焼成良好。104は袋状口縁壺の頸部片。外面に三角形突帯を貼付し丹塗り。内面摩滅。淡橙褐色で丹は暗赤色、胎土精良、焼成良好。105は瓢形壺の胴部片。上向きの台形突帯を貼付する。外面横ナデ後丹塗り、内面摩滅するが指押え後ナデか。外面橙褐色で丹は暗赤色、内面淡灰色。細砂粒が多く、暗赤色粒・雲母粒を僅かに含む。焼成やや不良。106は小壺の口縁部で、1/4周ほどの小片。外反して開き、端部は丸い。一孔を内外より開けており、いわゆる双孔広口壺であろう。内外面とも横ナデ後に丹塗りを施す。橙褐色で丹は暗赤色、細砂粒と

Fig.15 井戸SE-032
実測図 (1/40)

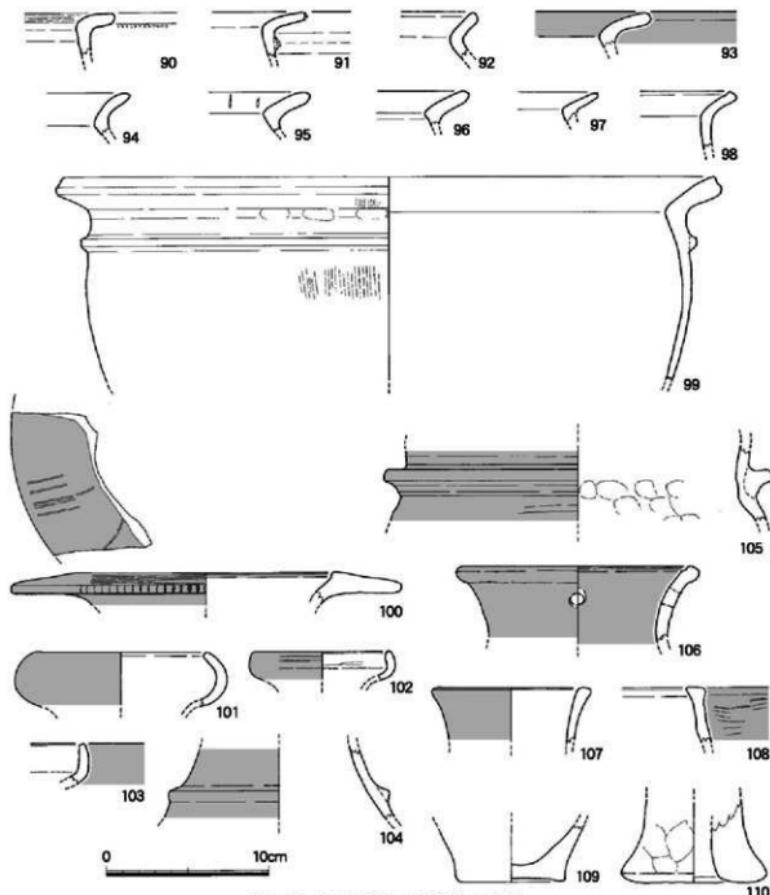


Fig.16 SE-032出土土器実測図 (1/3)

雲母粒を多量に含み、焼成良好。復元口径15.0cm。107は長頸壺の口縁部か。端部が肥厚する。外面に丹塗りの痕跡を留め、内面ナデ調整。内面に丹塗りを施しておらず、脚の可能性もある。橙褐色で、細砂粒と雲母粒を含み、焼成良好。108は壺の口縁部か。内傾し、端部は面取りする。外面横ナデ後、丹塗り。端部の調整は雑であり、底部の可能性もある。橙褐色で、丹は暗赤色。細砂粒を多量に含み、焼成良好。109は底部で完存する。外底が康む。外面は摩滅するが刷毛目→ナデか。内面ナデ。淡橙褐色で、細砂粒・雲母粒・暗赤色粒を少し含み、焼成不良。110は器台底部片。指頭による整形痕を残す。赤褐色で、細砂粒・カクセン石を含み、焼成良好。二次加熱を受けており艶い。

丹塗り土器がかなり多く出土している。上下層で土器の時期差はなく、後期初頭に位置付けられる。

井戸SE-034 Fig.17、PL.5

調査区西辺に位置する井戸である。SX-024の底面で遺構を検出した。平面プランはほぼ円形で、径1.5~1.6mと南北に若干長い。円筒状に掘り下げているが、東壁が著しく抉れており、最大径は2.1mとなる。遺構検出面からの深さは2.8m、底面の標高は6.6mで、径0.9mほどの平坦面をなす。底面から2個、抉れ部分から1個の土器完品が出土した。覆土は黒~黒褐色粘質土で、遺構壁面に見える地山土は、①暗黄褐色粘質土（鳥栖ローム）、②明黄褐色粘質土（鳥栖ローム）、③オレンジ色ローム、④淡黄色粘質土（八女粘土）である。③層は東壁には認められず、②~④層間に部分的に堆積していると考えられる。④層の上面で井戸壁が崩落している。

SE-034出土遺物 Fig.18~21、PL.6

弥生土器、石器がコンテナ4箱出土した。須恵器小片と近世瓦が混入している。

図示した土器は全て弥生土器である。

111は壺の口縁部で逆「L」字形をなす。摩滅して外面に丹塗りの痕跡を留めるのみ。橙褐色を呈し、胎土精良で雲母粒・暗赤粒を含み、焼成良好。112は口径が大きく、甕棺か。逆「L」字形口縁で、口縁上面が内傾し、端部面取り。頸部外面に三角形突帯を貼付するが、調整痕は残らない。橙褐色で、胎土に細砂粒多量と雲母粒・暗赤粒を含み、焼成不良。113は壺の口縁部片で丸く屈曲して開く。外面は細かい刷毛目調整、内面は器面剥落。黒褐色で、径2~3mmの粗砂粒を多く含み、焼成やや不良。煮炊きに使用したか。114は壺で、口縁と底部の破片があるが接合しない。口縁は緩く開き、胴径は口径より小さい。胴外面継刷毛目、内面ナデ調整で内底に指押え痕が残る。摩滅するが口縁横ナデ調整か。赤褐色で、径2~3mmの砂粒多量と径5mm粗砂粒・炭化物を含み、焼成やや不良。115は「く」字形口縁壺で、小片のため図の傾きは不確実。外面継刷毛目、胴内面板状工具でナデ、口縁内面横刷毛目。口縁内外横ナデ。橙褐色で細砂粒を少量含み、焼成不良。116も「く」字形口縁壺で内面の稜は不明瞭。胴外面継刷毛目、内面ナデ、口縁横ナデ。淡黄褐色で細砂粒を少量含み、焼成良好。117は壺の口縁部小片で、口縁は短く開く。胴外面継刷毛目、内面工具によるナデ、口縁横ナデ。橙褐色で、細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。118は壺口縁部小片で図の傾きは不確実。口縁は緩く短く開く。外面の継刷毛目以外は調整痕が残らない。淡橙灰色で径3mm以下の砂粒を少量含み、焼成良好。119は壺の口縁部で、口縁は「く」字形で強く外反し、端部面取り。外面に斜一横刷毛目を施し、口唇と頸外面に横ナデを加える。外面黒~褐色、内面暗橙色。胎土に径3mm以下の砂粒多量と雲母粒を含み、焼成やや不良。120は壺である。口縁は「く」字形をなし、端部面取る。胴径が口径を大きく上回り、頸外面に明瞭な稜がある。器壁が摩滅し、胴内面に斜刷毛目の痕跡を留めるのみ。黄褐色で細砂粒を含み、焼成良好。121は中型壺の口縁部小片で「く」字形をなし、頸部に三角形突帯を貼付。外面口縁下に

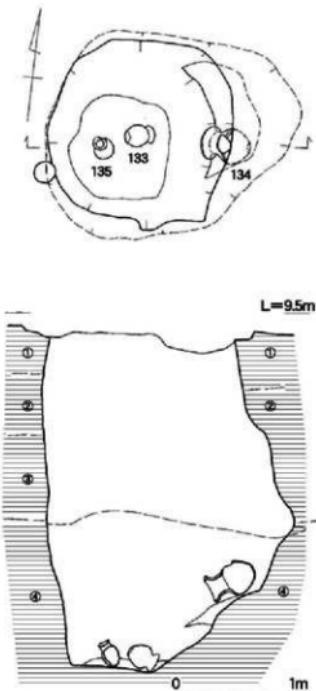


Fig.17 井戸SE-034実測図 (1/40)

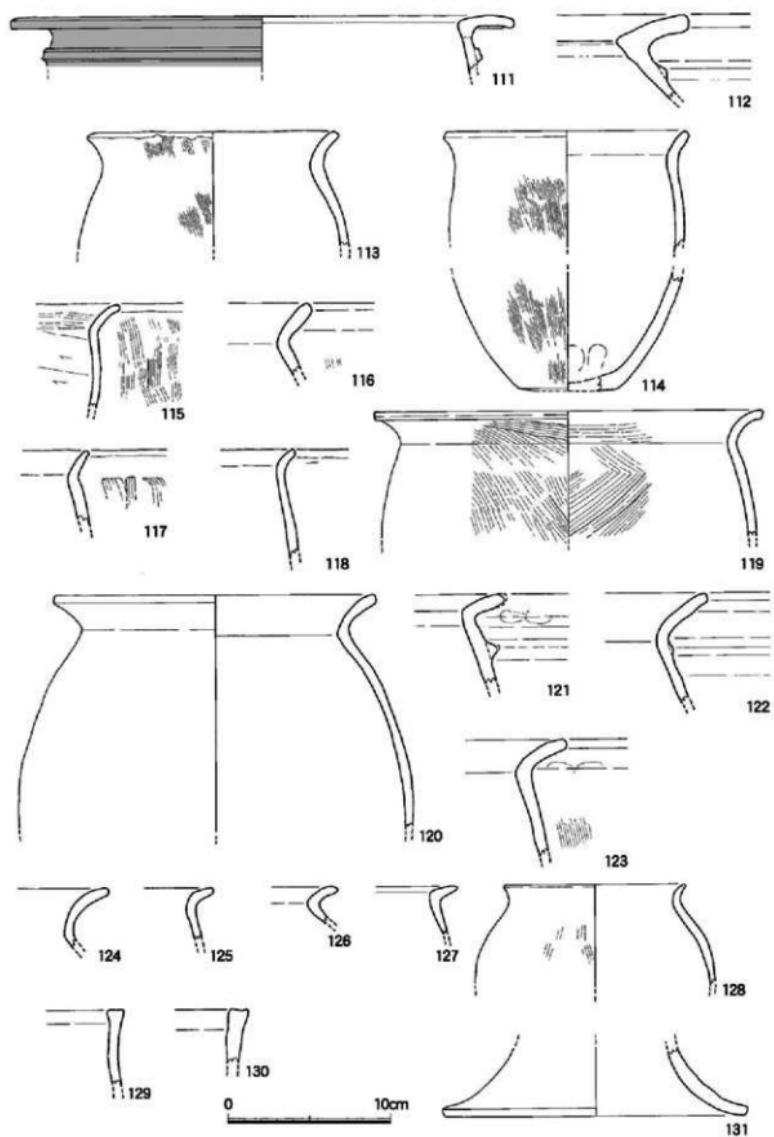


Fig.18 SE-034出土土器実測図 I (1/3)

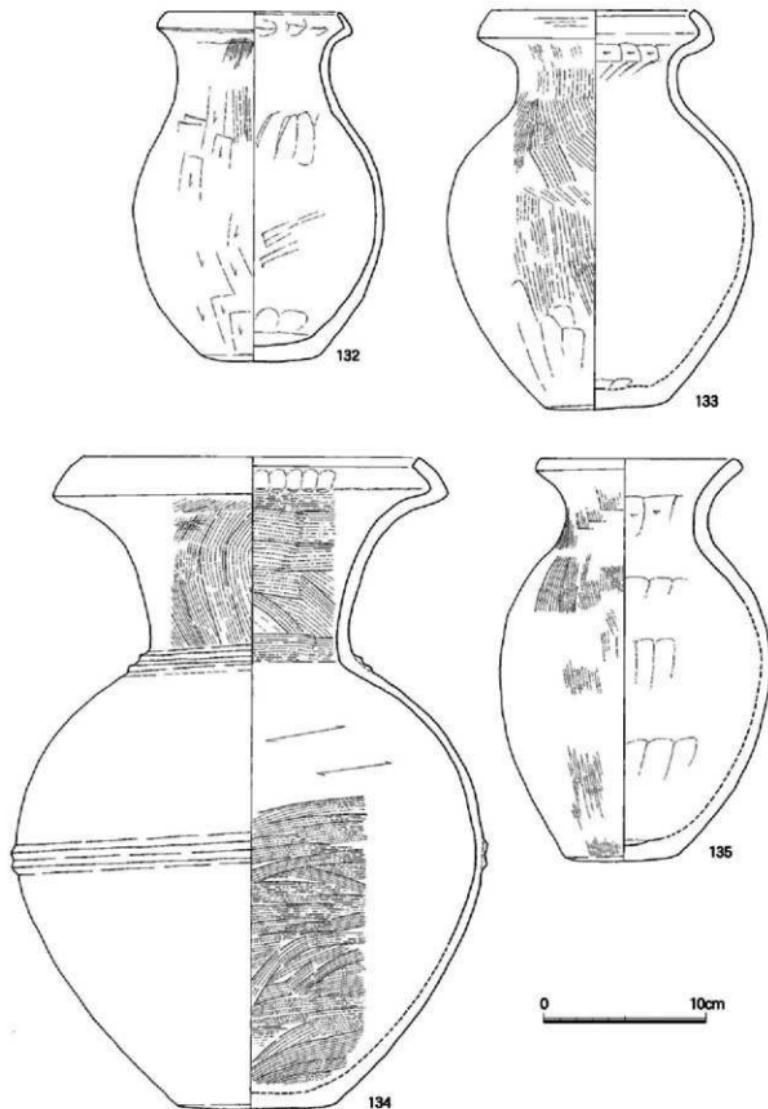


Fig.19 SE-034出土土器実測図 II (1/3)

指押え痕が残り、横ナデ。内面ナデ。淡黄灰色で、径3mmまでの砂粒を極めて多く含み、焼成良好。122は「く」字形口縁の大振りの壺。内面の稜は明瞭。頸外面に三角形突帯を貼付するが、調整痕は残らない。淡黄褐色で細砂粒を多量に含み、焼成不良。123は「く」字形口縁壺小片。頸部外面指押さえ→横ナデ、胴外面に綴刷毛目が残る。淡橙褐→黒褐色で細砂粒を含み、焼成不良。煮炊きに使用。

124は壺の口縁部か。外反して開く。調整痕は残らない。淡橙褐色で細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成良好。125も壺か。口縁は短く開く。摩滅するが胴外面綴刷毛目が。暗橙褐→黒色をなし、胎土に細砂粒・雲母粒を含み、焼成不良。126は無頸壺か。口縁は強く短く外反する。調整不明。橙褐色で細砂粒を多く含み、焼成良好。127は「く」字形口縁をなす小壺もしくは壺。摩滅が著しく調整痕は残らない。橙褐色で細砂粒・雲母粒を含み、焼成良好。128は小壺で、口縁から胴の1/3周が残る。口縁は短く開く。胴外面綴刷毛目、内面ナデ、口縁内外横ナデ。淡橙褐色、胎土精良でカクセン石を微量含み、焼成やや不良。129は広口壺の口縁部小片で、摩滅するがナデ調整か。淡橙褐色、胎土精良で雲母粒を含み、焼成良好。130も広口壺の口縁部小片で、端部肥厚し面取りする。調整不明。淡橙褐色で、胎土精良だが径2~3mm粗砂粒と細砂粒を少し含み、焼成やや不良。131は高坏の脚で、端部面取り。外面上に僅かに綴刷毛目が残る。淡橙褐色で、細砂粒多量と雲母粒・暗赤色粒・黒色粒を含み、焼成不良。

132は壺で考古学的完形。破片の状態で出土し、全ての破片が揃わない。複合口縁で、底部は不安定な平底。胴外面は綴刷毛目後ナデ調整。内面は口縁部・肩部・底部に指押え痕、胴中位に刷毛目の痕跡を残し、ナデ消す。暗橙褐→褐色を呈し、径3mmの粗砂粒・雲母粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良。胴外面下半に黒斑がある。口径10.6cm、器高21.5cm。133は壺の完品で、井戸底面より出土した祭祀土器である。口縁は袋状だが外面に稜があり、底部は不安定な平底。外面は刷毛目調整後、底と胴の一部にナデを加える。胴内面はナデ調整で内底に指押え痕が残る。頸内面を板状工具でナデ、最後に口縁内外を横ナデ仕上げ。橙褐色で細砂粒を多量に含み、焼成良好。胴外面下半に黒斑がある、内外に鉄分が付着する。口径12.4cm、器高24.5cm。134は複合口縁壺で、完品。井戸の抉れ部分から出土した。口縁は強く内屈するが丸みが残り、端部面取り。頸部は細く縮まり、胴部境にM字突帯を貼付する。胴中位にもM字突帯を回し、底部は安定の悪い平底である。外面は綴~斜方向の刷毛目調整で、胴部をナデ消すが摩滅が著しい。内面は全面横刷毛目調整(肩部は圓化不能)で、口縁内に指押え痕が残り、口縁横ナデする。橙褐色で、胎土に径3~5mm粗砂粒と細砂粒を多量に含む他、暗赤色粒・雲母粒を僅かに含み、焼成良好。口径20.5cm、器高40.2cm。135は壺の完品で、井戸底面より出土した。外反して開く單口縁で、端部面取り。底部は平底だがやや不安定。外面は綴刷毛目の後ナデ調整、内面は指押えの後ナデを加え、頸部内面は板状工具で横にナデ調整。暗橙褐色を呈し、径3~5mmの粗粒混じりの細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成良好。口径12.8cm、器高24.7cm。

136は袋状口縁壺の小片。口唇面取り。調整不明。橙褐色で胎土に細砂粒を多量に含み、焼成やや不良。137も袋状口縁壺の口縁部小片。端部は丸い。橙褐色で細砂粒と雲母粒を含み、焼成やや不良。138~147は複合口縁壺である。138は口縁部小片で、口縁端部は面取り。横ナデ調整。黒褐→暗橙褐色で、細砂粒多量と径3mm粗砂粒・雲母粒を含み、焼成不良。139も小片で、口縁は丸みを持ち、端部面取り。外面綴刷毛目、口縁横ナデ。暗橙色で径3mm以下の砂粒を多量に含み、焼成良好。140も小片で、口縁は強く内屈する。端部面取り。外面刷毛目調整、内面は工具で強くナデする。口縁は横ナデするが、内面に指押え痕が残る。橙褐色で細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成不良。141はかなり口径が大きく、約1/6周が残る。口縁内面指押え、外面横刷毛目調整で、他は摩滅。淡黄褐色で径3mmまでの砂粒を含み、焼成不良。142は3破片を図上復元した。口縁の丸みが失われている。口縁端部は面取により下へ突出する。頸外部に三角形突帯2条を貼付する。口縁内に横ナデの痕跡を留めるが、

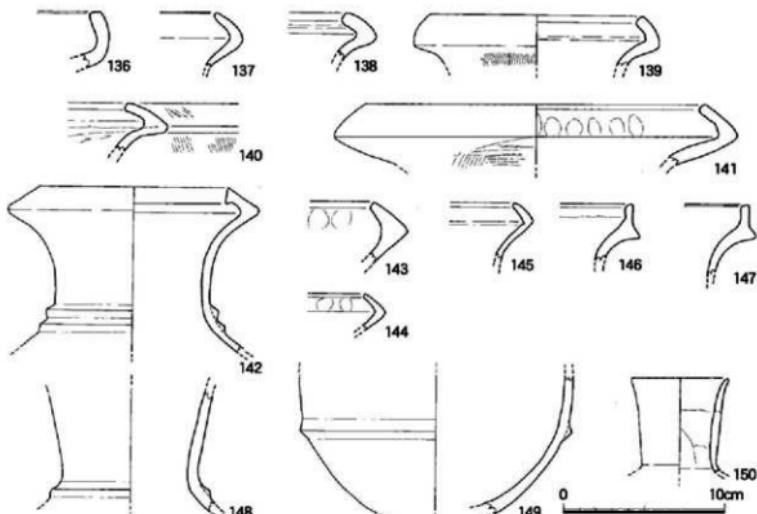


Fig.20 SE-034出土土器実測図III (1/3)

他は器壁が剥落する。淡橙褐色で、径3mm粗粒混じりの細砂粒・雲母粒を多量に含む。焼成は極めて不良。143は小片で、端部面取り。内面に指押え痕が残るが、摩滅して他の調整は不明。淡橙褐色で、細砂粒多量と雲母粒・カクセン石?を含み、焼成不良。144も小片で、端部面取り。内面に指押え痕が残るが他の調整は不明。淡橙褐色で細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成不良。145は端部面取りするが丸い。屈曲部内面に横ナデが残るが、調整不良。細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成不良。146は小片で、口縁は直に立ち、端部面取り。器面剥落するが、外面綿刷毛目の後、内外横ナデ調整か。暗橙褐色~黒色を呈し、細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成不良。147も小片で、口縁は直に立ち上がり、端部面取り。器面が剥落する。黒褐色で、細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成不良。148は壺の頭部片。胴との境に三角突帯を貼付する。器面が著しく摩滅する。外面橙褐色、内面褐色。径2~3mmの砂粒・細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。149は壺の胴下半の小片で、図の径は不確実。中位よりやや下に三角突帯を貼付する。器面剥落する。橙褐色で、径2~3mm砂粒と雲母粒を少量、細砂粒を多量に含み、焼成やや不良。150は長頸壺の口縁部で2/3周が残る。口縁は直に開き、端部で外反する。内面に指押え痕が残るが、全体に摩滅が著しい。赤橙色で、細砂粒を少量含むが精良、焼成不良。

151~163は平底の底部片である。151~154は甕であろう。151は小片で、調整痕は残らない。内底に炭化物が付着する。外面橙色、内面黒色。細砂粒を含むが精良、焼成不良。煮炊きに使用したと思われる。152も小片。外面綿刷毛目、内面工具によるナデ調整で、炭化物が付着する。外面褪せた淡橙褐色、内面黒褐色。細砂粒を多量に含み、焼成不良。煮炊きに使用したと思われる。153は摩滅するが内外ともナデ調整か。褪せた橙褐色~黒褐色を呈し、胎土に細砂粒・暗赤色粒を少量含むが精良、焼成やや不良。154は摩滅して調整不良。赤変して赤褐色を呈し、細砂粒多量と雲母粒・黒色粒を含み、焼成不良。155~160は甕又は壺の底部か。155は外面綿刷毛目、内面指押え後ナデ。橙褐色で細砂粒を含むが精良、焼成不良。156は小片で、外面綿刷毛目だが摩滅し、内面ナデ。外面灰褐色、内面にぶ

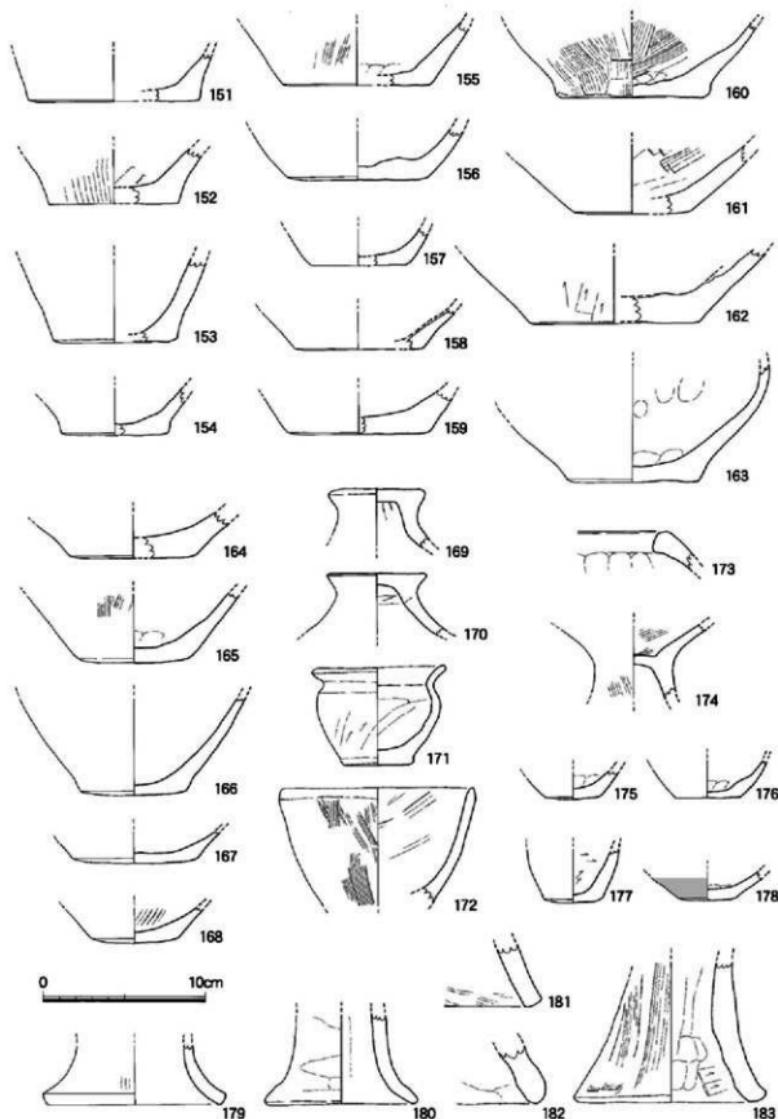


Fig.21 SE-034出土土器実測図IV (1/3)

い橙褐色。径2~3mm砂粒を多く含み、焼成やや不良。157も小片で、調整不明。橙褐色で細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成良好。158も小片で、調整不明。細砂粒を含み、焼成不良。159は1/2周が残るが、摩滅し調整不明。橙褐色~淡黄灰色で、細砂粒を極めて多量に含み焼成良好。二次加熱を受けたか。160は外面縦刷毛目調整、外底ナデ、内面は指押えの後刷毛目。外面は赤味のある黒色、内面は濃褐色をなし、胎土に径5mm粗粒混じりの砂粒を多量に含むほか雲母粒を含み、焼成やや不良。161~163は壺の底部であろう。161は小片で外面摩滅。内面は粗い刷毛目で、内底は工具によるナデ。外面淡橙褐色~淡灰色、内面黒色。径3mm粗粒と細砂粒を多量に含み、焼成不良。162は外面板状工具による下から上のナデ、内面は器壁が一枚剥落する。橙褐色で、径4mm大の粗粒を少量、細砂粒を多量に含み、焼成不良。163は底部完存。外面ナデ、内面は指押えの他は調整不明。外面淡橙褐色、内面橙褐色、径3mmの大きめの砂粒を極めて多量に含むほか雲母粒を含み、焼成不良。

164~168は据わりの悪い不安定な平底である。164は壺の底部小片で、やや不安定。外面は工具による雑なナデ、内面ナデ。外面は褪せた橙褐色、内面黒色。径3mm以下の砂粒を多量に含み、焼成不良。165は凸レンズ状に不安定。外面縦刷毛目だがほとんど摩滅、内面は内底指押え後ナデ調整。外面黒褐色、内面淡黄褐色で、細砂粒を多量、雲母粒・暗赤色粒・植物繊維の脱落痕を含み、焼成不良。166は底部完存で凸状に膨らむ。淡黄褐色、細砂粒を多量、径3mm粗粒と雲母粒を僅かに含み、焼成やや不良。167も底部のみ完存。凸レンズ状に不安定な底部で、剥落し調整不明。橙褐色で、細砂粒多量と雲母粒・黒色粒を含み、焼成不良。168は小形器種の底部で、凸レンズ状に不安定。内面に刷毛目が残るが、外面は器壁が剥落する。内面灰黒色で、細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成不良。

169は蓋で内面に工具圧痕が残る。橙褐色、径4mm粗粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成良好。170も蓋。外面摩滅、頂部ナデ、内面工具によるナデ。橙褐色、径3mm砂粒を少量、細砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成良好。171は小形鉢で完品。厚みがあり重い。口外面は工具によるナデ、外底ナデ、内面指整形、他は摩滅。淡橙褐色、細砂粒を少し含むが精良、焼成やや不良。172は鉢で、外面縦刷毛目後口縦横ナデ、内面斜刷毛目後ナデ。外面暗褐色、内面黒褐色。径3mm粗粒混じりの細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成良好。173は直口鉢か。口縁部小片で内頸内湾し、端部肥厚する。内面は指頭整形で、外面横ナデか。淡橙褐色~灰黒色。径4mmまでの砂粒を多く含み、焼成不良。174は脚付き鉢か。脚に粘土を垂れ足して上部を形成する。外面は上半がヘラ整形、下半が縦刷毛目、内面は上部が刷毛目、下部がナデ。橙褐色、細砂粒を多量、径4mm大の粗粒とカクセン石を僅かに含み、焼成良好。175~178は小形器種の底部で、不安定な平底である。175は底部ほぼ完存。ナデ調整で内底に指押え痕が残る。暗橙褐色で細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成良好。176も底部のみ完存。内底に指押え痕が残るが全体に摩滅。淡灰~淡褐色で、胎土は精良だが内底に細砂粒が溜まる。雲母粒を含む。焼成不良。177は内面工具によるナデ、他は調整不明。橙褐色、細砂粒少量と雲母粒を含み、焼成不良。178は壺で底部のみほぼ残る。外面ナデ後丹塗り、内底指押えの他は摩滅。橙褐色で丹は暗赤色。胎土精良、焼成不良。179は器台で、外面縦刷毛目、内面摩滅。外面赤褐色、内面黒褐色。径4mm粗粒混じりの砂粒を多量に含み、焼成良好。二次加熱を受ける。180も器台小片。指頭による整形痕が残るが器面は消失。暗橙色、胎土精良で雲母粒を含み、焼成良好。181も器台小片。内面に刷毛目が残るが他は摩滅。橙褐色、径3mmまでの砂粒を多く含み、焼成良好。182は支脚小片。指頭による整形痕が残る以外は調整不明。淡橙灰~淡灰色で、胎土精良、焼成良好。183は支脚か。分厚い。外面は下から上へ縦刷毛目、内面は指で整形した後、下端を横刷毛目。赤褐色、径2~3mmの粗砂粒を極めて多量に含み、焼成不良。

弥生時代後期前葉までの土器を多く含むが、井戸の廃絶時期は後期中葉であろう。

井戸SE-035 Fig.22、PL.5

調査区西辺に位置する。SD-025の底面で検出した。径0.8 ~0.95mの南北に長い楕円形プランで、壁はほぼ直に掘り下げ、崩落による抉れはない。造構面から底面まで2.7mで、底面は中央が窪む。底面標高6.7m。造構覆土は黒~黒褐色粘質土。壁面の地山土は①暗黄褐色粘質土(鳥栖ローム)、②明黄褐色粘質土(鳥栖ローム)、③オレンジ色ローム、④淡黄色粘質土(八女粘土)、⑤灰白色粘質土(八女粘土)。

SE-035出土遺物 Fig.23

弥生土器のみがコンテナケース1/3箱分出土した。

図は全て弥生土器である。184は「く」字形に屈曲して開く甕の口縁部小片。胴径が口径を上回ろう。口縁外面に横ナデ痕を留めるが、他は調整痕が残らない。明黄褐色で、胎土に径4mm石英粒を含む細砂粒少量と暗赤色粒を含み、焼成良好。185は甕の口縁部片で、口縁は直に開き、端部肥厚して面取り。頸部に三角形突帯を貼付する。調整痕は残らない。明橙褐色で、胎土は細砂粒が多いが精良で暗赤色粒を含み、焼成良好。186は甕の口縁部で、185と似た器形になろう。外面継刷毛目、内面ナデ。橙褐色で、細砂粒と雲母粒を少し含むが精良、焼成良好。187は支脚か。二次加熱を受けており、器壁が剥落する。淡黄灰~淡灰色で、色あせた色調を呈する。径4mmまでの砂粒少量とカクセン石を含む。焼成不良。188は甕棺の口縁部で、小片のため図の傾きは不確実である。逆「L」字形で、端部は面取りにより窪む。口縁外面を粘土で補強し、横ナデ調整。暗褐色で、細砂粒と雲母粒を多く含み、

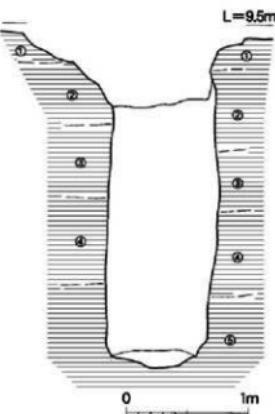
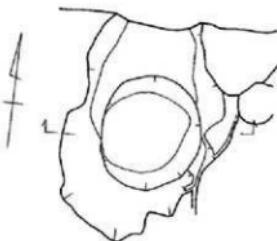


Fig.22 井戸SE-035実測図 (1/40)

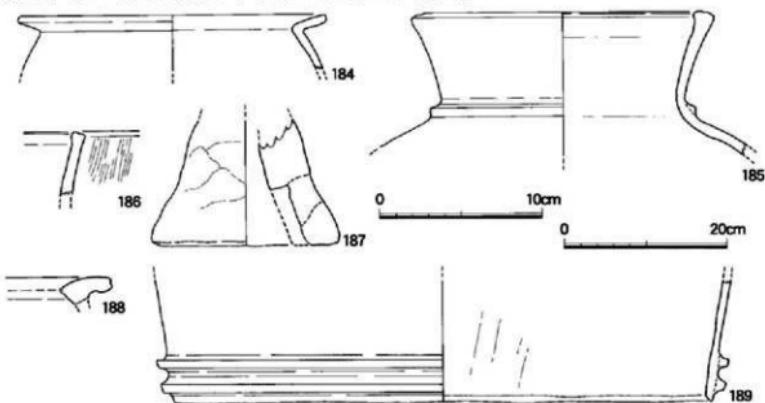


Fig.23 SE-035出土土器実測図 (188・189は1/6、他は1/3)

焼成不良。189は壺棺の胴部片で、台形突帯を2条貼付する。内外面ナデ、突帯横ナデ。暗橙褐色で、胎土に細砂粒と雲母粒を多く含むが精良、焼成不良。内側から打欠き突帯直下から二つに割っている。188・189はともに立岩式壺棺で同一個体の可能性がある。底部は見あたらず、打ち欠いた底部を何処かの壺棺墓に上蓋として用い、不要な残滓を井戸に投げ捨てた可能性があろう。

弥生時代中期末～後期初頭の井戸であろう。

(3) 土坑

土坑SK-011 Fig.24

調査区北辺の東隅で全体の約1/4を確認したに留まる。円形プランで、深さ60cmの断面逆台形。

SK-011出土遺物 Fig.25

図示した1点のみが出土した。190は壺の口縁部片で、頭部は丸く屈曲し、口縁外反する。胴外面粗い刷毛目、内面指押え後刷毛目調整。口縁は軽く面取りし、外面に粘土が垂れ下がり、横ナデ。外面暗橙褐色、内面灰黄色。胎土に細砂粒を多く含み粗く、焼成不良。古墳時代後期の土師器か。

土坑SK-016 Fig.24、PL.3

調査区北辺の西寄りに位置する。SK-017と重複するが、先後関係は不明。南東部はSD-015に切られる。隅丸長方形プランで、2.2m以上×1.2m。断面逆台形で、深さ40cm。底面平坦で南半が一段低い。

SK-016出土遺物 Fig.25

弥生土器、石製品が少量出土した。191は弥生土器壺の口縁小片で、「く」字形をなす。胴外面綏刷毛目、口縁横ナデ。橙褐～黒褐色で、細砂粒を多く含むほか雲母粒・暗赤色粒を含み、焼成良好。

他に丹塗り壺の小片などが出土している。弥生時代後期初頭頃の遺構か。

土坑SK-017 Fig.24、PL.5

SK-016の西に重複し、SD-015に切られる。遺構北辺が直線的で、高さ25cmほどの壁が立つ。南壁際には炭化物を多量に含む窓があり、炉跡とみられる。方形整穴住居の可能性が強いが、狭い調査区と遺構の重複により確定できず、土坑として報告する。住居である場合、南西隅のビットは主柱穴であろうか。

SK-017出土遺物 Fig.25

弥生土器が少量出土した。192は弥生土器の無頸壺か。口縁部小片で、図の傾きは不確実。外面から口縁内面にかけて丹塗りする。橙褐色で丹は暗赤色、胎土に径3mm以下の砂粒を少量含み、焼成良好。193は壺の底部片。外面は刷毛目後ナデ調整、内面は器壁が剥げ落ちる。外面黒色、内面橙褐色。細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成やや不良。弥生時代中期末前後の住居か。

土坑SK-018 Fig.24

調査区北辺の西寄りに位置する。SD-009に切られ、南東を擾乱坑が切る。北西～南東に長い梢円形プランの土坑で、北西端はビットに切られる。長さ1.3m以上、幅0.6m。断面形は逆台形で、深さ40cm。西辺は一段をなす。遺構覆土は暗褐色粘質土である。

SK-018出土遺物 Fig.25

弥生土器少量が出土した他、鉄製刀子（Fig.33-274）がある。194は弥生土器壺の口縁部小片である。外反して口縁が立ち上がり、端部は逆三角形をなし上面外傾する。器壁は完全剥落。径3mm以下の砂

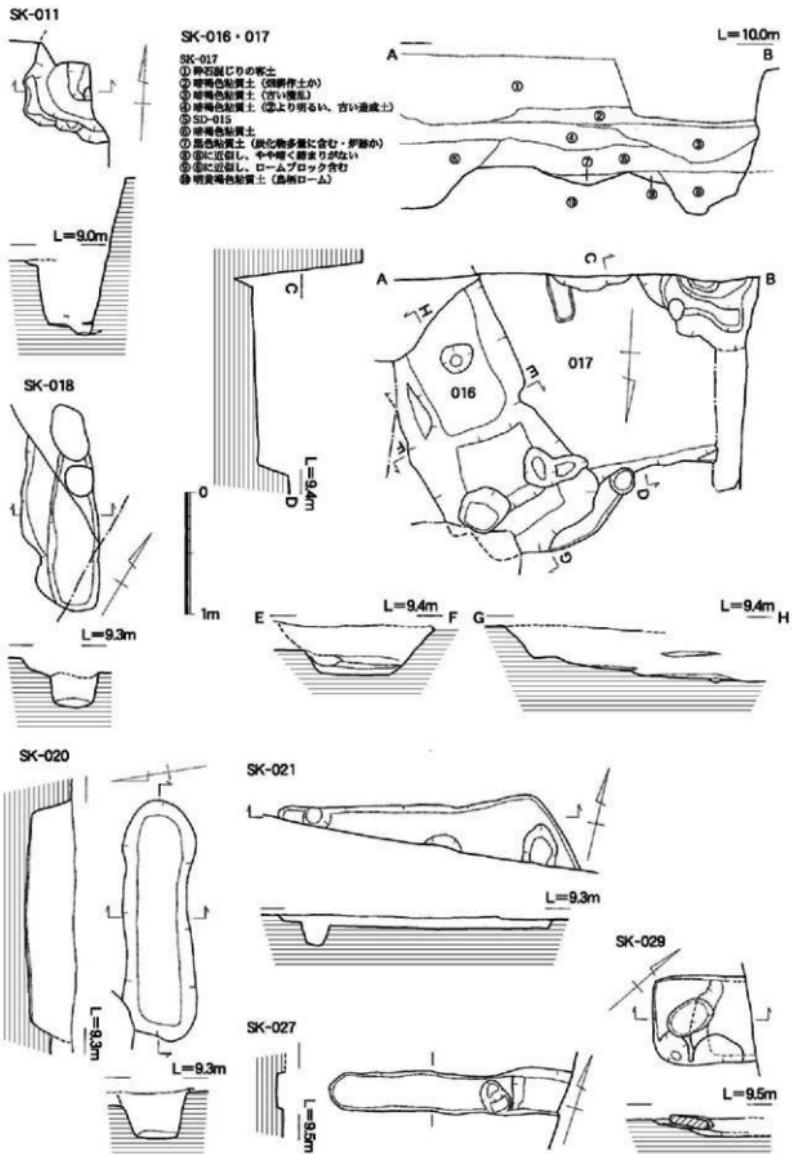


Fig.24 土坑実測図 (1/40)

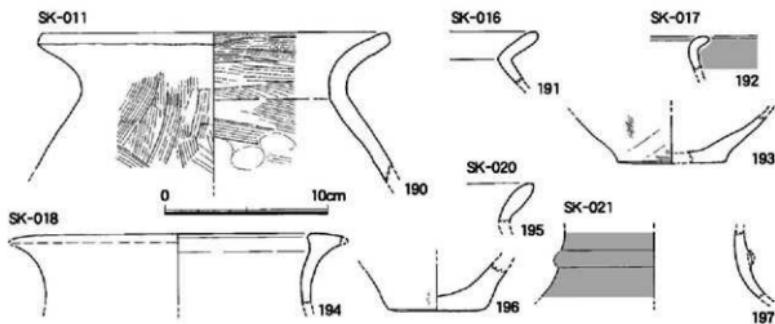


Fig. 25 土坑出土土器実測図 (1/3)

粒を多量に含む他、径5mmの粗砂粒・雲母粒を含み、焼成不良。刀子の出土から古墳時代か。

土坑SK-020 Fig. 24, PL.5

調査区北辺の西寄りに位置する。北西辺を擾乱坑に切られる。東西に長い梢円形プランで、長径2.0m、短径0.6m。断面逆台形で深さ40cm。覆土は暗褐色粘質土。形状から土壤墓の可能性もある。

SK-020出土遺物 Fig.25

少量の弥生土器の他、石庖丁・黒曜石が各1点出土した。

195は弥生土器甕あるいは小壺。口縁部の小片で、図の傾きは不確実。摩滅が著しい。赤褐色で、細砂粒を多量に含み、焼成不良。196は弥生土器の底部小片。摩滅が著しいが、外底は赤変し、内底にはコケ状の炭化物が残る。暗橙色で径2mm以下の砂粒を含み、焼成不良。

弥生時代の遺構だが、詳細時期は分からぬ。

土坑SK-021 Fig. 24, PL.5

SK-020の南側に位置する。不整形プランの浅い遺構で、調査区南外に伸びていく。現状で東西2.5m、南北0.6m、深さ10cm。覆土はロームブロックを含む黒色土である。

SK-021出土遺物 Fig.25

弥生土器小片が約20点出土した。197は壺の頸部片で、外面に突蒂が付くが、摩滅が著しい。外面に暗赤色の丹塗り痕を留めるが、器壁の大半が剥落する。細砂粒を少量含むが精良、焼成良好。

土坑SK-027 Fig.24

調査区西辺の東壁際で検出した。東西方向に長い溝状の土坑である。東は調査区外へ伸びていく。長2.0m、幅0.4m、深さ10cm。断面逆台形で、底面は東へ傾斜する。遺構覆土は黒色粘質土である。遺物は出土していない。

土坑SK-029 Fig.24

SK-027の西に位置し、SK-024に切られる。隅丸長方形プランで、長径0.8m以上、短径0.7m。北東側が一段低く、深さ3~15cm。段差部分に扁平砾が置かれている。

土器小片が1点出土したが、図化できるものではない。

(4) その他の遺構

SX-004 Fig.26

調査区北辺の東半部に検出した。東西に長い長方形プランで、 $2.3\text{m} \times 1.1\text{m}$ 、深さ70cm。底面は平坦で、東側が一段高く、昇降口か。長軸方向に沿って中央に並ぶ3つの柱穴と、側壁沿いに掘られた6つの浅い小柱穴によって屋根を架けたと推定される。形状や覆土等からみて、近現代の穴蔵、もしくは防空壕跡と考えられる。

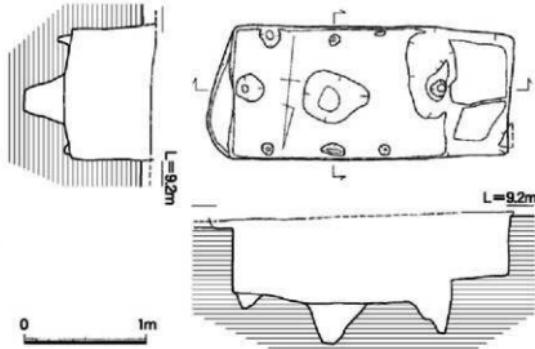


Fig.26 SX-004実測図 (1/40)

SX-024 Fig.27

調査区西辺中央部の北東隅に位置し、北と東は調査区外へ伸びる。不整な形状だが、隅丸方形プランとみなすこともでき、東西3.5m以上、南北3.2m以上を測る。壁は高さ5cm程度で明瞭な立ち上がりがない。底面は東へ段状に落ちていき、最深部で深さ15cm。遺構覆土は暗褐色粘質土である。全形が分からぬが、SD-007・009と同様、古墳地山整形痕の可能性もありえよう。

SX-024出土土器 Fig.28

弥生土器、古式土師器、須恵器等がコンテナケース1/4箱出土した。

198~204は弥生時代中期~古墳時代前期の土器、他は須恵器である。

198は弥生土器の大型壺で、約1/8周が残る。「く」字形口縁で、端部は鋸む。頸外面に台形突帯を貼付し、横ナデ。他の調整痕は残らない。橙褐色をなし、胎土に径3mm以下の砂粒を極めて多く含み、焼成不良。

199は古式土師器壺の口縁部小片で、

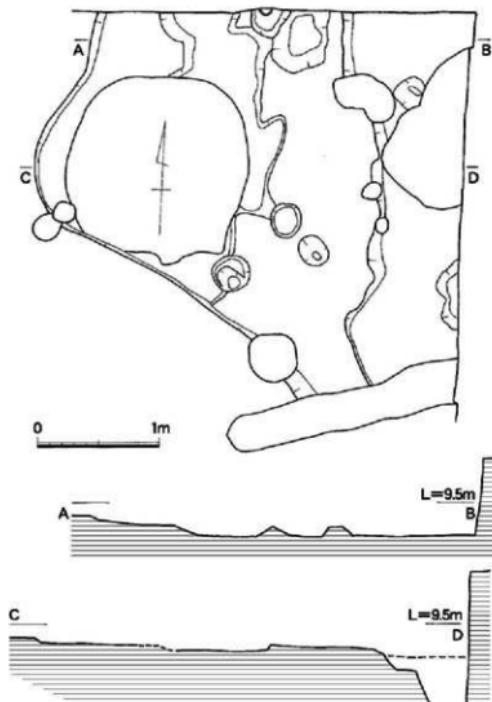


Fig.27 SX-024実測図 (1/40)

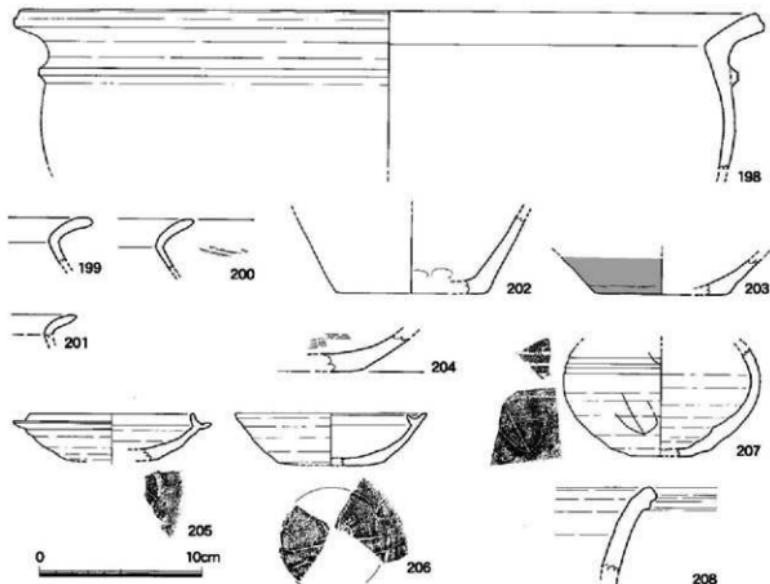


Fig.28 SX-024出土土器実測図 (1/3)

「く」字形で外反して開く。調整痕は残らない。淡黄褐色で、細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成良好。200も古式土師器か。壺の口縁部小片。外面に刷毛目具の小口痕が残るが摩滅が著しい。淡黄褐色で、細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。201も古式土師器か。口縁部小片で摩滅する。淡橙褐色、胎土精良で細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。202は弥生土器壺の底部片。外面縱刷毛目、内面指押え後ナデ調整。外面赤橙色、内面褪せた橙褐色。細砂粒を多く含み、焼成不良。203は弥生土器壺の底部小片。外面丹塗り磨研、内面摩滅。橙褐色で丹は暗赤色。細砂粒を少量含むが胎土精良、焼成良好。204は弥生土器壺の底部小片。外面摩滅、内面刷毛目。暗橙褐色で、胎土に径3mm以下の砂粒を非常に多く含み、雲母粒が混じる。焼成良好。

205は須恵器壺身の小片。蓋受けの返りの立ち上がりは低く短い。底部を回転ヘラ削りし、ヘラ記号を一本入れる。ロクロ回転は不明瞭。灰青色で砂粒を含まず、焼成良好。復元口径10.0cm。206も須恵器蓋坏で、坏身として図化したが蓋の可能性もある。外面約1/3を回転ヘラ削りし、ヘラ記号三本を入れる。ロクロ回転は逆時計回り。灰青色で、細かい白色粒を少量含み、焼成良好。207は須恵器壺である。胴部小片で、球形。肩外面に沈線2条を巡らす。横ナデで、外底ヘラ切り未調整。淡灰青色で、白色粒を多数含み、焼成不良。胴下半に碇形のヘラ記号がある。外面に降灰する。208は須恵器壺の口縁部小片。端部直下に三角形突帯を貼付し、横ナデ調整。黒青色をなし、細砂粒を僅かに含み、焼成良好。内面に降灰がある。

古墳時代後期の遺構と考えられる。

(5) 遺物包含層 (SX-001) 出土遺物 Fig.29~31, PL.6

調査区北辺のSD-002の東側で検出した遺物包含層である。黒色土（クロボク土=古代遺物包含層）の上に乗っており、後世の開墾や整地による再堆積層と考えられる。弥生土器、石製品などがコンテナケース5箱分あり、須恵器片3点、白磁片1点が含まれる。

掲載した遺物は須恵器1点(256)の他は全て弥生土器である。

209~222は壺の口縁部である。209・210は中型壺で、口縁が逆「L」字形をなし、上面内傾する。209は端部面取りし、横ナデ。210は頸部に三角形突帯を貼付。胴外面綱刷毛目、内面工具によるナデ。突帯から口縁内面まで横ナデ仕上げ。211も中型壺。「く」字形口縁で内面の稜は明瞭。外反し端部面取り。頸部に三角形突帯貼付。胴が大きく張り出す。胴外面斜刷毛目、内面工具によるナデ。突帯から口縁内面まで横ナデ仕上げ。212は壺の口縁部小片。「く」字形をなし、強く外反する。内面の稜は明瞭。頸外面に三角形突帯を貼付する。口縁外面に指押え痕が残る。胴外面刷毛目。突帯から口縁、胴内面にかけて横ナデ仕上げ。213~215は「く」字形口縁の壺小片で、口縁内面の稜は丸い。213は外側面ナデ、内面工具によるナデ、口縁横ナデ。214は端部面取りし、胴外面と口縁内面は刷毛目、胴内面はナデ、口縁横ナデ。215は外側面綱刷毛目、内面ナデで粘土帶の難ぎ目を残す。口縁横ナデ。216~219は「く」字形口縁で、内面の稜は明瞭である。216は内外刷毛目、口縁横ナデ、頸部内面ナデ。217は強く外反して開く。内外刷毛目後、口縁横ナデ。外面にススが付着。218は頸部に三角突帯を貼付し横ナデする。内面は口縁横刷毛目、胴ナデ。219は口縁が外反し、端部面取りする。頸部に三角形突帯を貼付し横ナデ。胴部外面ナデ、内面工具ナデ。口縁外側面横刷毛目後横ナデ。220は小形壺口縁部小片で、口縁は短く開く。摩滅するが、外面は綱刷毛目後、丹塗り。221は口縁部小片で222と同器形の壺か。外面綱刷毛目、内面指押え後ナデ、口縁横ナデ。222は小形壺の口縁部小片で、緩く外反して短く開く。外面綱刷毛目、内面工具によるナデ→口縁横ナデ。

223~242は壺・壺・鉢などの底部片で、器種不明なものがある。全て平底で、括れにより底部を強調するもの(223~228)、丸く胴部に移行するもの(234~242)、中間的なもの(229~233)の三者がある。223は極小片で器種不明、内外ナデ。224は壺底部か。加熱により粘土接合部から剥落し、脆い。225は壺又は鉢の底部。外面摩滅、内面工具によるナデ。226は壺底部か。内底に指押え痕が残る。227は壺底部で、外面綱刷毛目、外底は器壁が剥げ落ち、内面ナデ。228は壺底部か。調整痕は残らない。229は極小片で器種不明。230は壺底部で、外面綱刷毛目、内面は器壁が一枚剥落する。231は壺底部で、外面粗い綱刷毛目、外底剥落、内面工具によるナデ。232は壺底部で、外面綱刷毛目で粗密の二種があり、一部をナデるが刷毛目との前後は不明。内面ナデで、指押え痕が残る。233は壺底部で、外面綱刷毛目、外底削り→ナデ、内面は工具によるナデ。234は小形壺の底部で、外面綱刷毛目か。内面ナデ。235は壺底部か。内面ナデ調整で、他は摩滅。236は壺底部で、外面綱刷毛目、内面ナデで指押え痕が残る。237は小形壺底部か。胴外面は細かい綱刷毛目、内面工具によるナデ、内底に指押え痕が残る。238は壺であろう。外面は綱刷毛目か。内面剥落。239は壺底部か。外面綱刷毛目、内面ナデか。240も壺底部か。外面綱刷毛目→ナデ、内面ナデで指押え痕が残る。241も壺底部か。内面に指頭による整形痕が残る。242は壺底部であろう。外面綱刷毛目→ナデか。内面工具によるナデ。

243は壺か。内外とも丹塗り。244は複合口縁壺の小片。調整不明。245は袋状口縁壺で、口縁と頸部があるが接合しない。口径が大きい。外面綱刷毛目→ナデ、頸部に三角形突帯を貼付し横ナデ。内面ナデで、一部工具によるナデを追加。246は壺の頸部。三角形突帯にヘラ刻目を入れる。内面に指押え痕と工具による整形痕が残る。外面に丹塗り痕を留める。247は長頸壺で口縁と底部を欠く。算

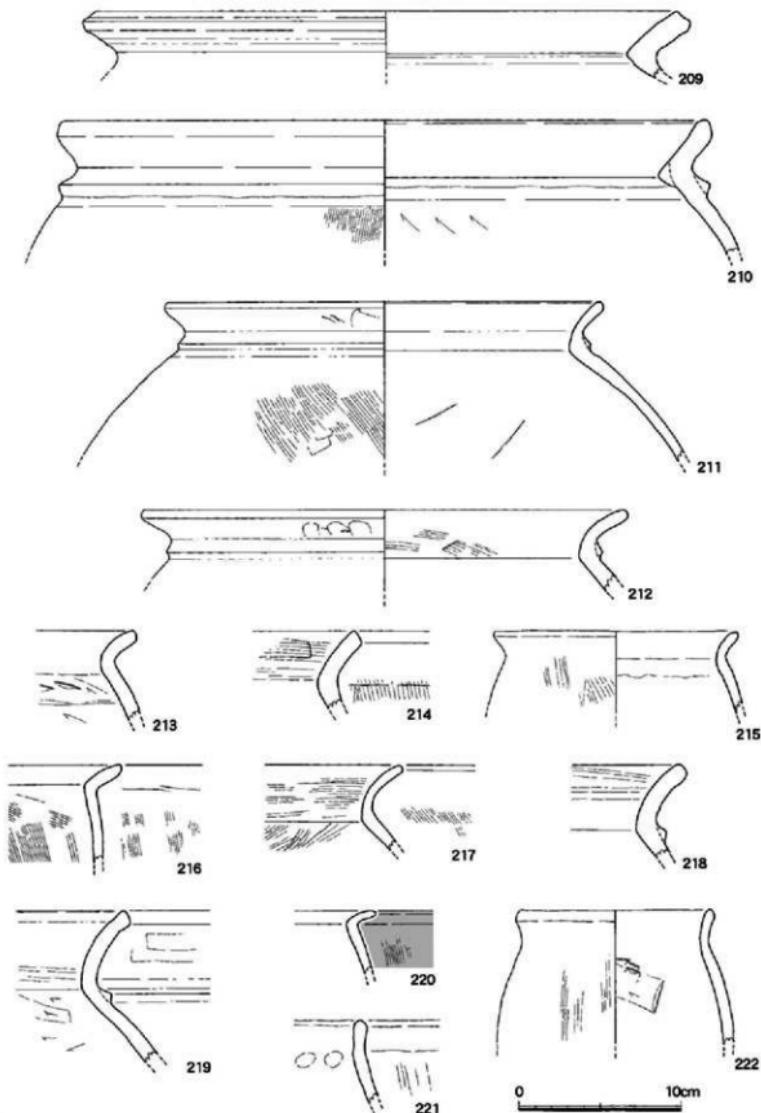


Fig.29 SX-001出土土器実測図 I (1/3)

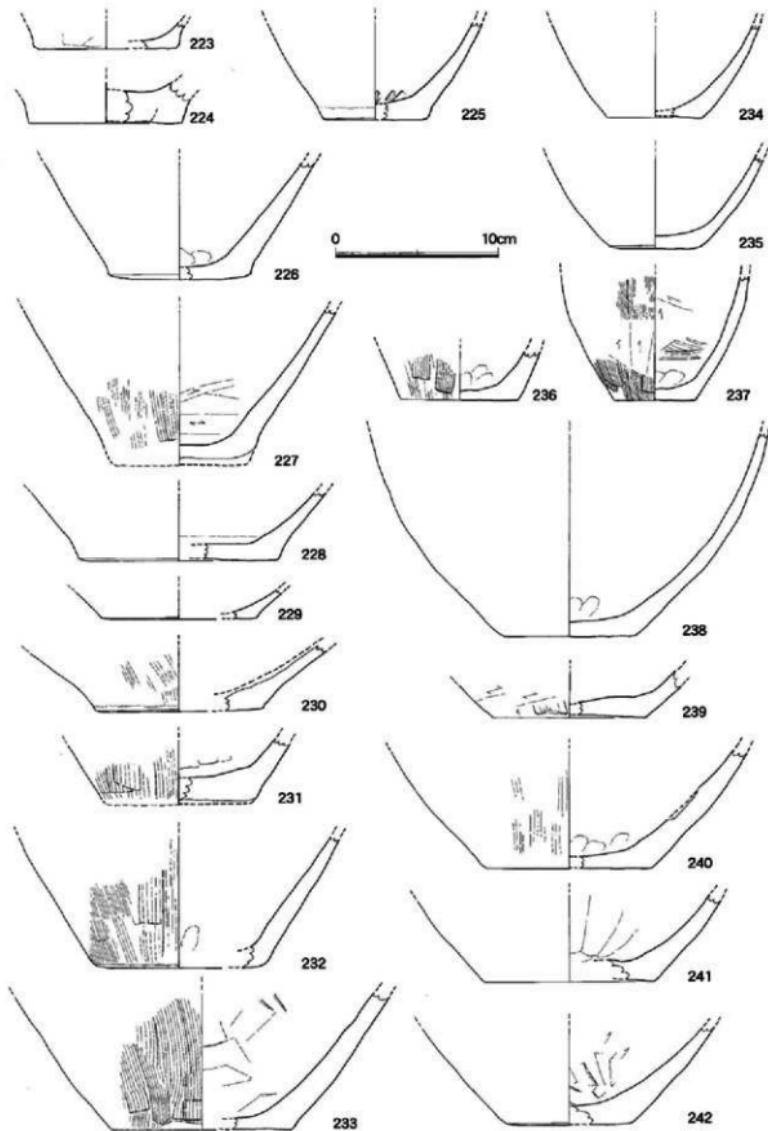


Fig.30 SX-001出土土器実測図 II (1/3)

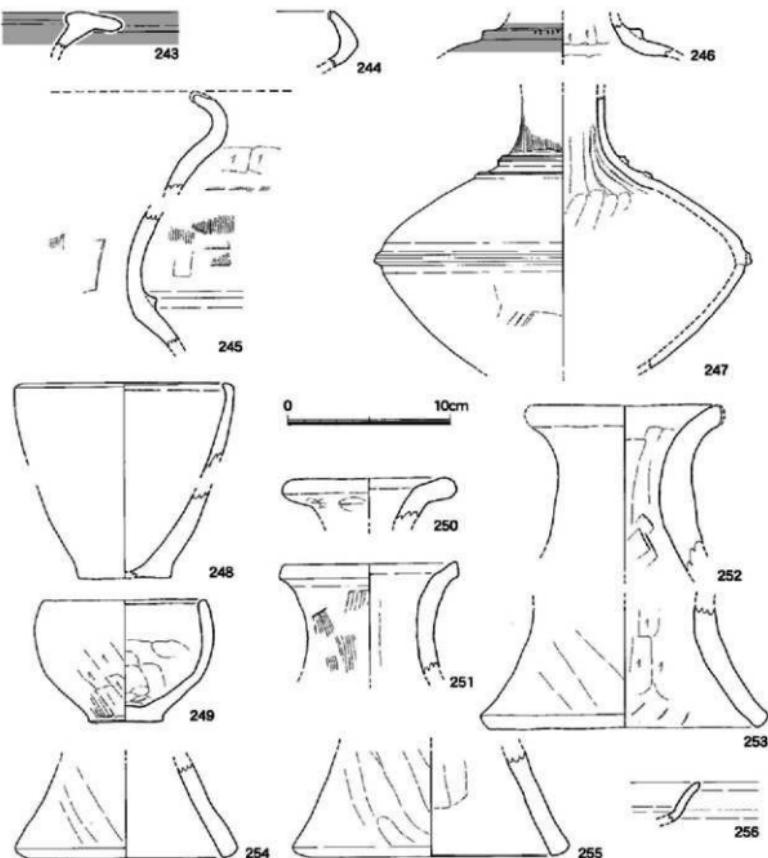


Fig.31 SX-001出土土器実測図III (1/3)

盤玉形の偏球形胴で、台形突帯を肩部に2条、中位に1条貼付する。外面は頭部が縦刷毛目、胴部が研磨状の丁寧なナデで、突帶付近を横ナデ。内面は頭部にシボリ痕、肩部に指頭整形痕がある。248は鉢で、口縁と底部があり接合しない。口縁を少し内側に折り曲げる。調整痕は残らない。249は小形の鉢で、考古学的完形。外面下半刷毛目→上半工具ナデ、内面指頭整形→工具ナデ。250は器台口縁部。外面指押え後ナデ、内面ナデ。251も器台口縁部。外面縦刷毛目、内面刷毛目→ナデ、口縁横ナデ。252は器台上半部で分厚い。摩滅するが外面縦刷毛目、内面工具による調整後ナデか。253は器台底部で252と同一個体か。外面指頭によるシボリ状の整形、内面は工具小口痕をナデ消し。254も器台底部。外面に指頭によるシボリ状の整形痕が残る。255も器台底部片。外面シボリ状整形、内面指頭整形→ナデ。

256は古代の須恵器皿小片。横ナデで、外底ヘラ切り。灰青色、細かい白色粒を少量含み、焼成良好。

(6) ローム層出土石器とその他の石器・鉄器 Fig.32・33

遺構検出中に地山ローム層から黒曜石が出土した。南側の第41次調査では旧石器時代の調査を行っており、包含層が当地点まで広がっている可能性もあるため、黒曜石出土地点を中心的に地山ローム層の掘り下げを行った。調査区が狭いうえ遺構が密に分布してローム自体の残りが悪く、調査対象たり得たのはFig.32にアミで示した部分のみである。

257-262は旧石器時代の黒曜石製石器と思われる。いずれも遺構検出面から10cm以内のローム層上部から出土したが、257・258は出土位置を押さえられなかった。257は右側縁に軽微な使用痕のある剝片で、上端は主要剝離面側から力が加わって折れている。背面は自然面である。258は剝片で、上端は新しい欠損である。259は右側縁に背面側から刃溝し状の二次加工を施しており、破損したナイフ形石器の可能性がある。260は主要剝離面上端に二次加工のある剝片である。261は彫器である。原礫から剥ぎ出した分厚いファーストフレイクの小口部に打面を作り、側縁に橢状削離を施す。更にこの削離面を打面として背面側に細かい剝離が繰り返され、角（アミ部）が潰されている。第41次調査出土の彫器に類似する。262は石核で、両側面と背面に下方向から剝離後、正面に上方から剝離し、最後に右側から打撃して打面を大きく飛ばしている。バティナが著しく、発掘時の傷が多い。以上の石材は262のみが漆黒色で僅かに青味のある不透明黒曜石（針尾産）で、他の5点はいずれも漆黒色の半透明黒曜石で赤味のある灰褐色粒子の帯が入る。257は腰岳産か。（以上、吉留秀敏氏ご教示）

263はチップで、下端は発掘時に欠損した。漆黒色半透明の腰岳産と思われる黒曜石で、SD-030から出土した。弥生時代のものか。264は打製石鎌で、作りが粗い。安山岩製。SX-001出土。265は石庵丁片で、直刃か。玄武岩製で風化が著しい。SE-034出土。266も石庵丁片で、砂岩系の石材を用いる。SK-020出土。267は小形の砥石で、正面のみ研磨され稜が浮き出る。安山岩製か。SD-030出土。268は磨石で、円礫の周縁部を磨っている。SE-034出土。269は方柱形の小形の砥石片で、四側面を使用するが、特に下面の研磨が顕著でよく窺む。硬質砂岩製。SX-010出土。270は砥石の表面が剥げ落ちたもので、上面以外は全て割れる。使用により滑らかで浅く窪み、刃物傷がある。硬質砂岩製か。SX-001出土。271は大形の砥石片で、正面が研磨により滑らかで浅く窪み、刃物傷がある。右側面と裏面の一部にも研磨痕がある。硬質砂岩製。SE-034出土。272も大形砥石の一部で、上面以外は全て割れている。使用により平滑である。硬質砂岩製。SD-025出土。273も大形の砥石で、左側面以外は滑らかである。右側面を主に砥面として用い、上下の斜面も使用する。表裏平坦面は研磨痕に加え敲打痕があり、台石としても使用している。花崗岩製。SE-034出土。

274は鉄製の小形刀子である。中央部が欠損しており長さは不明である。鹿角製の装具を着柄する。SK-018出土。

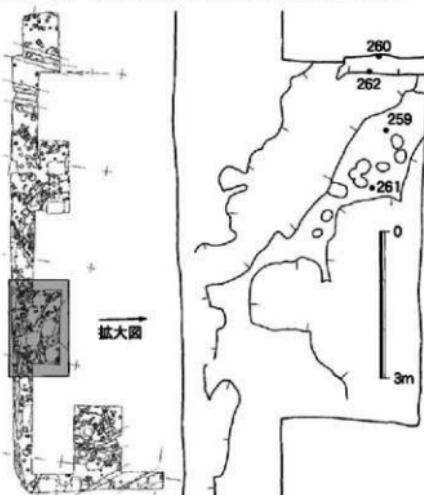


Fig.32 旧石器出土地点位置図 (1/100)

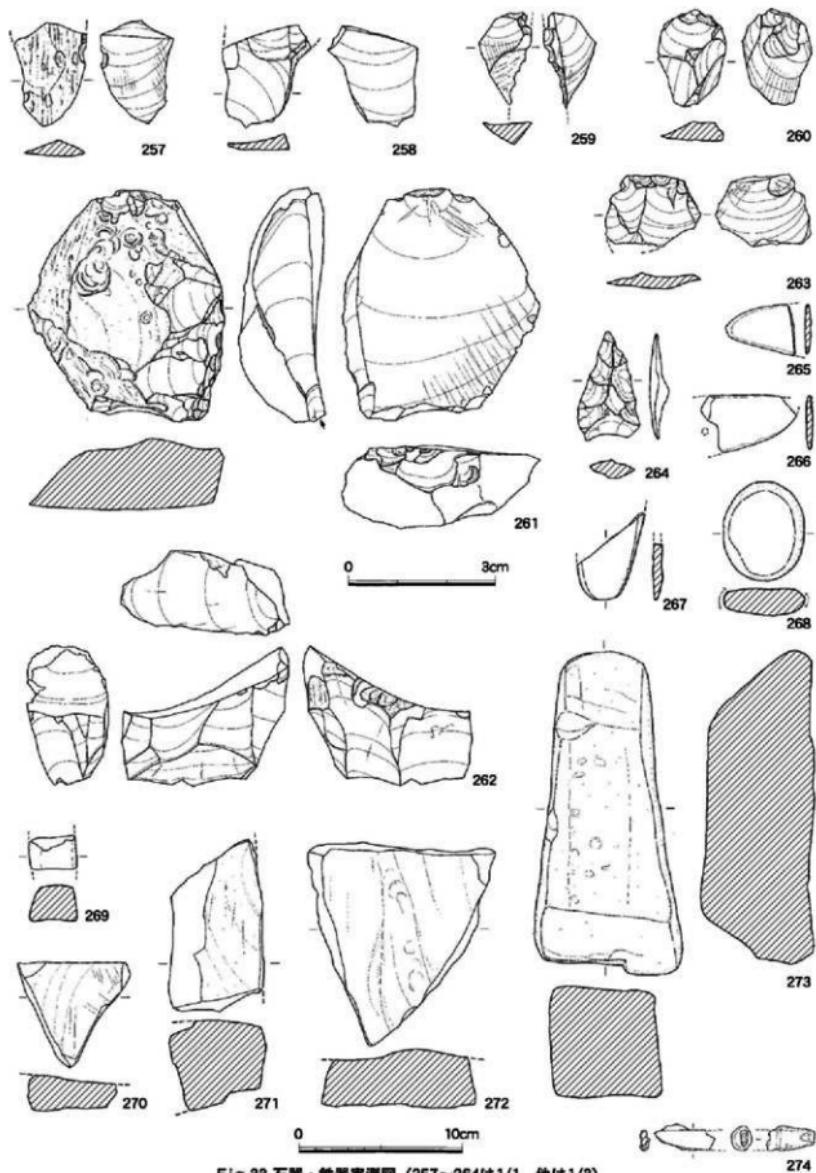


Fig.33 石器・鉄器実測図 (257~264は1/1、他は1/3)

6. 小結 Fig.34

検出遺構を時代別に整理すると、①弥生時代中期末～後期中葉の溝2 (SD-026・030)・井戸3 (SE-032・034・035)、弥生時代と思われる竪穴住居1 (SK-017)、②遺物は弥生土器のみだが古墳時代前期の方形周溝墓と考えられる溝1 (SD-015)、③古墳時代後期の溝状遺構2 (SD-007・009)・性格不明遺構1 (SX-025)、④古墳時代後期以降の溝2 (SD-002・SD-003)、⑤弥生～古墳時代と考えられる土坑7である。この他、第41次調査の旧石器時代包含層が当地点まで広がることを確認した。彫器など類似する石器があり同一文化層であろう。

周辺には既調査区が多く、これらとの関係を整理しておく。①弥生時代の溝2条は、周辺調査区では延長線上に位置するものがない。SD-026は北端が立ち上がって陸橋状をなし、第41次に類似遺構SD-004があり環濠の可能性が指摘されているが、これと関係しようか。底面から小壺2・複合口縁壺1がまとまって出土した井戸は後期中葉に属し、周辺調査（第79次など）においてもこの時期の井戸には祭祀行為が認められる事例が多い。②SD-015は出土土器に時期を示すものはないが、形態と周辺調査事例から古墳時代前期の方形周溝墓のコーナー部とみられる。第9・41・70次で方形周溝墓を確認しており、今回の1基が墓域の北端にあたる。③古墳時代後期の溝SD-007 (014)は極めて浅いが弧状に巡っており、第44・79次で後期古墳周濠を確認していることから、円墳の可能性がある。④溝SD-003は南側の第41次で検出した溝SD-006の延長線上に位置し、磁北から16°東の方位に直線的に伸びて行く溝であることを確認した。第41次により8世紀代遺構であろう。

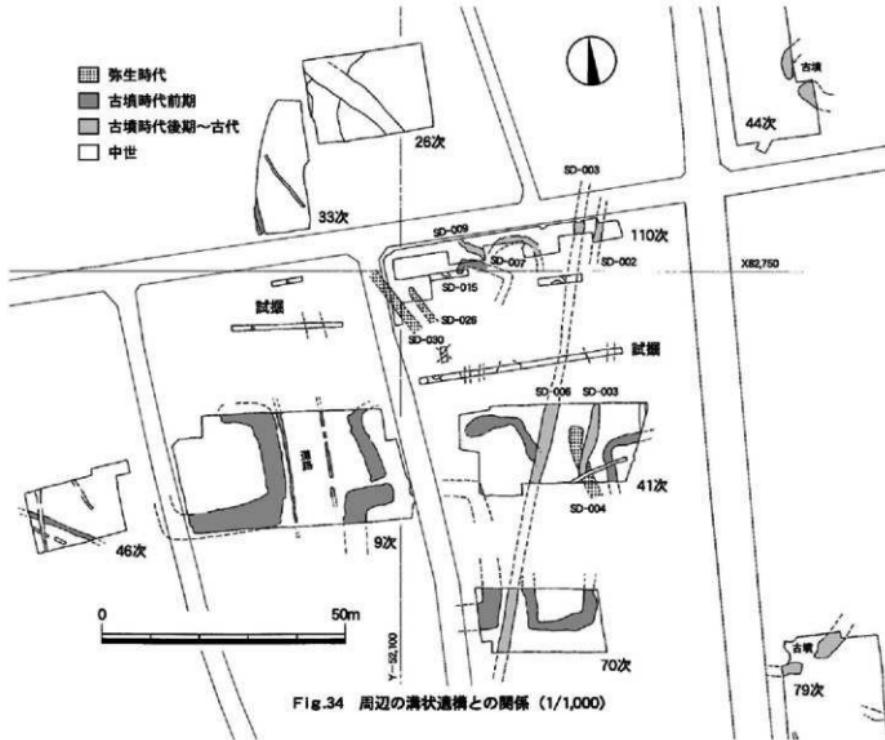


Fig.34 周辺の溝状遺構との関係 (1/1,000)



1. 調査区北辺
東半（西から）



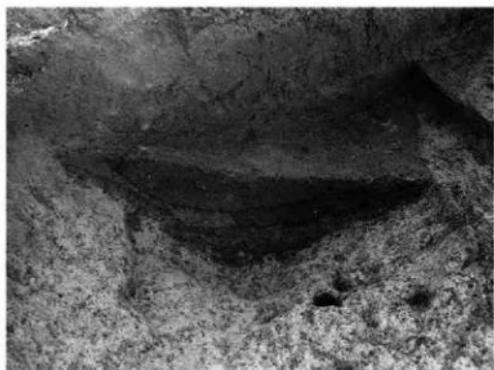
2. 調査区北辺
西半（西から）



1. 調査区北辺西半（東から）



2. 調査区西辺（東から）



1. 溝SD-002土層（北から）



2. 溝SD-003土層（北から）



3. 溝SD-003（北から）



4. 溝SD-009（北西から）



5. 方形周溝墓SD-015・土坑SK-016（北西から）



6. 方形周溝墓SD-015・土坑SK-016（西から）

PL.4



1. 溝SD-022（東から）



2. 溝SD-025（南から）



3. 溝SD-026（北西から）



4. 溝SD-030（北から）



5. 溝SD-030土層（南東から）



6. 井戸SE-032（北西から）



1. 井戸SE-034（北から）



2. 井戸SE-034遺物出土状況（北から）



3. 井戸SE-035（北から）



4. 土坑SK-017（西から）



5. 土坑SK-020（北から）



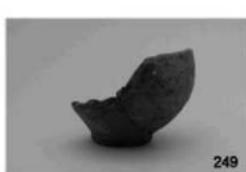
6. 土坑SK-021（北西から）



1. ローム層石器出土状況（西から）



2. 調査作業風景（南東から）



3. 第110次調査出土遺物（縮尺不同）

第六章 那珂遺跡群第118次調査の記録

遺跡名	那珂遺跡群第118次調査		遺跡調査番号	0719	
遺跡略号	NAK-118		調査地	博多区那珂1丁目390-1	
開発面積	131.31m ²	調査対象面積	131.31m ²	調査面積	80m ²
調査期間	2007年(平成19年) 6月11日～6月27日				

例　言

1. 本書は、個人住宅の建築に伴い福岡市教育委員会が平成19年6月11日～27日まで博多区那珂1丁目390-1地内で発掘調査を実施した那珂遺跡第118次調査の本報告である。
2. 発掘調査・報告書作成については国庫補助事業として行った。
3. 本書に使用した遺構・遺物実測図の作成、製図、および写真的撮影は濱石哲也が行った。座標測量などについては藤野雅基、石器実測について立石真二（ともに福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課技能員）の協力を得た。
4. 本書に用いた方位は座標北である。
5. 本調査に関する記録類、出土遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収藏する予定である。
6. 本報告についての執筆は濱石が行った。

本文目次

1. 調査に至る経緯	141
2. 調査の記録	142
3.まとめ	145

挿図目次

Fig. 1 第118次調査地点位置図 (1/4000)	141
Fig. 2 調査区全体図および南北断面図 (1/100)	142
Fig. 3 SC01およびピット土層断面実測図 (1/40)	143
Fig. 4 出土遺物実測図 (1/3)	144

図版目次

PL. 1 西側調査区全景 (南東から)	145
PL. 2 西側調査区全景 (南西から)	146
PL. 3 西側調査区全景 (北から)	146
PL. 4 東側調査区全景 (南から)	146
PL. 5 東側調査区全景 (北から)	146
PL. 6 SC01床面状況 (北から)	146
PL. 7 SC01完掘状況 (北から)	146

1. 調査に至る経緯

福岡平野の中央部、那珂川と御笠川に挟まれた丘陵部にある比恵、那珂の南北に相連なる遺跡は、弥生時代から古代を中心とした遺構・遺物が濃い密度で広がっていることが古くから知られていた。両遺跡の地域はJR博多駅のすぐ南側という好立地から、1970年代以降商業ビル、共同住宅をはじめとした再開発が著しく進み、これに伴う埋蔵文化財の届出等も増加するとともに、2008年11月末までに比恵遺跡で115次、那珂遺跡で122次におよぶ発掘調査を実施するに至っている。

平成19年（2007）年4月19日、大石正直氏から福岡市教育委員会に、博多区那珂一丁目390-1地内での自宅（個人住宅）の建築に先立ち「埋蔵文化財の有無について」の照会がなされた。当該地は那珂遺跡の中央部分に位置し、すでに平成9年度と平成18年度の二度確認調査を行い、表土直下のローム面から遺構が検出されていた場所であった。工事計画は、北側の道路から南側に約1m高くなった敷地を道路面まで削平したうえで住宅を建築するというもので、確認調査の結果からみて遺構の破壊はまぬがれない状況であった。教育委員会では事業者との協議を重ねたが、当初の工事計画を変えることは困難と判断し、個人住宅であるところから国庫補助事業として発掘調査を実施することにした。

発掘調査は平成19年6月11日の表土剥ぎから開始し、同月27日に終了した。梅雨時期の調査で、作業を休止した日もあり、実働日数は10日であった。また調査は、廃土の搬出ができなかつたため敷地内で東西に反転して行った。

調査は教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課（課長 山口謙治）が実施し、濱石哲也（同課主任文化財主事）が現場を担当した。庶務は同部管理課の鈴木由喜が行った。

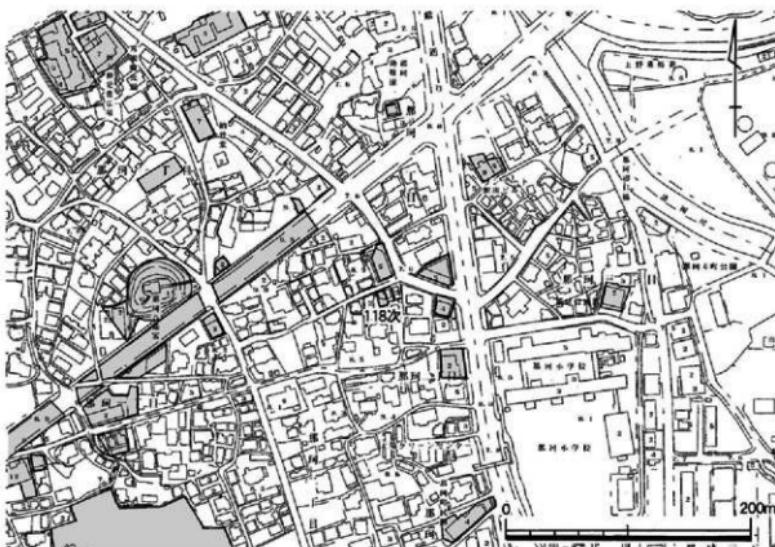




Fig. 2 調査区全体図および南北断面図 (1/100) アミは擾乱

2. 調査の記録

第118次調査地点は那河遺跡群中央のやや東寄りに位置し、遺跡群中央にある那河八幡古墳の東南約200m、遺跡群の東縁を走る筑紫通りから50mほど西に入った所にあたる。周辺には住宅が密集しており、調査地点は住宅の解体後更地となっていた。北側には幅3.5mの路地が間口9m、奥行き14

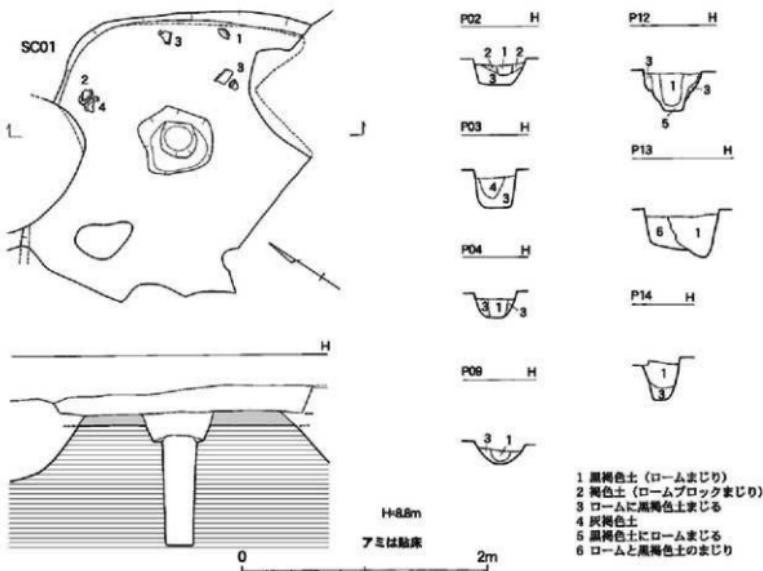


Fig. 3 SC01およびピット土層断面実測図 (1/40)

mほどの調査地点に接して通り、道路から南に3~5mが傾斜地となり、その南側は道路から1m前後高くなっている状態であった。道路部分の標高は7.6m、南端部の標高は8.7mをはかる。

調査は西側（東西幅約6m）の表土剥ぎから開始した。中央部は10~30cmの表土直下にローム面があらわれたが、北側傾斜地部分は大きく切り土が行われ、また南側は現代の擾乱が構造に入っていることが判明した。ローム面も解体された建物に伴う擾乱が著しく、その間に造構を確認できる状況であった（PL.1~3）。西側終了後、東側（東西幅約2m）の調査を行ったが、ここもほとんどが現代の擾乱であった（PL.4~5）。検出した造構は堅穴住居1基（SC01）、ピット19がすべてで、確認調査結果と同じくその密度は薄く、出土遺物もコンテナ1箱にとどまった。発掘調査面積は80m²。

SC01 (Fig.3, PL.6・7)

西南隅で検出した貼床をもつ方形状の堅穴住居である。南側と北側の一部を現代擾乱が破壊し、また西側は調査区外にのびるため、北東隅から東の側壁と約4m²の床面を検出したにとどまる。壁高は残りのよいところで20cm。東南隅から1.15m内側の床面に主柱穴のひとつとみられる径60cmのピットがある。深さ110cmで、床面から20cmのところに段がつく。覆土はロームのブロックが混じった灰味をおびた褐色土。貼床はロームに黒褐色土が混じた土で厚さ10cm。残存した側壁に沿うように、床面に密着したり、10cmほど浮いた状態で須恵器、土師器の破片が出土した。

出土遺物 (Fig.4, 1~4) 1は須恵器杯蓋。復元口径15.0cm、器高4.5cm。全体に丸みをおび、天井部の調整は回転ヘラ削りとみられる。焼成はきわめてあくまで淡褐色を呈し、土師器のようである。

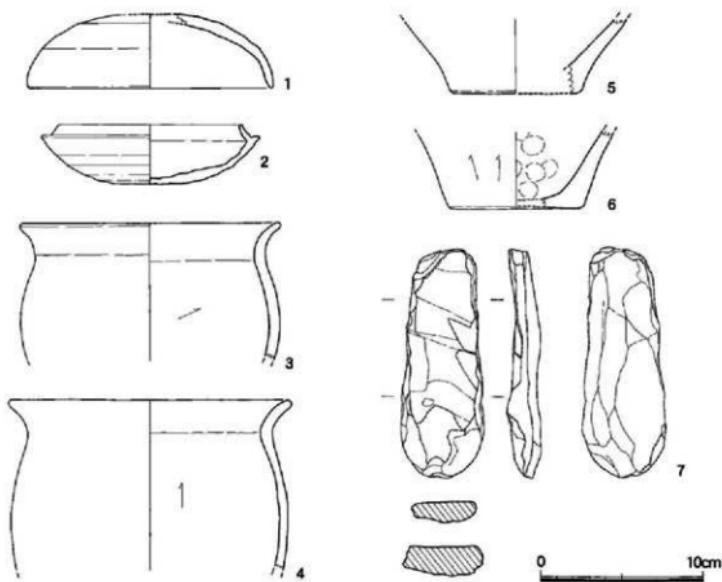


Fig. 4 出土遺物実測図 (1/3)

2は須恵器杯身。復元口径11.2cm、器高3.7cm。受け身は浅く、立ち上がりは内傾する。底部は回転ヘラ削り。焼成は堅緻で、暗灰色を呈する。3・4は土師器壺。ともに張りの小さな脇部から口縁部が丸みをおびて外反する。器表は摩滅しているが、内面はヘラ削りで焦げ付きの跡が残る。砂粒を多く含んだ胎土で、赤褐色を呈する。出土位置はFig. 3の平面図に示した番号と一致する。3は二ヶ所のものが接合した。覆土からはほかに土師器高杯、弥生土器小片が、貼床内からは弥生土器片が出土した。

ピット (Fig. 2・3)

P02~17、20~22のあわせて19のピットを検出した。円、隅丸方形、梢円などの上面形態を呈し、大きさは30~60cm、底面標高は7.89~8.30mで8m前後のものが多い。多くのピットが柱痕跡をもつが、建物としてまとまるものはない。南からP04-02-09-12-13と筋が通るものはみられるが、柱間はまちまちである。ピット同士の切り合いや、SC01がP05を切っていることから、遺構間での時期差があることは確実である。P02、06~09、11、13、17は弥生土器のみが出土している。P10、15は無遺物、ほかは土師器が混じる。いくつかのピットの土層断面を図示したが、覆土には大きな違いはない。

出土遺物 (Fig. 4, 5・6) ともに弥生土器の壺底部片である。5はP08からの出土で、復元底径8.0cm、やや張りのある脇部に続く。器表は摩滅し、調整不明。6はP20からの出土で、復元底径8.3cm、脇部の張りは小さい。外面は縱刷毛目の痕跡、内面は指押さえの後ナデを行っている。ともに砂粒を多

く含んだ胎土で、焼成良好、5の外面が淡褐色、6の外面が赤褐色を呈する。6の内底には焦げ付きの痕がある。

その他の遺物 (Fig.4, 7)

攪乱中から出土した滑石片岩製の石斧である。長さ14.1cm、幅5.1cm、厚さ2.0cm、重量196.5g。片面は上面を磨き仕上げるが、もう一面は打製のままである。

3.まとめ

今回の調査地は従前が宅地で、また表土直下が遺構面であることから攪乱等が著しく、かろうじて古墳時代後期の竪穴住居跡 (SC01) の一部と建物としてはまとめきれない弥生時代および古墳時代後期の柱穴群を検出したにとどまる。竪穴住居の営まれた時期は出土した須恵器から6世紀後半～末頃とみられる。北側の第74次調査地点では今次の竪穴住居跡とほぼ同時期の井戸が検出されており、また周辺の7次、40次調査でも同時期の竪穴住居などの生活遺構が確認されている。今回の調査は那珂遺跡群における古墳時代後期集落の東縁部分の状況を示す一資料を提出したといえる。



P L. 1 西側調査区全景 (南東から)



P L.2 西側調査区全景（南西から）



P L.3 西側調査区全景（北から）



P L.4 東側調査区全景（南から）



P L.5 東側調査区全景（北から）



P L.6 SC01床面状況（北から）



P L.7 SC01壳面状況（北から）

報告書抄録

調査概要	遺跡名	なか 52—ないせきぐんだい80-83-84-98-110-118じちょうさはうこく—		
	発行年月日	那珂 52 一郷町遺跡群第80-83-84-98-110-118次調査報告書		
	シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
	シリーズ番号	1033		
	編著者名	久住謙雄(3)鷹牧宏行(4)横石智也(5)吉武学(その他・編集)*数字は章を表す		
	編集委員会	福岡市教育委員会		
	所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-6667		
	西暦	2009年3月31日		
	市町村コード	40130		
	東京都番号	0085		
	調査原因	個人住宅・集合住宅建設(国庫補助申請)		
調査結果	遺跡名	なか 52—ないせきぐんだい80-83-84-98-110-118じちょうさはうこく—		
	所在地	那珂遺跡群第80次	那珂遺跡群第83次	
	北緯	33° 34' 19"	33° 34' 11"	
	東経	130° 26' 01"	130° 26' 07"	
	調査期間	2001.07.31~2001.08.16	2001.12.20~2002.01.10	
	調査面積(m ²)	52.8m ²	200m ²	
	種別	古墳時代	古墳時代	
	主な時代	弥生時代	中世	古代
	主な遺構	竪穴式土坑1+溝1 竪穴式住居1+溝1	土坑1	前方後方形周溝墓1+竪穴住居1+溝2+土坑3
	主な遺物	弥生土器+古式土器	土師器+須恵器	土師器+須恵器+陶磁器
	特記事項	史跡標識を主体とする弥生墓地		
調査結果	遺跡名	なか 52—ないせきぐんだい84-85-86-87-88-89-90-91-92-93	なか 52—ないせきぐんだい84-85-86-87-88-89-90-91-92-93	
	所在地	那珂遺跡群第84次	那珂遺跡群第90次	
	北緯	33° 34' 11"	33° 33' 60"	
	東経	130° 26' 07"	130° 26' 21"	
	調査期間	2002.05.10~2002.05.14	2004.05.10~2004.05.11	
	調査面積(m ²)	150.25m ²	65m ²	
	種別	集落・墓地	集落	
	主な時代	弥生中期~古墳前期	古墳後期	中世
	主な遺構	前方後方形周溝墓+溝状遺構2	竪穴住居3ヶ	竪穴住居4
	主な遺物	弥生土器+古式土器	土師器+須恵器 器+陶磁器	土師器+須恵器+石器 +瓦
	特記事項	83次の所調原が前方後方と判明。確認調査		
調査結果	遺跡名	なか 52—ないせきぐんだい110-111-112-113-114-115-116-117-118-119	なか 52—ないせきぐんだい118-119	
	所在地	那珂遺跡群第110次	那珂遺跡群第118次	
	北緯	33° 34' 04"	33° 34' 14"	
	東経	130° 26' 12"	130° 26' 15"	
	調査期間	2005.11.15~2005.12.20	2007.06.11~2007.06.27	
	調査面積(m ²)	257m ²	80m ²	
	種別	集落・墓地	集落	
	主な時代	弥生時代	古墳時代	古墳時代
	主な遺構	溝2+井戸3+方墳周溝墓1+竪穴1+土坑 +不明+土坑	溝2	竪穴住居+ピット
	主な遺物	弥生土器+土師器+須恵器+陶磁器+石器	土師器+須恵器+石器	土師器+須恵器+弥生土器
	特記事項	旧石器時代遺物も出土		

那珂 52

—那珂遺跡群第80・83・84・98・110・118次調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1033集

2009年(平成21年) 3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社 博巧印刷

福岡市南区那の川1丁目9-7